福岡市埋蔵文化財調査報告書　第 1445 集

# 名 子 遺 跡 2

－名子遺跡第 5 次調査報告－

2 0 2 2

福 岡 市 教 育 委 員 会

# 名子遺跡 2

－名子遺跡第５次調査報告－

遺跡略号　NAO 5

調査番号　１９６１

２０２２

福岡市教育委員会

# 序

古くから大陸との文化交流の門戸として発展を遂げてきた福岡市には、歴史的遺産が数多く残されており、それらを保護し、後世に伝えることはわたしたちの重要な責務であります。

しかしながら、近年の都市開発によって地下に埋もれた貴重な先人の足跡が失われていくことも事実です。そのため本市では、事前に埋蔵文化財の発掘調査を実施し、記録を残すことで、後の時代まで伝えるよう努めています。

本書は、名子遺跡第５次調査について報告するものです。このたびの調査では、奈良時代の官道側溝と思われる直線的な溝や、古墳時代後期を主体する集落跡が見つかり、名子地区の歴史をあきらかにするうえで重要な成果を得ました。今後、本書が文化財保護に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、事業者様をはじめとする関係者の方々には発掘調査から本書の刊行に至るまで、多大なご理解とご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

令和４年３月24日

福岡市教育委員会
教育長　星子　明夫

# 例　　言

1．　本書は、福岡市教育委員会が福岡市東区名子三丁目の店舗建設工事に先立ち、令和元（2019）・令和２（2020）年度に実施した名子遺跡第５次調査の発掘調査報告書である。
2．　発掘調査および整理・報告書作成は民間受託・国庫補助事業として実施した。
3．　本書の執筆と編集は神啓崇が担当した。
4．　本書の遺構・遺物実測図の作成、製図は神が担当した。遺構実測図のうち、トレンチの遺構配置図は本田浩二郎が作成した。拓本は中間千衣子が担当した。
5．　本書の遺構・遺物写真は神が撮影した。
6．　本書の遺構実測図中の方位はすべて座標北である。
7．　本書掲載の座標は世界測地系で、標高は街区多角点３級 10C88（H ＝ 15.847m）を基準とした。
8．　検出遺構は、001 から検出順に通し番号を付けた。
9．　本書で使用した遺構略号は以下のとおりである。
　ＳＢ 掘立柱建物　ＳＣ 竪穴建物　ＳＤ 溝　ＳＫ 土坑　ＳＰ 柱穴　ＳＸ 不明遺構
10．　本調査に関わる記録・遺物類は報告終了後、福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・管理・公開する予定である。大いに活用していただきたい。
11．　遺構実測図のうち、掘方・下面検出遺構等はグレー色線で表現した。また、網掛けは以下の通りである。
　炭・炭粒　焼土　強く焼けた焼土

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 遺跡名 | 名子遺跡 | 調査次数 | ５次 | 調査略号 | NAO-5 |
| 調査番号 | 1961 | 分布地図図幅名 | 八田　7 | 遺跡登録番号 | 2829 |
| 事業対象面積 | 4809.00㎡ | 調査面積 | 2219.00㎡ | 事前審査番号 | 2019-2-613 |
| 調査期間 | 令和２（2020）年１月 20 日－令和２（2020）年５月 29 日 | | | | |
| 調査地 | 福岡市東区名子三丁目 778 番３、781 番１、782 番１、783 番１、785 番１、785 番４、780 番４、781 番１地先水路 | | | | |

# 本文目次

**第Ⅰ章　はじめに** …… 1
1．調査にいたる経緯 …… 1
2．調査体制 …… 1
**第Ⅱ章　遺跡の立地と歴史的環境** …… 2
**第Ⅲ章　発掘調査の記録** …… 4
1．調査の経過と概要 …… 4
2．遺構と遺物 …… 6
（1）竪穴建物 …… 6
SC020 …… 6
SC023 …… 8
SC050 …… 8
SC060 …… 8
SC080 …… 11
SC090 …… 12
SC140 …… 12
SC100 …… 13
SC120 …… 15
SC128 …… 17
SC130 …… 17
SC170 …… 18
SC175 …… 19
SC192 …… 19
SC180 …… 20
SC210 …… 20
SC187 …… 21
SC190 …… 22
SC200 …… 22
SC220 …… 24
SC250 …… 25
SC280 …… 27
SC300 …… 27
SC350 …… 28
SC460 …… 31
（2）掘立柱建物 …… 33
SB240 …… 33
SB270 …… 34
SB470 …… 34
SB520 …… 37
SB521 …… 37
SB522 …… 37
SB523 …… 38
SB524 …… 38
SB525 …… 38
（3）溝 …… 40
SD015 …… 40
SD030 …… 40
SD115 …… 40
SD150 …… 44
SD160 …… 48
SD195 …… 48
SD507 …… 48
（4）土坑 …… 49
SK024 …… 49
SK071 …… 49
SK260 …… 50
SK443 …… 54
SK456 …… 54
SK467 …… 54
（5）柱穴 …… 56
SP122 …… 56
SP386 …… 56
（6）不明遺構 …… 57
SX006 …… 57
SX073 …… 57
SX343 …… 57
SX450 …… 58
SX458 …… 60
**第Ⅳ章　総　括** …… 61
1．第5次調査の成果 …… 61
2．古代西海道大宰府路について …… 61

# 挿図目次


図1　名子遺跡周辺遺跡図（S=1/25000）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
図2　名子遺跡第5次調査地点位置図（S=1/2000）・・・・・・・・・・・・・・3
図3　遺構配置図（S=1/750）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
図4　遺構配置図（S=1/300）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
図5　SC020 実測図（S=1/50）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
図6　SC020 カマド実測図・土層図（S=1/30）・・・・・・・・・・・・・・・・・7
図7　SC020 掘方実測図（S=1/50）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
図8　SC020 出土遺物実測図（S=1/3、9 は S=1/2）・・・・・・・・・・・・8
図9　SC023 実測図（S=1/50）・出土遺物実測図（S=1/2）・・・・・9
図10　SC050 実測図（S=1/50）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
図11　SC050 カマド実測図（S=1/30）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
図12　SC060・SC080 実測図（S=1/50）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
図13　SC060 実測図（S=1/100）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
図14　SC060・SC080 出土遺物実測図（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・11
図15　SC090・SC140 実測図（S=1/50）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
図16　SC090 カマド実測図・土層図（S=1/30）・・・・・・・・・・・・・・・・13
図17　SC090 出土遺物実測図（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
図18　SP132・SC140 出土遺物実測図（41・42 は S=1/2、43 は S=1/1）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
図19　SC100・SC100 掘方実測図（S=1/50）・・・・・・・・・・・・・・・・・14
図20　SC100 カマド実測図（S=1/30）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
図21　SC100 出土遺物実測図（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
図22　SC120 実測図（S=1/50）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
図23　SC120 カマド実測図（S=1/30）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
図24　SC120 出土遺物実測図（S=1/3、51 のみ S=1/1）　16
図25　SC128 実測図（S=1/50）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
図26　SC130 実測図（S=1/50）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
図27　SC130 出土遺物実測図（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
図28　SC170 実測図（S ＝ 1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
図29　SC170 出土遺物実測図（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
図30　SC175・SC192 実測図（S=1/50）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
図31　SC175・SC192 出土遺物実測図（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・19
図32　SC180・SC210 実測図（S=1/50）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
図33　SC210 カマド実測図（S=1/30）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
図34　SC180・SC210・SP197・SP202 出土遺物実測図（S=1/3）・・・・21
図35　SC187 実測図（S=1/50）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
図36　SC190 実測図（S=1/50）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
図37　SC190 カマド実測図（S=1/30）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
図38　SC200 実測図（S=1/50）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
図39　SC190・SC200 出土遺物実測図（S=1/3、92 は S=1/2）・・・・・・・23
図40　SC220 実測図（S=1/50）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
図41　SC220 カマド実測図（S=1/30）・出土遺物実測図（S=1/3）・・・・24
図42　SC250 実測図（S=1/50）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
図43　SC250 カマド実測図・土層図（S=1/30）・・・・・・・・・・・・・・・・26
図44　SC250 出土遺物実測図（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26
図45　SC280 実測図（S=1/50）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
図46　SC280 出土遺物実測図（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28
図47　SC300 実測図（S=1/50）・炉土層図（S=1/30）・・・・・・・・・・29
図48　SC300 出土遺物実測図（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29
図49　SC350 実測図（S=1/50）・炉土層図（S=1/30）・・・・・・・・・・30
図50　SC350 出土遺物実測図（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30
図51　SC350・SP433 出土遺物実測図（S=1/2、152 は S=1/1）・・・・・・31
図52　SC460 実測図（S=1/50）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32
図53　SC460 カマド実測図（S=1/30）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32
図54　SC460 出土遺物実測図（S=1/3、162 は S=1/2）・・・・・・・・・32
図55　SB240 実測図（S=1/50）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
図56　SB240 出土遺物実測図（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
図57　SB270 実測図（S=1/50）・出土遺物実測図（S=1/3）・・・・・34
図58　SB470 実測図（S=1/50）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35
図59　SB470 出土遺物実測図（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35
図60　SB520・SB521 実測図（S=1/50）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36
図61　SP363 出土遺物実測図（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37
図62　SB522 実測図（S=1/50）・出土遺物実測図（S=1/3）・・・・・37
図63　SB523 実測図（S=1/50）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・38
図64　SB523 出土遺物実測図（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・38
図65　SB524 実測図（S=1/50）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・39
図66　SB525 実測図（S=1/50）・出土遺物実測図（S=1/3・・・・・39
図67　SD015 土層図（S=1/40）・出土遺物実測図（182 は S=1/2、183 は S=1/1）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41
図68　SD030 土層図（S=1/40）・出土遺物実測図（S=1/3、184 のみ S=1/2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41
図69　SD115 実測図（S=1/250）・土層図・断面図（S=1/40）・・42
図70　SD115 上層出土遺物（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43
図71　SD115 下層出土遺物（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43
図72　SD115 実測図（S=1/250）・土層図・断面図（S=1/40）・個別出土状況図（S=1/20）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・44
図73　SD150 出土遺物実測図（１）（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・45
図74　SD150 出土遺物実測図（２）（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・46

図 75　SD150 出土遺物実測図（３）（S=1/3）…… 47
図 76　SD115・SD150 出土遺物実測図（S=1/3）…… 47
図 77　SD160 土層図（S=1/40）・出土遺物実測図（S=1/3）…… 48
図 78　SD195 土層図（S=1/40）・出土遺物実測図（S=1/3）…… 48
図 79　SD507 実測図（S=1/30）・出土遺物実測図（S=1/3）…… 48
図 80　SK024 実測図（S=1/20）・出土遺物実測図（S=1/3）…… 49
図 81　SK071 実測図（S=1/40）・出土遺物実測図（S=1/3）…… 49
図 82　SK260 実測図（S=1/40）…… 50
図 83　SK260 出土遺物実測図（１）（S=1/3）…… 51
図 84　SK260 出土遺物実測図（２）（S=1/3、337・338 は S=1/2）… 53
図 85　SK260・SC280 検出時出土遺物実測図（S=1/3）…… 54
図 86　SK443 実測図（S=1/30）・出土遺物実測図（S=1/3）…… 55
図 87　SK456 実測図（S=1/20）・出土遺物実測図（S=1/3）…… 55
図 88　SK467 実測図（S=1/30）・出土遺物実測図（S=1/3）…… 56
図 89　SP122・SP386 実測図（S=1/30）・出土遺物実測図（S=1/3）・・ 89
図 90　SX006 土層図（S=1/40）…… 57
図 91　SX073 実測図（S=1/30）・出土遺物実測図（S=1/3）…… 57
図 92　SX343 出土遺物実測図（378 は S=1/3、379 は S=1/1）・・ 57
図 93　SX450 配置図（S=1/100）…… 58
図 94　SX450 実測図（S=1/30）…… 58
図 95　SX450 出土遺物実測図（S=1/3、396 のみ S=1/1）…… 59
図 96　SX458 実測図（S=1/30）・出土遺物実測図（S=1/3）…… 60
図 97　その他の出土遺物実測図（S=1/3、403 ～ 409 は S=1/2 …… 60
図 98　先行研究図 …… 62
図 99　名子遺跡周辺の西海道大宰府路推定線 …… 63

# 写真図版　目次

Ph.1　第５次調査地点より名子地区を望む（北から）…… 65
Ph.2　調査区全景（南西から）…… 66
Ph.3　調査区全景（北から）…… 66
Ph.4　調査区全景（北東から）…… 67
Ph.5　調査区中央付近（南西から）…… 67
Ph.6　SC020（南東から）…… 68
Ph.7　SC020 掘方（南東から）…… 68
Ph.8　SC020 カマド（南東から）…… 68
Ph.9　SC020 カマド土層（南東から）…… 68
Ph.10　SC020 カマド土層（北東から）…… 68
Ph.11　SC050 カマド（南東から）…… 68
Ph.12　SC023（北西から）…… 68
Ph.13　SC050（南東から）…… 68
Ph.14　SC060 掘方（南東から）…… 69
Ph.15　SC080（南東から）…… 69
Ph.16　SC090（南西から）…… 69
Ph.17　SC090 掘方（南西から）…… 69
Ph.18　SC090 カマド（南西から）…… 69
Ph.19　SC100（南西から）…… 69
Ph.20　SC100 掘方（南西から）…… 69
Ph.21　SC100 カマド（南西から）…… 69
Ph.22　SC120（南東から）…… 70
Ph.23　SC120 完掘（南東から）…… 70
Ph.24　SC120 カマド（南東から）…… 70
Ph.25　SC120 カマド（南から）…… 70
Ph.26　SC128（南東から）…… 70
Ph.27　SC130（南東から）…… 70
Ph.28　SP179（北から）…… 70
Ph.29　SC170（北東から）…… 71
Ph.30　SC170 掘方（北東から）…… 71
Ph.31　SC210（南西から）…… 71
Ph.32　SC210 掘方（南西から）…… 71
Ph.33　SC175・SC192（南東から）…… 71
Ph.34　SC190（南から）…… 72
Ph.35　SC190 掘方（南から）…… 72
Ph.36　SC190 カマド（南から）…… 72
Ph.37　SC200（南から）…… 72
Ph.38　SC220（南西から）…… 72
Ph.39　SC220 掘方（南西から）…… 72
Ph.40　SC250（南西から）…… 73
Ph.41　SC250 掘方（南西から）…… 73
Ph.42　SC250 カマド（南西から）…… 73
Ph.43　SC250 遺物出土状況（北東から）…… 73
Ph.44　SC280・SK260（北東から）…… 74
Ph.45　SC300（南東から）…… 74
Ph.46　SC350（南東から）…… 75
Ph.47　SC460（南東から）…… 75
Ph.48　SC460 遺物出土状況（東から）…… 75
Ph.49　SC460 掘方（南東から）…… 75
Ph.50　SB240（北西から）…… 75
Ph.51　SB270（南東から）…… 76
Ph.52　SB270 完掘（北西から）…… 76
Ph.53　SB470 完掘（北西から）…… 76

Ph.54　SB525 完掘（北西から）…… 76
Ph.55　SD015 土層（北東から）…… 76
Ph.56　SD015 完掘（南西から）…… 76
Ph.57　SD030 土層（北東から）…… 77
Ph.58　SD030（北東から）…… 77
Ph.59　SD030（南西から）…… 77
Ph.60　SD115・SD150（西から）…… 78
Ph.61　SD115 土層（北東から）…… 78
Ph.62　SD150 土層（北東から）…… 78
Ph.63　SD150 提瓶出土状況（南から）…… 78
Ph.64　SD115 底面（西から）…… 78
Ph.65　SD150 遺物出土状況（南西から）…… 78
Ph.66　SD150 遺物出土状況（南から）…… 78
Ph.67　SD160（南西から）…… 79
Ph.68　SD160 土層（北東から）…… 79
Ph.69　SD160 杭検出状況（南から）…… 79
Ph.70　SD195（南東から）…… 79
Ph.71　SD195 土層（南東から）…… 79
Ph.72　SD507（南西から）…… 80
Ph.73　SD507 遺物出土状況（西から）…… 80
Ph.74　SK024（北東から）…… 80
Ph.75　SK260 土層（南西から）…… 80
Ph.76　SK443（北西から）…… 80
Ph.77　SK456（北西から）…… 80
Ph.78　SK467（南から）…… 81
Ph.79　SX006 土層（南から）…… 81
Ph.80　SX343（北西から）…… 81
Ph.81　SX450 遺物出土状況（西から）…… 82
Ph.82　SX450（北から）…… 82
Ph.83　SX458（南から）…… 82
Ph.84　調査風景（西から）…… 82
Ph.85　調査風景（南西から）…… 82
Ph.86　26 …… 83
Ph.87　45 …… 83
Ph.88　52 …… 83
Ph.89　73 …… 83
Ph.90　74 …… 83
Ph.91　109 …… 83
Ph.92　110 …… 83
Ph.93　112 …… 83
Ph.94　196 …… 84
Ph.95　197 …… 84
Ph.96　205 …… 84
Ph.97　210 …… 84
Ph.98　211 …… 84
Ph.99　212 …… 84
Ph.100　220 …… 84
Ph.101　223 …… 84
Ph.102　224 …… 84
Ph.103　225 …… 84
Ph.104　226 …… 84
Ph.105　228 …… 84
Ph.106　229 …… 85
Ph.107　231 …… 85
Ph.108　232 …… 85
Ph.109　233 …… 85
Ph.110　234 …… 85
Ph.111　235 …… 85
Ph.112　236 …… 85
Ph.113　238 …… 85
Ph.114　239 …… 85
Ph.115　240 …… 85
Ph.116　244 …… 86
Ph.117　245 …… 86
Ph.118　260 …… 86
Ph.119　257 …… 87
Ph.120　263 …… 87
Ph.121　272 …… 87
Ph.122　273 …… 87
Ph.123　274 …… 87
Ph.124　332 …… 87
Ph.125　363 …… 88
Ph.126　364 …… 88
Ph.127　365 …… 88
Ph.128　366 …… 88
Ph.129　370 …… 88
Ph.130　出土石鏃集合 …… 88
Ph.131　出土石器集合 …… 88

# 第Ⅰ章　はじめに

## １．調査にいたる経緯

福岡市教育委員会は、東区名子三丁目778番３、781番１、782番１、783番１、785番１、785番４、780番４、781番１地先水路における物販店舗建設の開発計画事前協議申請（第31-34号）に伴う埋蔵文化財の照会を令和元年９月４日付で受理した。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である名子遺跡内にあり、周辺の確認調査で遺構を確認しているため、申請地内でも遺構の存在が推測された。これを受け、埋蔵文化財課事前審査係が令和元年10月28日に確認調査を実施し、現地表面下0.35mで古墳時代から古代の溝、柱穴を確認した。このため、遺構の保全等に関して申請者と協議したが、予定建築物の構造上、埋蔵文化財への影響が回避できないため、記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

その後、令和２年１月10日付で個人を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、令和２年１月20日から５月29日まで発掘調査、令和３年度に資料整理および報告書作成を実施した。

申請地4809.00㎡のうち調査対象は、工事で埋蔵文化財に影響が及ぶ2105.61㎡で、それ以外の範囲は現状保存している。

調査にあたっては、事業者様および近隣の方々からご理解をいただくとともに多大なご協力を賜りました。また、発掘調査・報告書執筆に際して以下の方々にご教導を賜りました。記して深謝いたします。
大高広和（福岡県文化振興課）、小鹿野亮（筑紫野市教育委員会）、杉原敏之（福岡県文化財保護課）、
西垣彰博（粕屋町教育委員会）、山崎頼人（小郡市教育委員会）（五十音順・敬称略）

## ２．調査体制

調査主体　　福岡市教育委員会
調査委託　　個人

〈 発掘調査　令和元・２年度 〉

| | | | |
|---|---|---|---|
| 調査総括 | 福岡市経済観光文化局文化財活用部 | | |
| | 埋蔵文化財課 | 課長 | 菅波　正人 |
| | 埋蔵文化財課 | 調査第１係長 | 吉武　学 |
| 調査庶務 | 文化財活用課 | 管理調整係長 | 大森　秋子 |
| | 文化財活用課 | 管理調整係 | 松原　加奈枝 |
| 事前審査 | 埋蔵文化財課 | 事前審査係長 | 本田　浩二郎 |
| | 埋蔵文化財課 | 事前審査係 | 朝岡　俊也（令和元年度）・山本　晃平（令和２年度） |
| 調査担当 | 埋蔵文化財課 | 調査第１係 | 神　啓崇 |

〈 整理・報告　令和３年度 〉

| | | | |
|---|---|---|---|
| 整理・報告総括 | 埋蔵文化財課 | 課長 | 菅波　正人 |
| 整理・報告庶務 | 文化財活用課 | 管理調整係長 | 大森　秋子（～５月）・石川　あゆ子（６月～） |
| | 文化財活用課 | 管理調整係 | 井手　瑞江（～７月）・内藤　愛（８月～） |
| 事前審査 | 埋蔵文化財課 | 事前審査係長 | 田上　勇一郎 |
| | 埋蔵文化財課 | 事前審査係 | 山本　晃平 |
| 整理・報告担当 | 埋蔵文化財課 | 事前審査係 | 神　啓崇 |

# 第Ⅱ章　遺跡の立地と歴史的環境

福岡市東区名子は、城越山・森江山・江辻山の間を流れる猪野川が形成した扇状地上にある。第５次調査地点は、その扇頂部から扇央部付近にあたる。

既往調査成果をもとに、名子地域の遺跡を時代ごとに概観する。名子地域で遺構が確認できるのは縄文時代以降である。名子遺跡第３次・４次調査では、縄文時代後期の土坑、竪穴建物が出た。そのうち礫が多数入った土坑は、「調査中は人為的なものなのか、縄文時代のものなのかさえ判断できなかった」とある（今井編 2011）。粕屋町戸原伊賀遺跡第１地点で似た土坑が見つかり、礫を取り除くと、柱痕跡を確認したため、柱穴（門？）を想定している（福島・朝原編 2019）。

名子地区の弥生時代の遺構は、３次調査で出た前期の土坑のみで、様相は不明である。猪野川と多々良

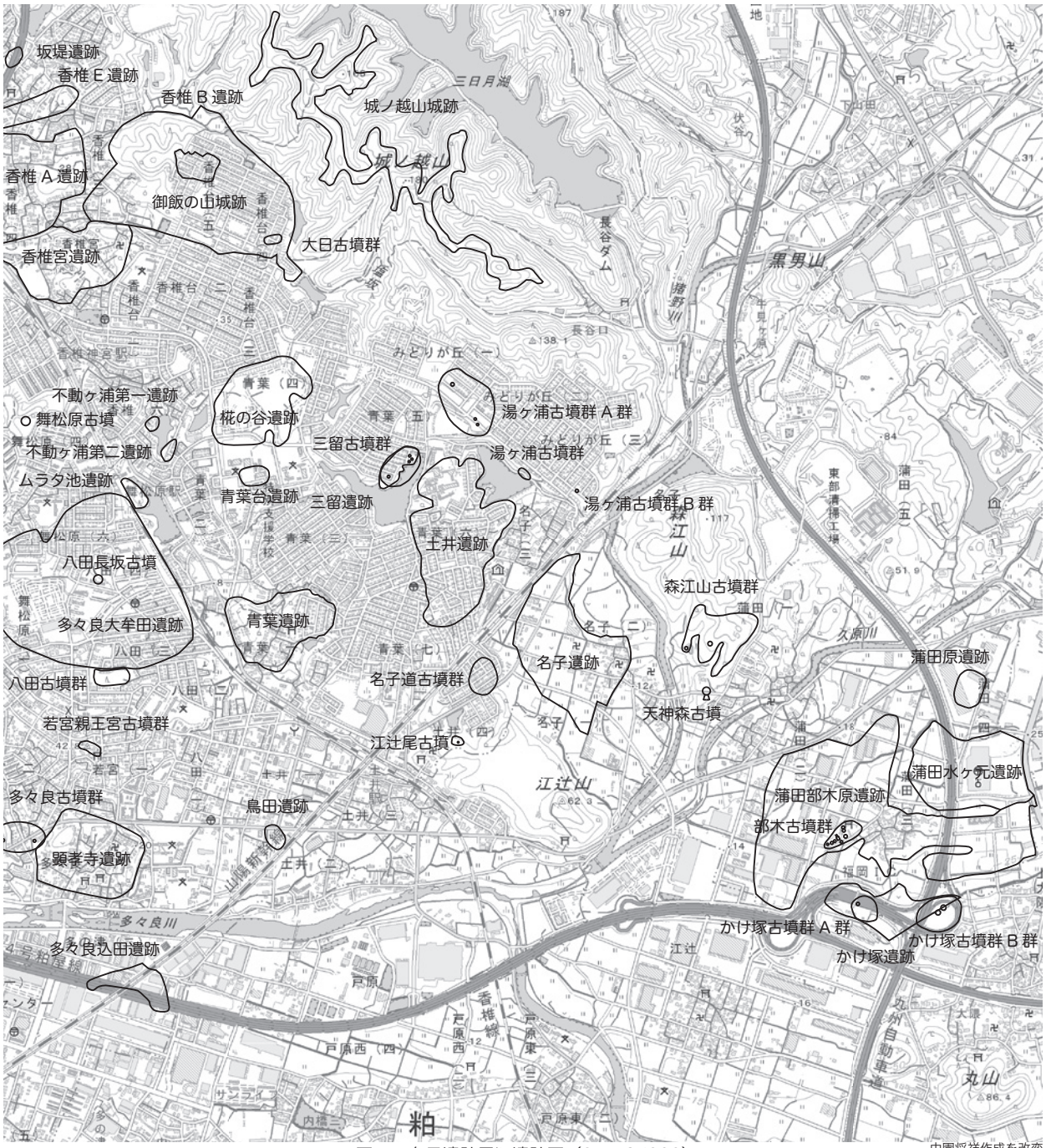



図１　名子遺跡周辺遺跡図（S=1/25000）

中園将祥作成を改変

川の合流付近にある粕屋町江辻遺跡では、弥生時代早期の竪穴建物、墓、倉庫、大型建物、環溝が出た。とくに竪穴建物は、韓半島南部に起源をもつ松菊里型の円形竪穴建物で、建物中央部に長円形の穴（炉ではない）と、それをはさんで相対する２本の柱穴をもつ特徴がある。また、東区青葉では青銅器銅剣鋳型の出土に注目できる。調査による発見ではなく詳細は不明だが、香椎や八田地区でも鋳型は出ており、鋳造遺構（青銅器工房跡）の存在が想定される。青葉中学校内の椛ノ谷遺跡では甕棺が２基出た（山崎 1991）。

古墳時代は、集落の様相は不明だが、古墳は確認できる。森江山南麓の天神森古墳では、三角縁神獣鏡、盤龍鏡が出ている。古墳は道路建設によって分断されたが、全長 50m 程の前方後円墳の可能性がある。また、「名子道」交差点付近の丘陵には名子道古墳群があり、石棺墓が出た。東区青葉・みどりが丘に目を向けると、三留古墳群、湯ヶ浦古墳群がある。湯ヶ浦古墳群は 1970 年代に調査され、後期古墳と製鉄遺跡が出たという。名子遺跡第１次調査では、古墳時代後期以降の溝が出たが、集落の広がりなどはわかっていない。

古代から中世の遺構は未確認だが、戦国期には土造りの城砦が三日月山・城之越山に築かれる。立花山を巡る攻防における陣所とみる意見がある（藤野・山崎 2014）。近代では、昭和 23 年に名子地区の４㎞先で麻生鉱業が山田炭坑を開いている。索道支柱は現在でも確認できる。

以上から、名子地域では縄文時代後期～弥生時代中期、古墳時代中期以降の生活痕跡が確認できる。

道路台帳平面図福岡 F13-19（昭和 60 年 10 月調製）に加筆

図２　名子遺跡第５次調査地点位置図（S=1/2000）

# 第Ⅲ章　発掘調査の記録

## １．調査の経過と概要

調査着手前の対象地の現況は水田で、周囲の道路面より 0.5m 程度低い。対象地西隅の道路面は、標高 15.8m 程度である。発掘調査は令和２年１月 20 日から着手し、調査区を四分割して北東、南東、北西、南西の順に重機による表土除去、人力による遺構精査・掘削作業を進めた。現地表面から遺構面までが 0.3m 程度と浅く、また十分な排土置き場が確保できたため、反転等はしていない。令和２年５月 13 日に全景写真を撮影し、撮影後は調査終了部分を順次埋戻した。５月 29 日に最終的な埋戻しと機材撤収をおこない、作業を終了した。

遺構面は、水田耕作土および床土を除去した黄褐色細砂～シルト質土である。部分的に灰色シルトの包含層があるようだが薄い。調査区中央は綺麗な黄色シルト土だが、東側は淡黄色シルト土、西側は淡黄色シルト土に灰色シルト小ブロックを少量含む土である。この黄色土は黄砂（レス）の堆積層（溝田ほか 1992）と考えられ、その下層で河川堆積の砂利・小礫を確認している（SX006）。調査区北東・南東隅では地形の落ちがみられる。遺構は、古墳時代後期を主とする竪穴建物 25 棟、掘立柱建物９棟以上、柱穴・土坑多数を確認した。調査区中央に集中する。調査区外に延びる溝は６本検出し、北東–南西方向に並行して延びる奈良時代の溝のうち、SD150 はより直線的で、本調査区付近が西海道大宰府路推定線上にあたることから、西海道大宰府路の道路側溝の可能性がある。道路側溝の可能性があると判明したため、未調査部分にトレンチを設定した。結果、SD150 が対象地南西端まで伸びていることを確認している。なお、トレンチは遺構の確認が目的であり、遺構掘削はしていない。

遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、石製品、鉄製品など、パンケース 30 箱出土した。

調査終了後、令和２年 11 月 28 日に福岡市埋蔵文化財センターで、令和二年度考古学講座発掘調査速報編、「古代官道を掘る－名子遺跡５次調査の成果より－」と題して講座を実施した。

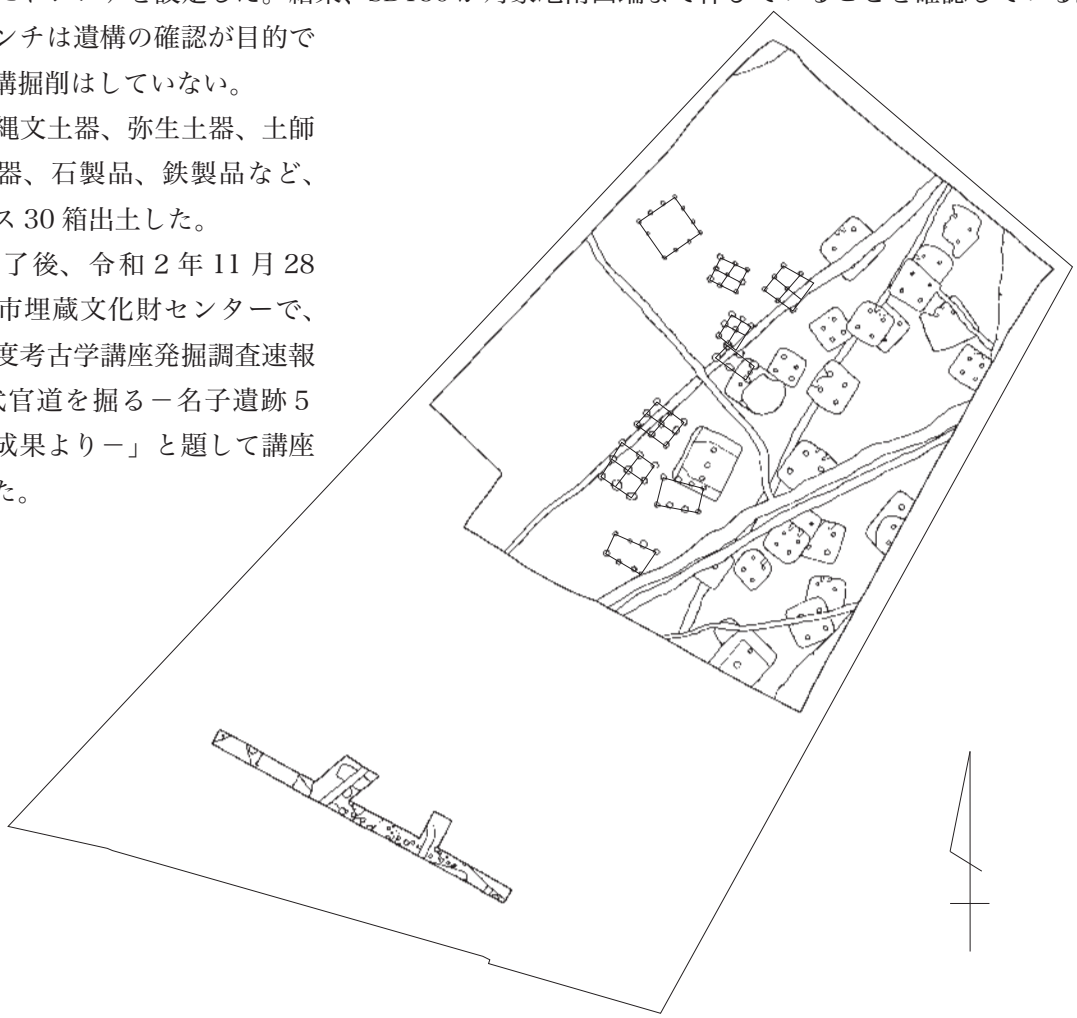


図３　遺構配置図（S=1/750）

図４　遺構配置図（S=1/300）

## ２．遺構と遺物

### （１）竪穴建物

古墳時代の竪穴建物を 25 棟検出した。建物は調査区南東半部に集中する。そのうち、方形プランで四本主柱穴、壁中央にカマドをもつ建物を 12 棟検出した。いずれも検出面から床面までの深さが 0.1m 前後で残りは良くない。カマドは北西か北東の壁中央に取り付く。また、長方形プランで二本主柱穴、ベッドを有し床面中央に炉をもつ建物を２棟検出した。

**SC020（図５～８・Ph. ６～10）** 調査区北西側で検出した方形の竪穴建物である。長軸長 5.2m、短軸長 4.7m を測る。北西壁中央にカマドが付く。遺構検出時にプランを捉えることはできたが、SD030 との切り合いは不明瞭だった。検出面から貼床上面までの深さは 0.1m で、残りは良くない。埋土は灰黄色シルト土で炭粒・焼土粒を少量含む。貼床は黄灰色シルト土である。貼床をはがすと鋤痕跡を複数確認できた。カマドは、支脚はなく支脚抜取穴が残る。また、建物中央部分床面で硬化面を確認した。

図８の１は土師器甕である。胴部外面に被熱痕があり、煤が付く。焼成はやや不良で、外面赤褐色、内面橙色を呈する。２は土師器甑の口縁部である。径１～５mm の白色砂粒を多く含む。ナデ成形で、指オサエ痕がある。３～６は須恵器である。３はハソウの頸部、４・５は坏蓋、６は甕の胴部である。４は内外面回転ナデ成形の後、内面天井部に軽い静止ナデ、外面天井部に回転ヘラケズリを施す。５はやや歪みがある。７は弥生土器壺の底部である。焼成は良く、胎土に径１～２mm の白色砂粒･赤色粒を少量含む。外面は淡橙色、内面は橙色を呈する。外面はナデ調整を施す。８は土師器の甕である。焼成は良く、暗灰

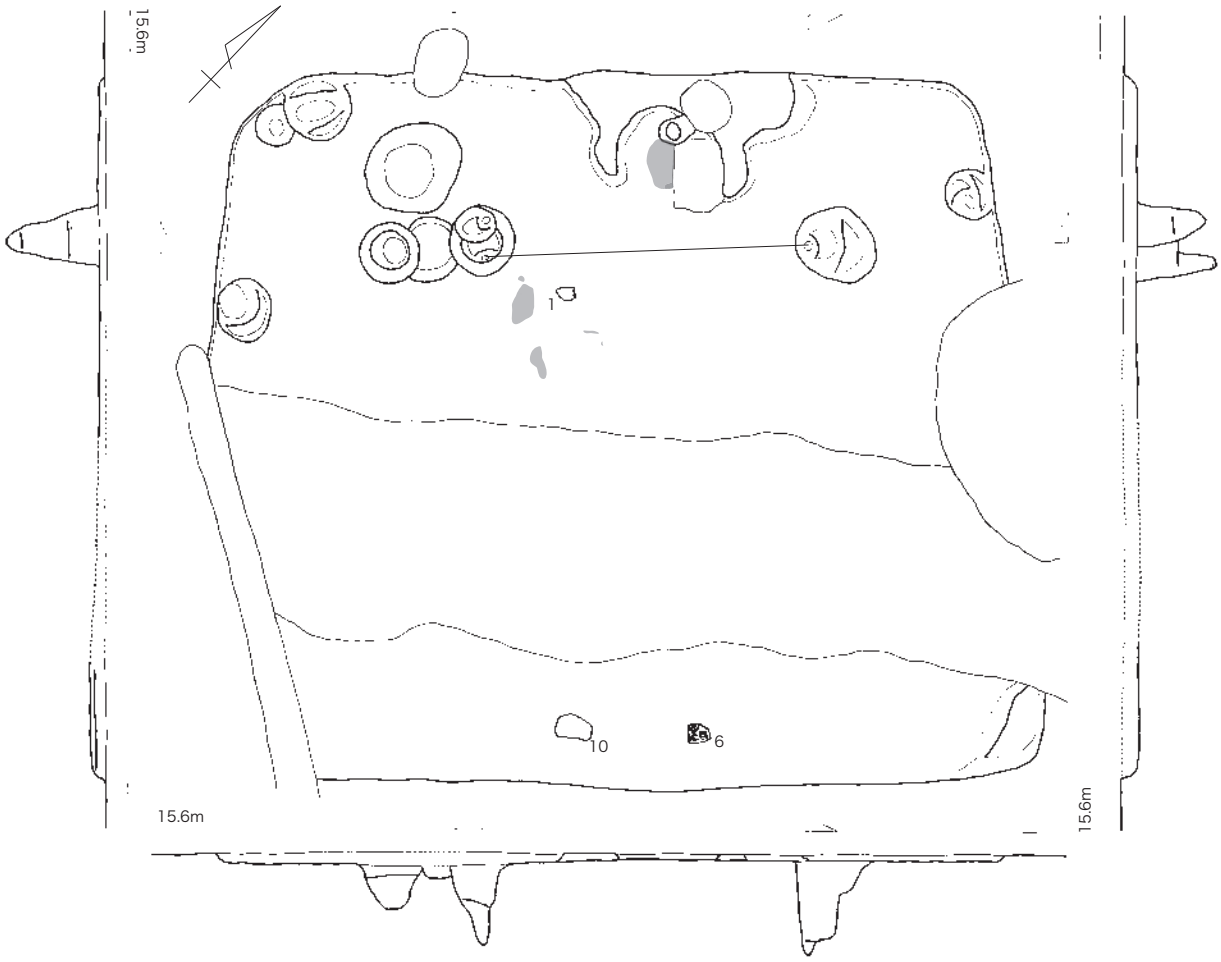
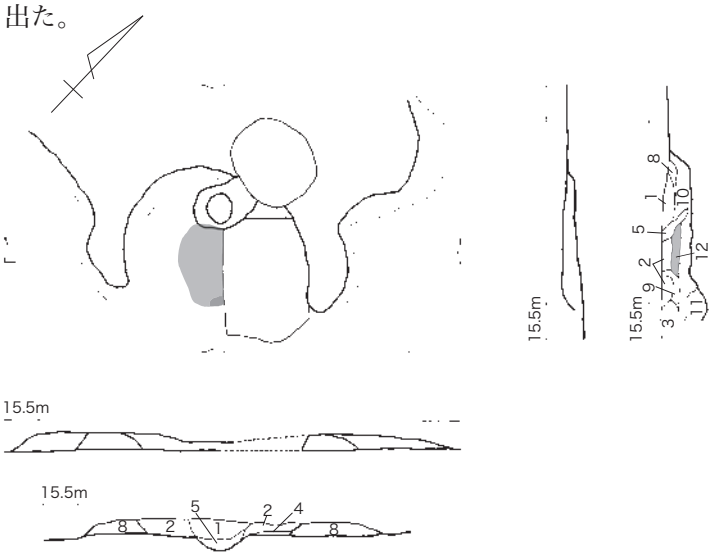



図５　SC020 実測図（S=1/50）

色～橙色を呈する。径１～６mm の白色砂を多く含む。９は滑石製臼玉である。10 は砥石である。斜め方向の擦痕が残る。以上のうち、４・７・８は掘方、５はカマド出土である。遺物は薄パンケース１箱分出た。




１．淡灰黄色粘質土
２．灰黄色シルト土　焼土粒・鉄分粒をやや多く含む。カマド構築土。
３．灰黄色シルト土　カマド構築土か。
４．灰黄色シルト土　焼土粒・鉄分粒を少量含む。
５．暗灰黄色シルト土　炭粒・焼土粒を多く含む。
６．灰黄色シルト土　炭粒・焼土粒を少量含む。
７．黄灰色シルト土
８．暗黄色シルト土
９．灰色粘質土　焼土・炭粒を少量含む。
10．灰黄色シルト土　焼土・炭粒を少量含む。
11．黄灰色シルト土　焼土ブロックを多く含む。炭粒を少量含む。
12．橙灰色シルト土　焼土主体。カマド床面か。ただし強い焼け方ではない。

図６　SC020 カマド実測図・土層図（S=1/30）

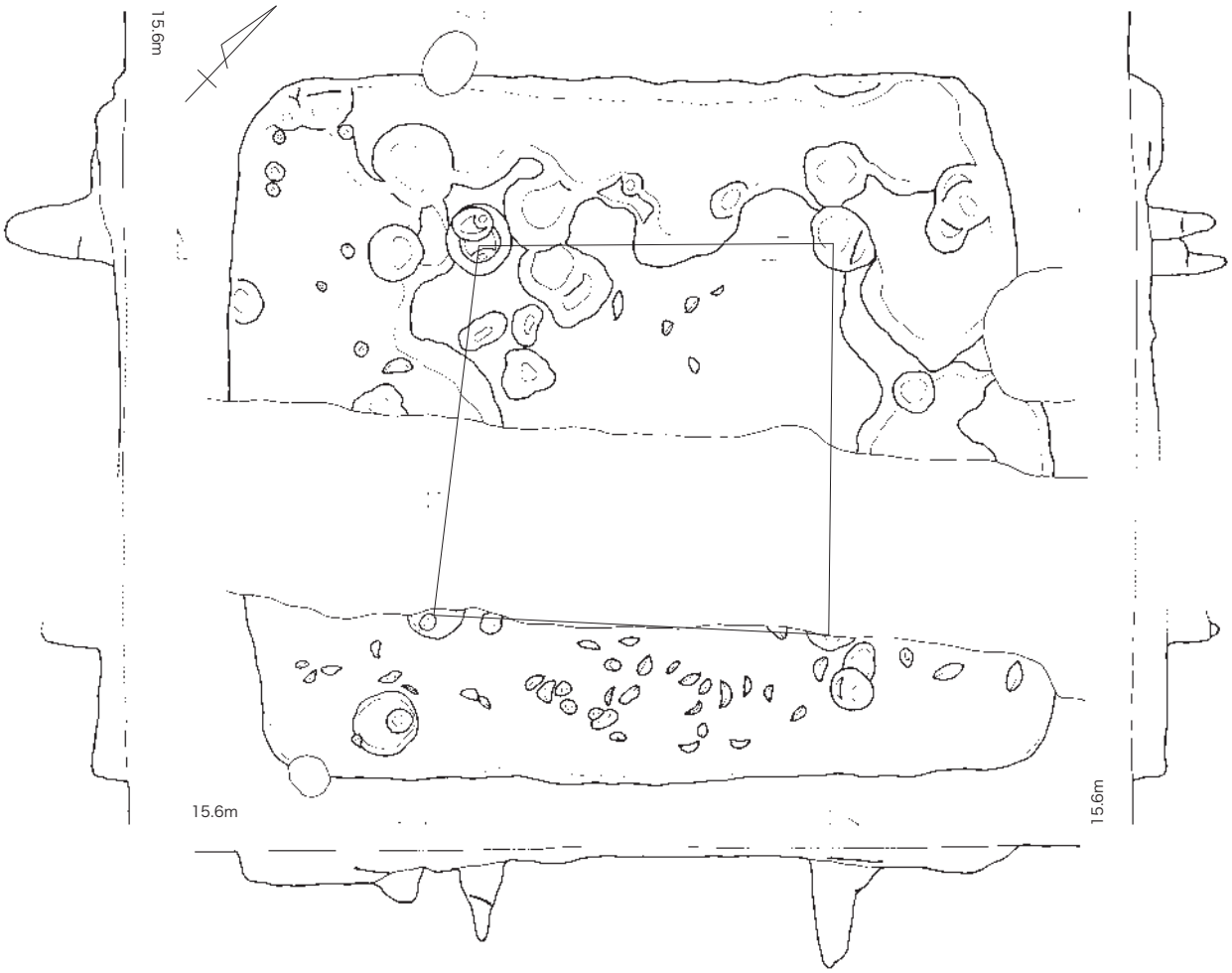



図７　SC020 掘方実測図（S=1/50）

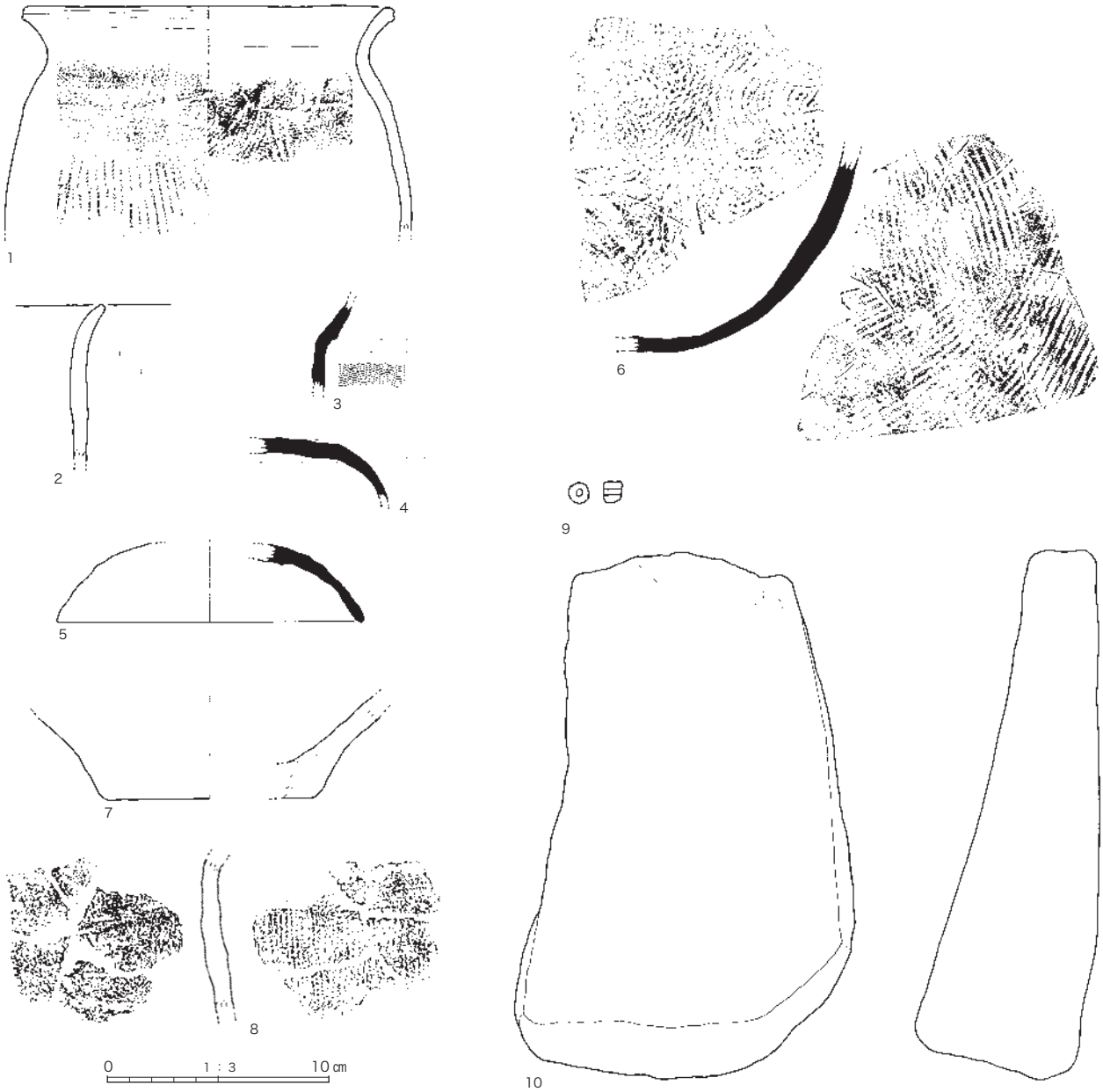



図８　SC020 出土遺物実測図（S=1/3、９は S=1/2）

**SC023（図９・Ph.12）**　調査区北東端で検出した。住居の切り合いと考えて、灰黄色シルト土の範囲を５㎝程度掘下げたところ、複数の柱穴が切り合う主柱穴を確認した。北西の焼土はカマドに伴うものかもしれない。11 は安山岩の削器である。

**SC050（図 10、11・Ph.11、13）**　調査区北東で検出した。建物の平面プランは歪で、明確な主柱穴も不明である。当初は、検出時のプランが不整形だったため、複数遺構の切り合いと考えて掘下げていた。北西壁中央付近にカマドを検出したため、竪穴建物と捉えた。遺物は薄パンケース１/２箱分出たが、いずれも小片のため図化していない。

**SC060（図 12 ～ 14･Ph.14）**　調査区北東で検出し、東西軸の最大長 4.3m、南北軸の最大長 4.0m を測る。検出面から掘方底までの深さは 0.15m で、貼床は灰黄色シルト土に炭粒・焼土粒を少量含む。SC080 を切る。検出面が床面に相当し、カマドは残っていない。北西壁中央付近に焼土とカマド構築土らしき粘土がわずかに残る。建物西角から地形の落ち（SX006）へ溝（SD040）が延びる。当初は、SD040 は SC060 と別の遺構と考えていたが、両者の埋土に明確な差がなく、SD040 の西端が SC060 の外に延び

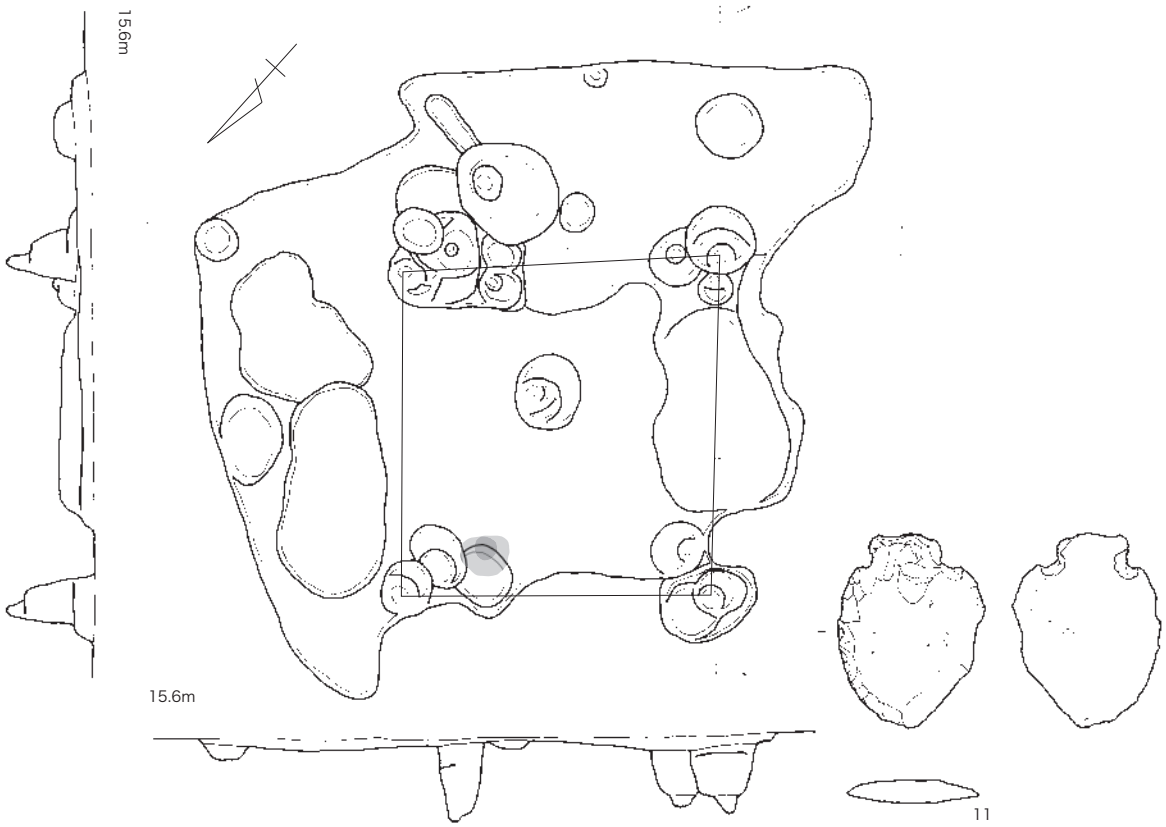



図９　SC023 実測図（S=1/50）・出土遺物実測図（S=1/2）

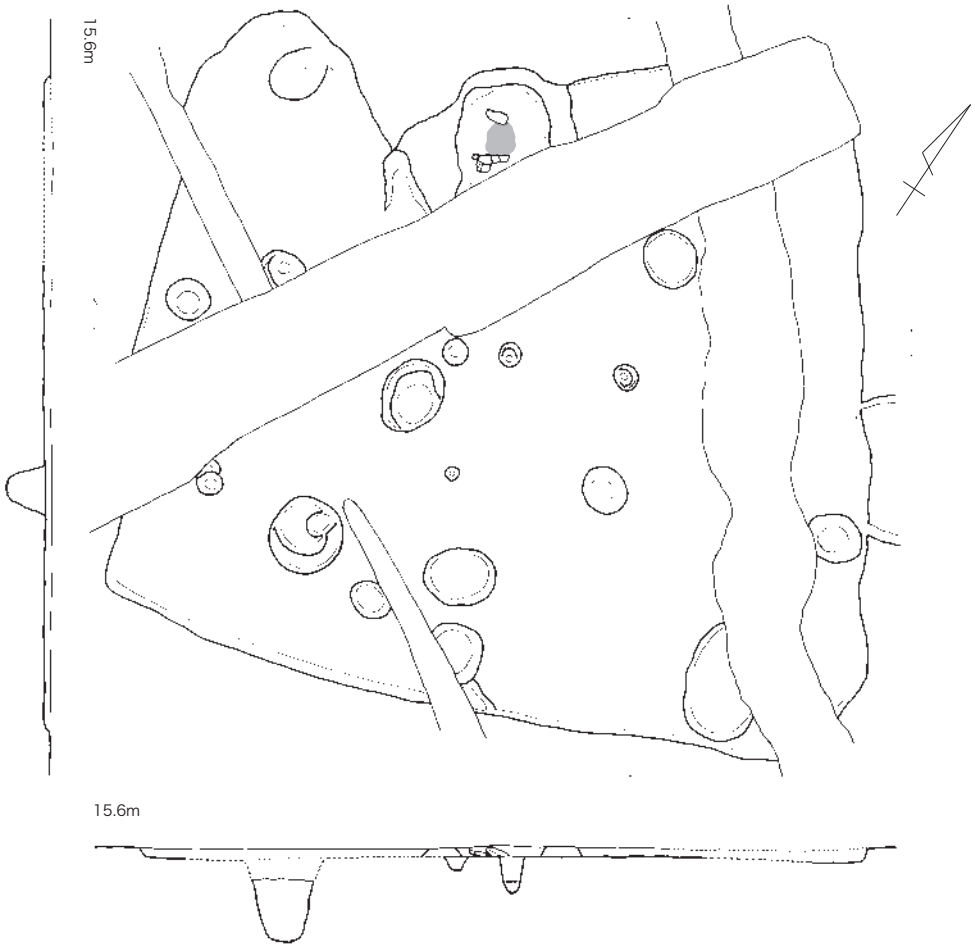
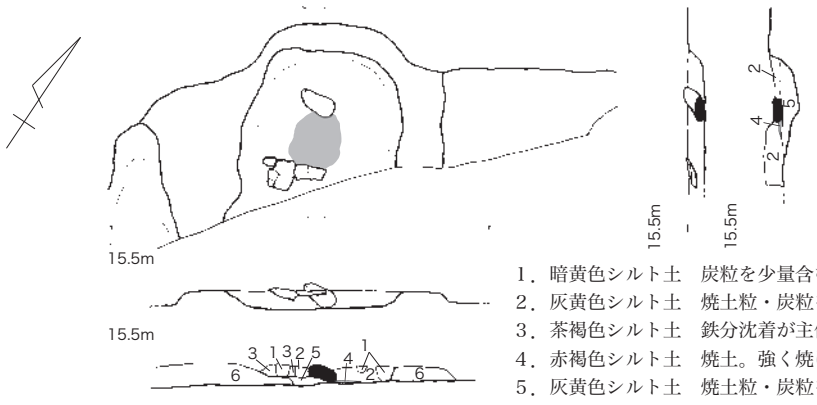



図 10　SC050 実測図（S=1/50）




1．暗黄色シルト土　炭粒を少量含む。カマド崩落土。
2．灰黄色シルト土　焼土粒・炭粒をやや多く含む。
3．茶褐色シルト土　鉄分沈着が主体。
4．赤褐色シルト土　焼土。強く焼けていない。
5．灰黄色シルト土　焼土粒・炭粒を少量含む。

図 11　SC050 カマド実測図（S=1/30）

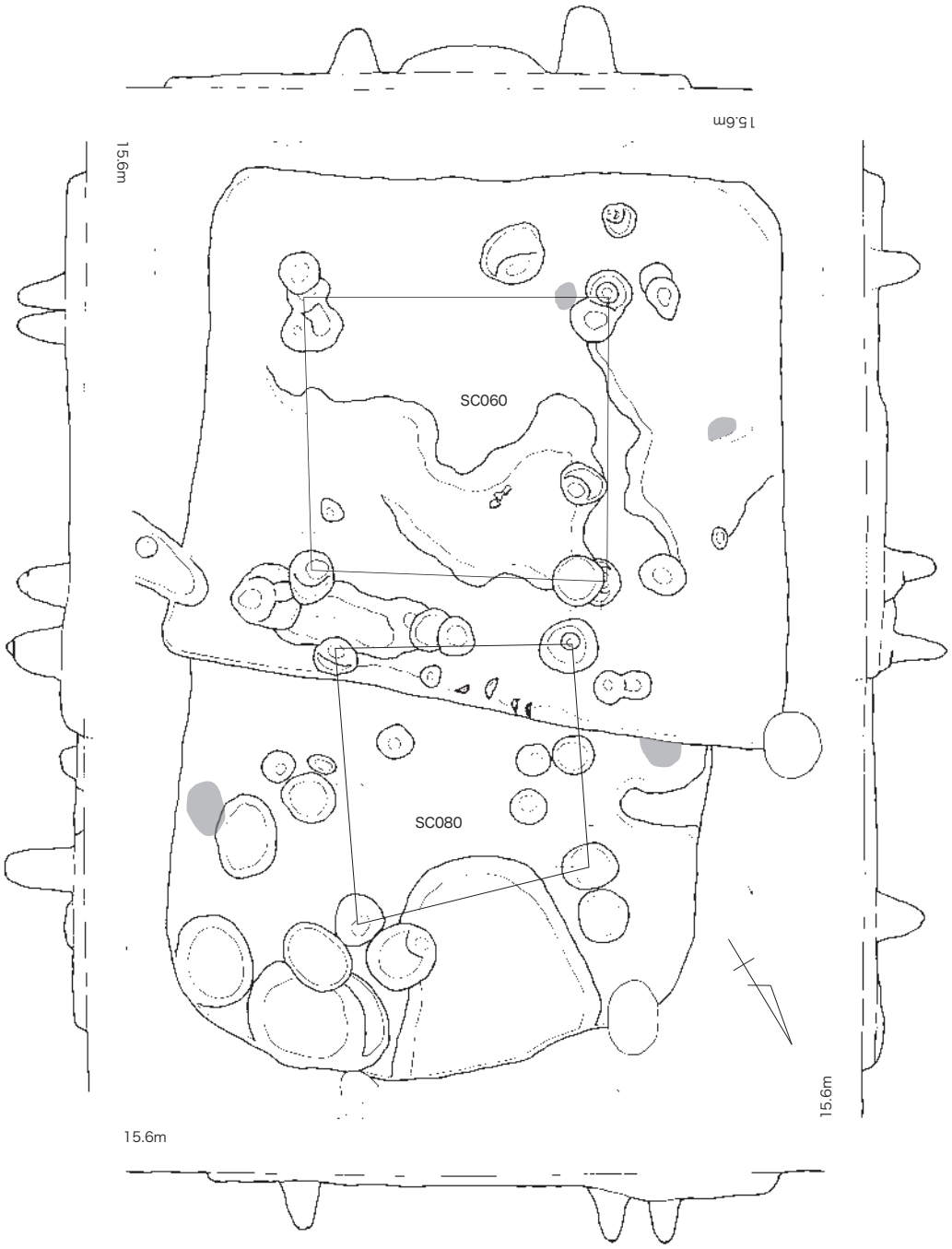



図 12　SC060・SC080 実測図（S=1/50）

ないため、SC060 の排水溝と考える。

図 14 の 12 ～ 16、20、21 は SC060、26 ～ 28 は SD040 の出土遺物である。12 ～ 16･26 は須恵器で、12 ～ 15 は坏身、16 は高坏の脚部、17・18 は坏蓋である。20・21 は土師器の把手である。27・28 は土師器甕で、27 は焼成は良く、淡橙色を呈する。28 は焼成やや不良で、外面は淡橙色、内面は暗灰色を呈する。1 / 2 から復元作図した。遺物は薄パンケース 1 / 2 箱分出た。

**SC080（図 12、14・Ph.15）** 東西軸長 3.8m を測る。検出面から掘方底までの深さは 0.1m である。SC060 に切られる。検出時、建物北西側壁際に焼土・炭粒の広がりを確認したが、カマド構築土は検出していない。SC060 と同様、検出面が貼床に相当する。

出土遺物は図 14 の 22 ～ 25 である。22 は土師質の須恵器坏で、焼成は不良、歪みがある。23 ～ 25 は土師器で、24 は甑、25 は把手である。23 は内面にコゲらしきものが付く。遺物は薄パンケース 1 箱分出た。また、SC060 と SC080 検出時の遺物は図 14 の 17 ～ 19 で、須恵器の坏身・坏蓋である。

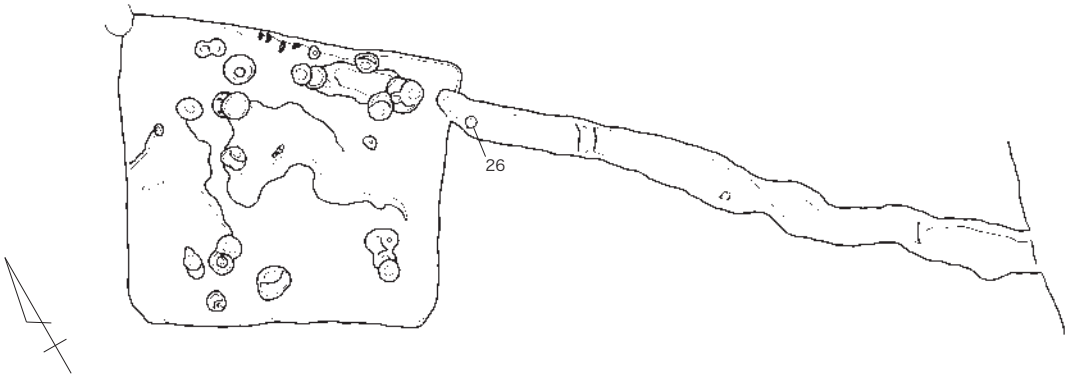



図 13　SC0060 実測図（S=1/100）

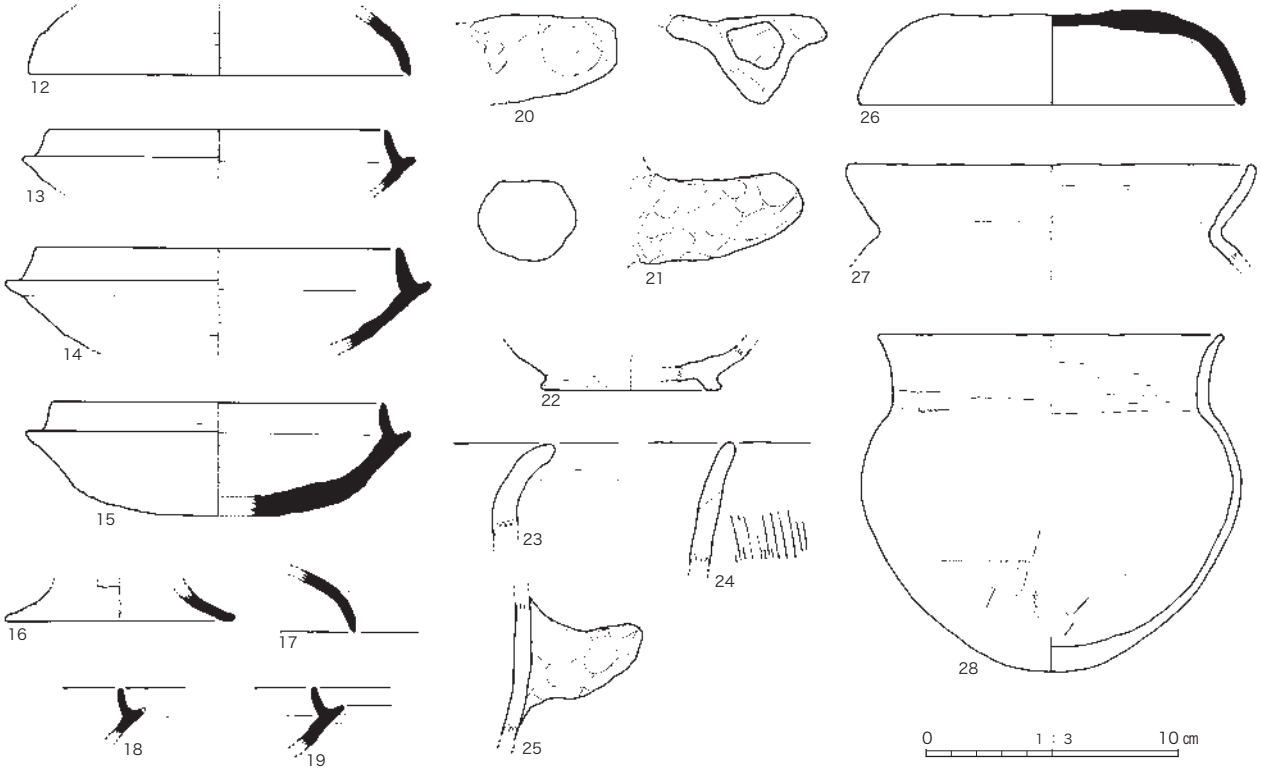



図 14　SC0060・SC080 出土遺物実測図（S=1/3）

**SC090（図 15 ～ 18・Ph.16 ～ 18）** 調査区中央北東寄りで検出し、一辺 3.4m を測る隅丸方形の竪穴建物である。埋土は灰色シルト土で、一部に黄色シルト土を少量含む。貼床面で主柱穴を捉えられなかったため、記録作成後、掘方底まで掘下げた。主柱穴のほかに、北西・南東の両側壁際に２つの柱穴を検出した。この建物に伴う柱穴であろう。底面レベルは主柱穴とほぼ同じである。

図 17 の 29 ～ 38 は SC090、39・40 は SC090 掘方、41 は SP132、42・43 は SC140 掘方の出土遺物である。29 は土師器甕である。焼成は良く、外面は褐色、内面は黒灰色である。径 1 ～ 5 mm の白色砂をやや多く含む。内面に煤が付く。磨滅で調整は不明瞭である。30 は土師質須恵器甕である。焼成はやや不良で明橙色、径 1 ～ 5 mm 程度の白色砂をやや多く含む。内面肩部に同心円当具痕がある。31 ～ 37 は須恵器で、31 は長頸壺、32・34 ～ 36 は坏身、33 は坏蓋、37 は甕である。32 は回転ナデ成形で、外面 1 / 2 をヘラケズリ、みこみに不定ナデを施す。 1 / 3 から復元作図した。38 は土師器坏で、胎土に径 1 mm 程度の白色砂をごく少量含む。焼成不良で磨滅する。褐色を呈する。39 は弥生土器甕の底部である。焼成はやや不良で、外面淡橙色、内面暗灰色を呈する。器面はやや磨滅する。40 は弥生土器壺の底部である。径 1 ～ 5 mm の白色砂をやや多く含む。ナデ成形である。焼成はやや不良で、暗橙色を呈する。器面はやや磨滅する。図 18 の 41 は環状石製品である。刃部はない。遺物は中パンケース 1 箱分出土した。

**SC140（図 15、18）** 方形の竪穴建物で一辺 3.8m を測る。検出面が床面に相当し、北東壁中央にカマド燃焼部の焼土が残る。カマド本体は残っていない。SC090 に切られる。

42 は玄武岩製の石斧である。刃部に使用による欠損がある。43 は安山岩製の削器である。

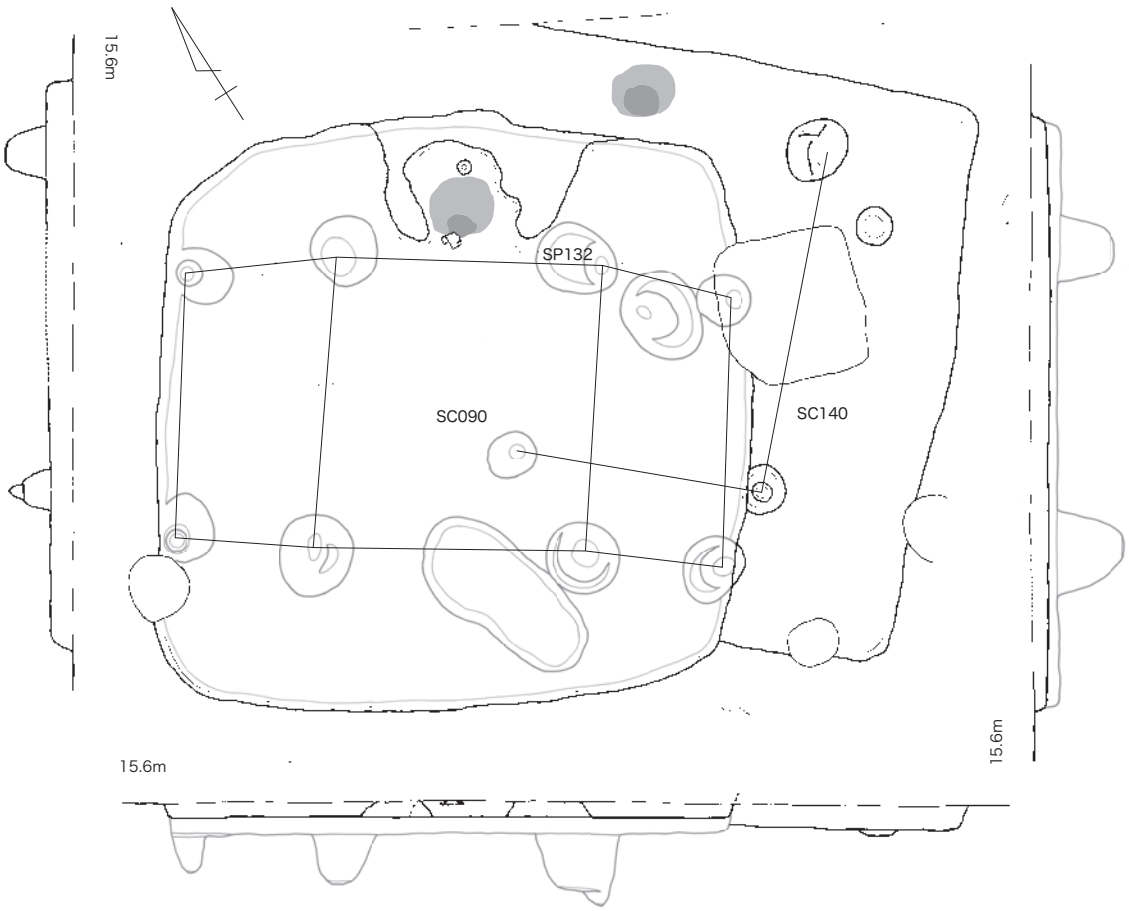
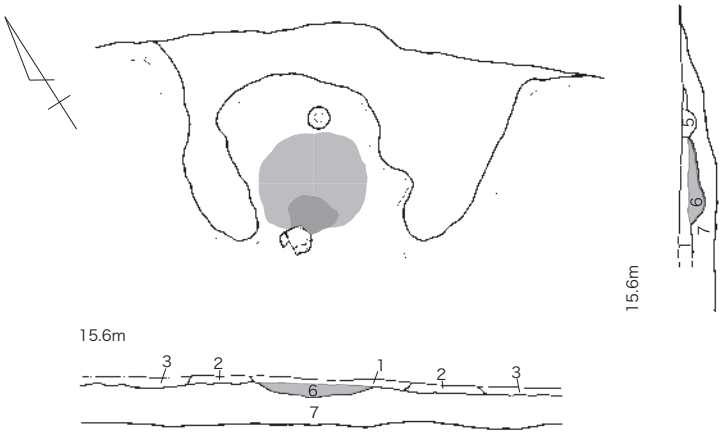



図 15　SC090・SC140 実測図（S=1/50）




1．灰褐色シルト土　焼土・炭粒をやや多く含む。
2．黄灰色シルト土　カマド構築土。
3．暗灰黄色シルト土　焼土・炭粒をやや多く含む。
4．灰黄色シルト土　竪穴建物の埋土。
5．淡黄白色粘質土　支脚抜取穴の埋土。
6．赤褐色シルト土　焼土。
7．暗灰黄色シルト土　貼床。

図 16　SC090 カマド実測図・土層図（S=1/30）

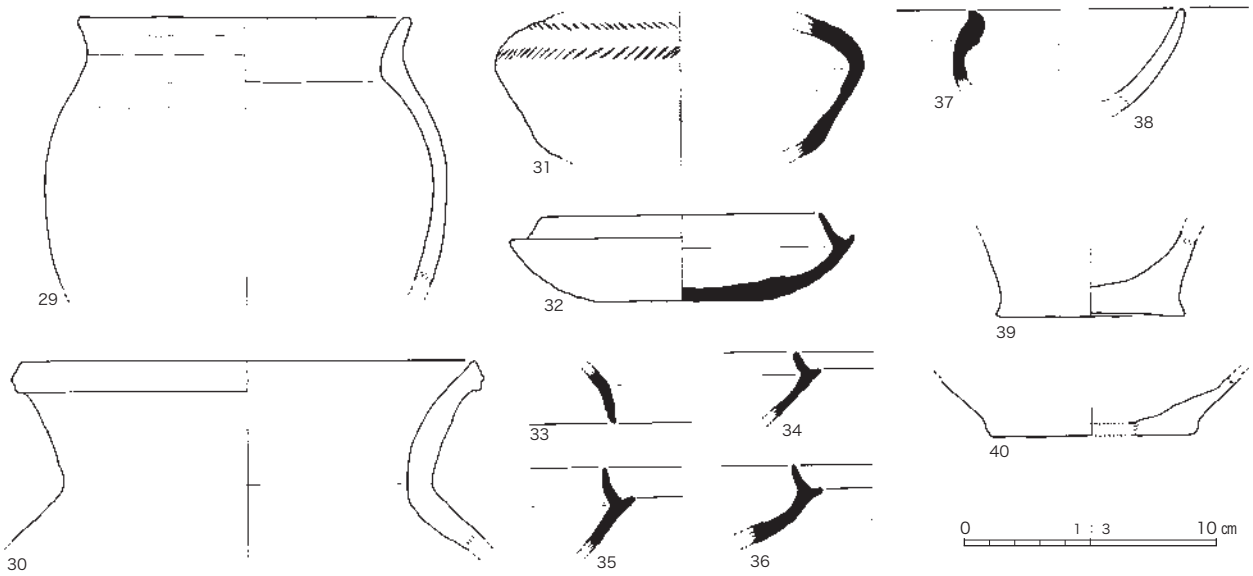



図 17　SC090 出土遺物実測図（S=1/3）

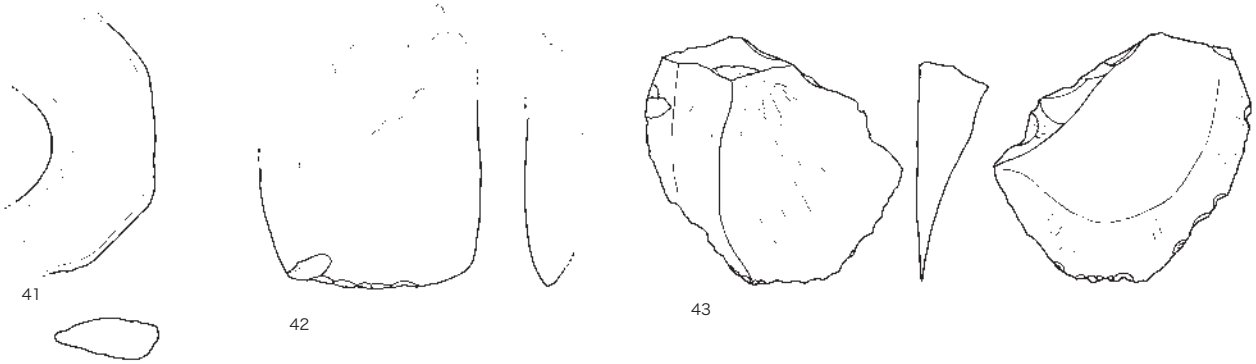



図 18　SP132・SC140 出土遺物実測図（41・42 は S=1/2、43 は S=1/1）

**SC100（図 19 ～ 21・Ph.19 ～ 21）**　調査区東側で検出し、南北軸長 3.6m を測る。検出面から床面までの深さは 0.15m 程度である。検出時のプランは明瞭で、建物内南東側に焼土が広がることを確認した。掘り下げると、貼床直上に炭化材や焼土粒があったので、焼失竪穴建物と考える。貼床面では主柱穴は見えなかった。ただし、主柱穴推定位置に焼土があったので、柱の焼け跡かもしれない。カマドは、袖構築土の一部と、支脚の石が残る。

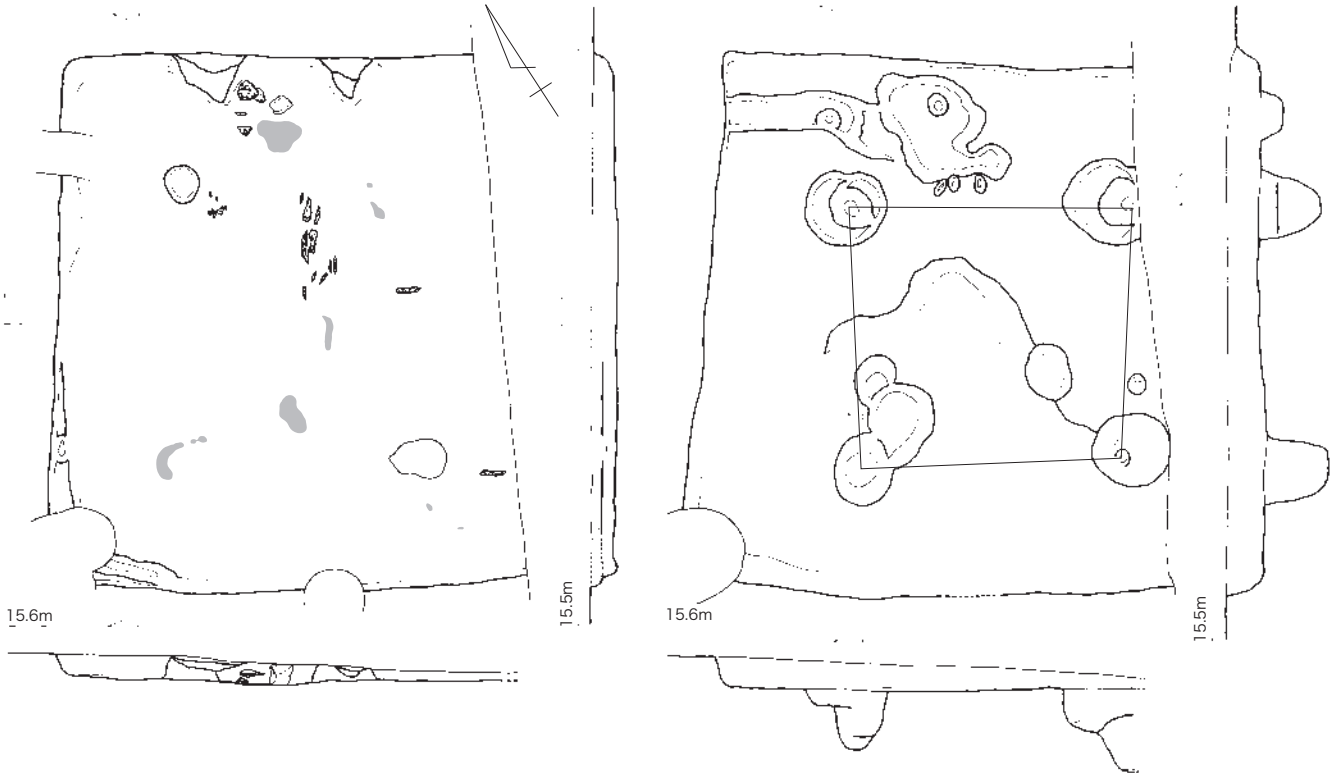



図 19　SC100・SC100 掘方実測図（S=1/50）




図 20　SC100 カマド実測図（S=1/30）

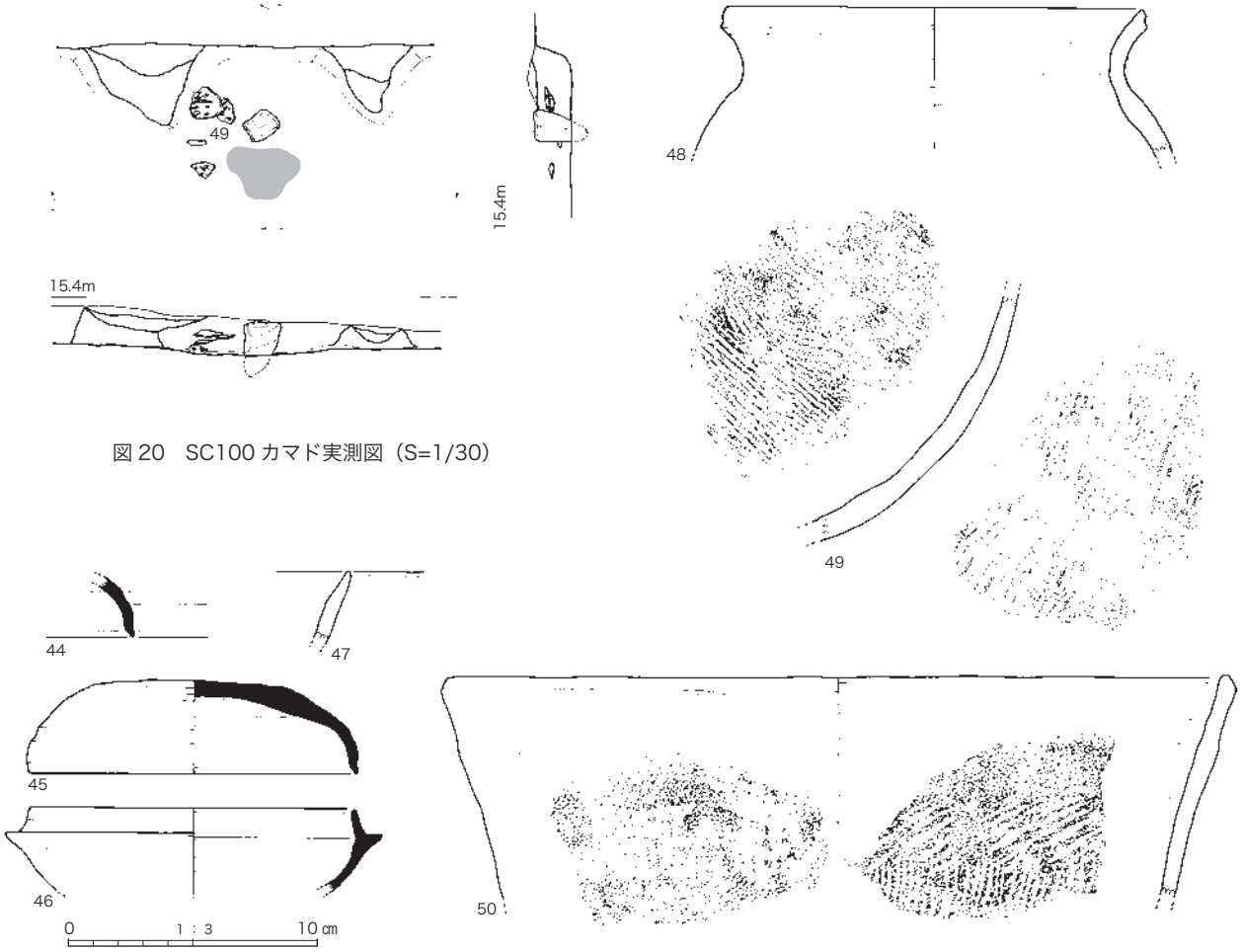
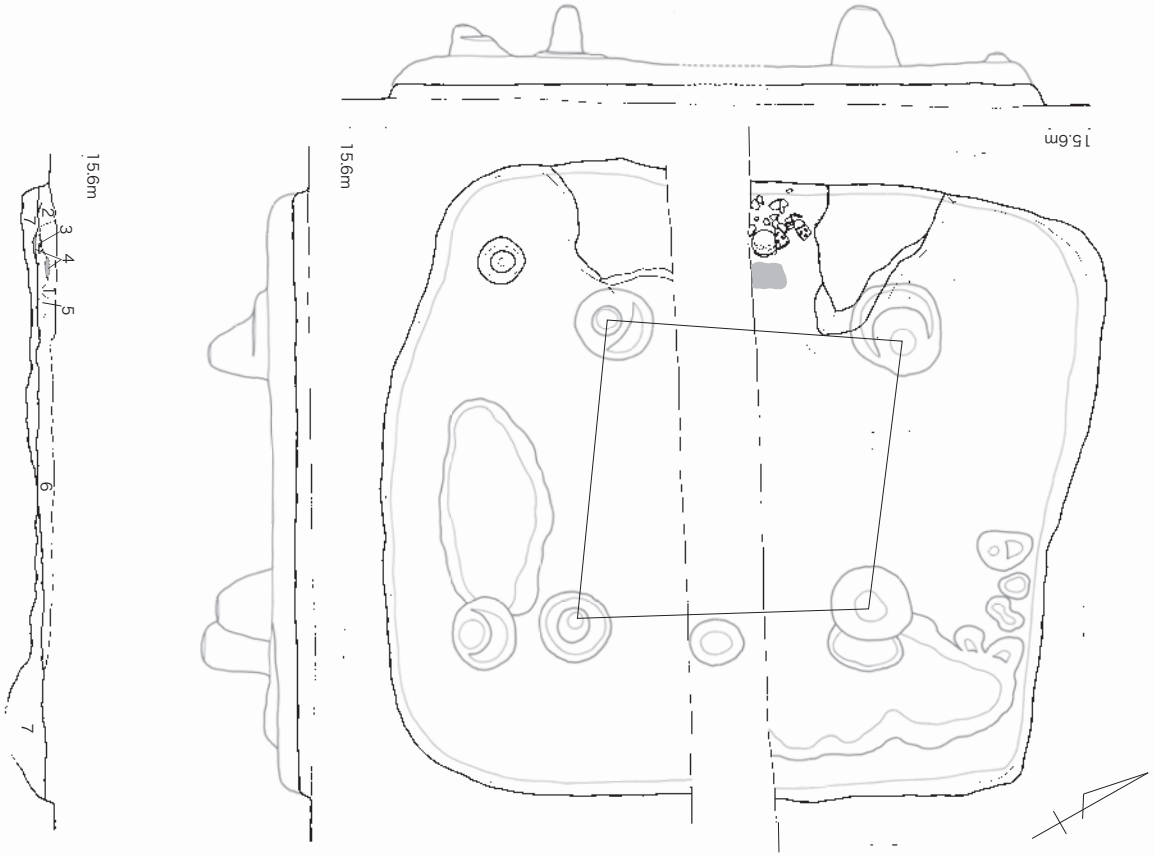



図 21　SC100 出土遺物実測図（S=1/3）

44 ～ 46 は須恵器で、44・45 は坏蓋である。45 は回転ナデ成形で、外面 2 / 3 にヘラケズリを施す。焼成は良く、外面暗青灰色、内面青灰色を呈する。残存は 8 割程である。46 は坏身で、外面胴部下半部に灰を被る。47 ～ 50 は土師器である。47 は坏で、焼成は不良、褐色を呈し磨滅する。径 1 mm の白色砂を少量含む。48 は土師器甕である。焼成はやや不良で、橙～褐色を呈する。49 は土師器甕の胴部である。径 2 ～ 3 mm の白色砂を少量含む。橙色で焼成は良い。外面は二次的な被熱で赤くなる。50 は甑である。径 1 ～ 3 mm の白色砂をやや多く含む。明橙色で焼成はやや不良、やや磨滅する。胴部外面にタタキ、内面に当具、口縁内外面に横ナデを施す。遺物は中パンケース 1 箱分出た。

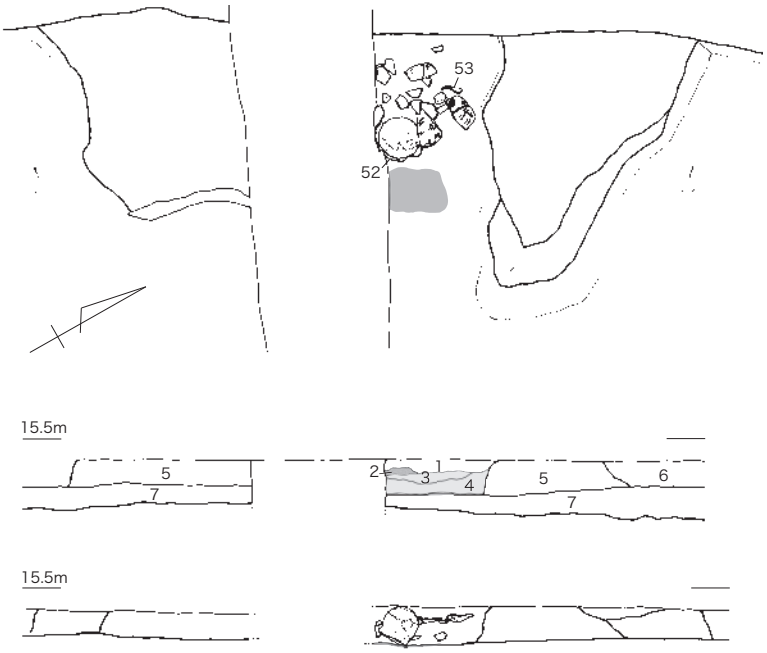
**SC120（図 22 ～ 24・Ph.22 ～ 25）** 調査区中央東寄りで検出し、東西軸 4.0m、南北軸 4.35m を測る。検出面から貼床面までの深さは 0.1 ～ 0.2m である。カマドは北西壁中央に付く。袖部の構築土のみが残る。南側の袖端部は掘りすぎている。掛口にあたる付近から土師器鉢・甕が出土した。

図 24 の 52 ～ 55 はカマド、51・56 ～ 64 は全体からの出土遺物である。51 は安山岩製の石鏃である。52 ～ 54 は土師器である。52 は鉢で、径 1 ～ 5 mm の白色砂を多く含む。焼成は良く、外面暗灰橙色、内面橙色である。外面は二次的な被熱で変色する。53 は甕で、径 1 ～ 3 mm の白色砂をやや多く含む。焼成は良い。外面明橙色、内面やや暗い橙色を呈する。54 は焼成不良で磨滅している。調整は不明瞭である。55 ～ 62 は須恵器である。56 は土師質須恵器の甕で、焼成はやや不良、明橙色を呈する。57・62 は坏蓋である。58 ～ 61 は坏身である。58 は、焼成はやや不良で磨滅する。回転ナデ成形である。ヘラケズリは確認できない。59 は回転ナデ成形後、底部内面に不定ナデを施す。歪みがある。63 は土師器甕である。胴部はタタキ、口縁内外面は回転ナデを施す。径 1 ～ 3 mm の白色砂をやや多く含む。焼成は良く、




1．黄灰色シルト土　カマド上部の崩落土。
2．黄色シルト土　地山よりやや黄色みが強い。
3．灰色シルト土　焼土粒・炭粒を多く含む。
4．暗橙色シルト土　焼土。
5．灰色シルト土　焼土粒・炭粒を多く含む。
6．暗灰色シルト土　竪穴建物埋土
7．暗灰黄色シルト土　貼床。

図 22　SC120 実測図（S=1/50）




1．黄色シルト土　　焼土小ブロック（径１～２㎝）を少量含む。
2．暗橙色シルト土　焼土主体。
3．暗灰色シルト土　焼土・炭粒を多く含む。
4．暗灰色シルト土　焼土・炭粒を少量含む。
5．黄色シルト土　　カマド構築土。
6．灰黄色シルト土　竪穴建物の埋土。
7．灰色シルト土＋黄色シルト土　両者が斑状に入る。貼床。

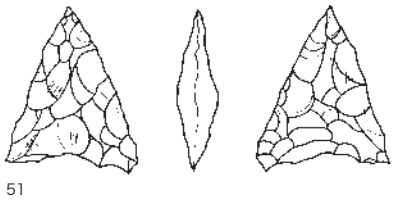



図 23　SC120 カマド実測図（S=1/30）

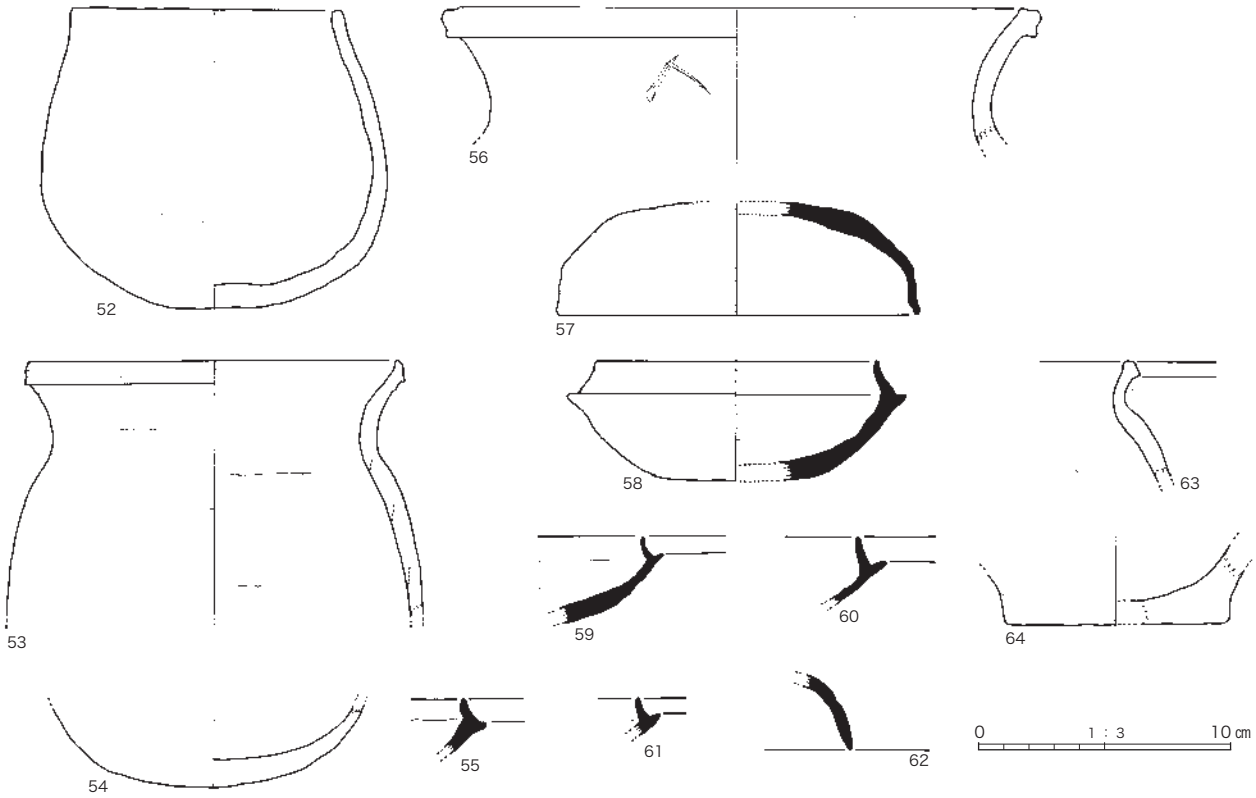



図 24　SC120 出土遺物実測図（S=1/3、51 のみ S=1/1）

外面褐色、内面暗橙色を呈する。64は弥生土器甕の底部である。径２mmの白･黒色砂を多く含む。焼成は良く、橙色である。遺物は中パンケース１箱分出た。

**SC128（図 25・Ph.26）** 調査区中央東寄りで検出し、一辺 3.5 ～ 3.6m を測る。検出面が床面に相当する。検出時から明確にプランを捉えることができた。支脚高坏の配置から、カマドは北西壁中央にあったと考える。燃焼部の焼土は残っていない。SC090 に切られる。

遺物は 11 号ポリ袋１袋分で、土師器、須恵器片が出ている。いずれも小片で磨滅しており、図化していない。

**SC130（図 26、27・Ph.27）** 調査区中央付近で検出し、一辺 3.0 ～ 3.2m を測る。検出面が床面に相当する。SK260 に切られる。北西壁中央付近に焼土が残るため、カマドがあったと考える。

図 27 の 65 は土師器甑である。胎土に径１～５mm の白色砂を少量含む。焼成は良く、外面橙色、内面暗茶色を呈する。66 は須恵器坏蓋である。回転ナデ成形で外面にヘラケズリを施す。遺物は 11 号ポリ袋１袋分出ている。

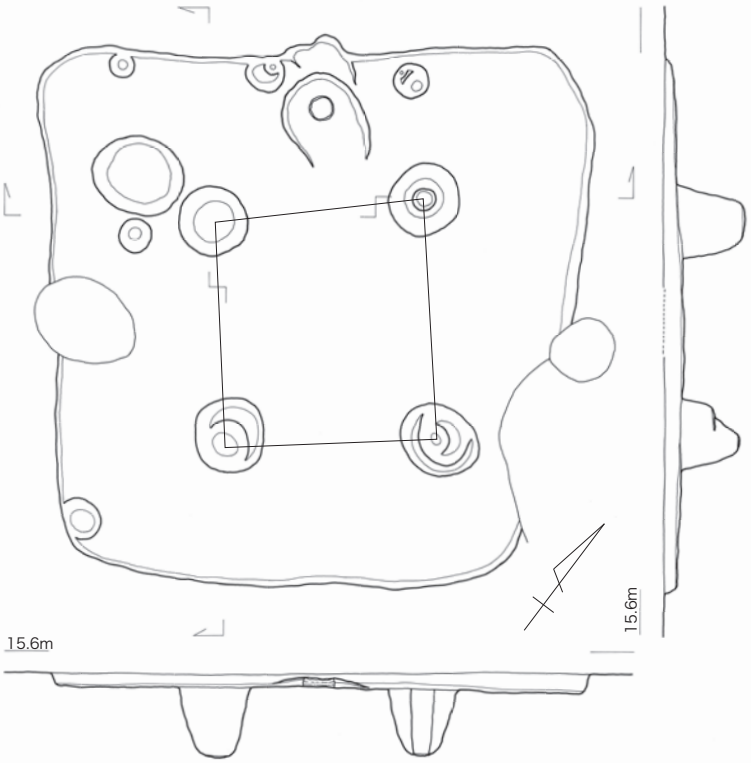



図 25　SC128 実測図（S=1/50）

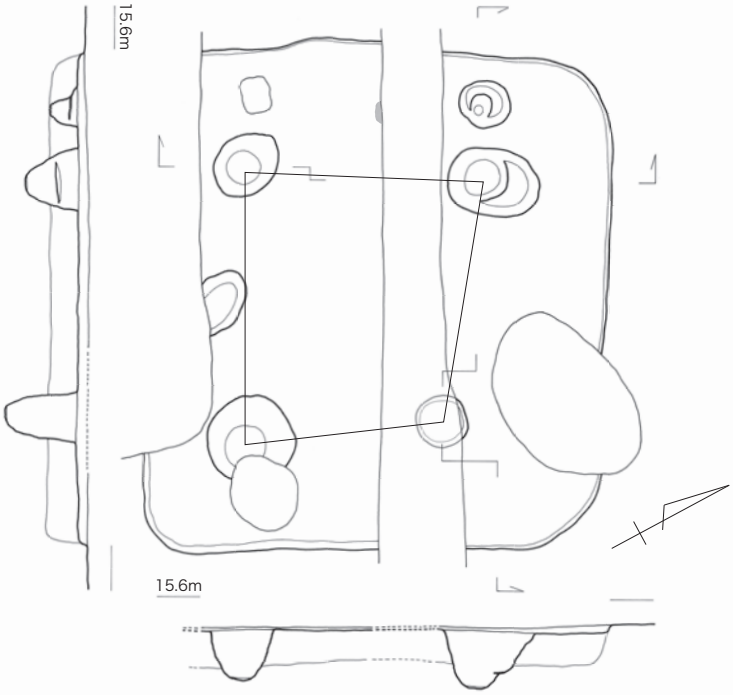



図 26　SC130 実測図（S=1/50）

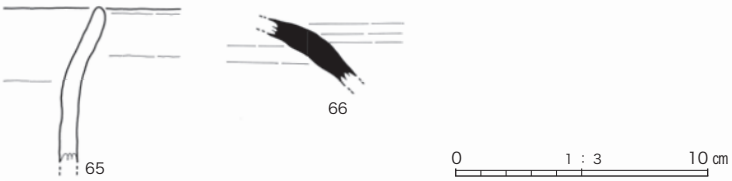



図 27　SC130 出土遺物実測図（S=1/3）

**SC170（図 28、29・Ph.28 ～ 30）** 調査区南端で検出し、一辺 4.1 ～ 4.2m を測る。検出面が貼床面に相当する。貼床は灰黄色シルト土である。南西壁中央に焼土があり、カマド燃焼部と考える。カマド構築土は残っていない。検出時は建物北側のプランが不明瞭だったため、当初は推定プランで掘方の掘削を進めた。その後、埋土の焼土･炭を手がかりにプランを確定させた。また、地形落ち（SX343）の堆積土（暗灰色粘土、黄色粘土）がSC170の上に堆積していたため、SC170の廃絶後にSX343が埋まったと思われる。SC200を切り、SD160に切られる。主柱穴のうち、SP179の底から完形の蛸壺（73）が出た。

図 29 の 67 ～ 71 は掘方、72 は焼土付近、73 は主柱穴 SP179 から出土した。67 ～ 69 は須恵器である。67 は坏身で、回転ナデ成形、外面 2/ 3 にヘラケズリ、底部内面に静止ナデを施す。口縁部に別個体の蓋の一部が釉着する。焼成は良く、青灰色を呈する。68 は坏蓋である。69 は提瓶で、外面に灰を被る。70 は長頸壺の口縁部である。71 は弥生土器甕の鋤形口縁である。72 は土師器甑か。焼成はやや不良で、暗茶色である。外面の器壁は剥離、内面は強いナデを施す。73 は蛸壺である。径 1 ～ 5 mm の白・黄・赤色砂を少量含む。焼成良好で、橙色を呈する。遺物は薄パンケース 1/ 3 箱分出た。

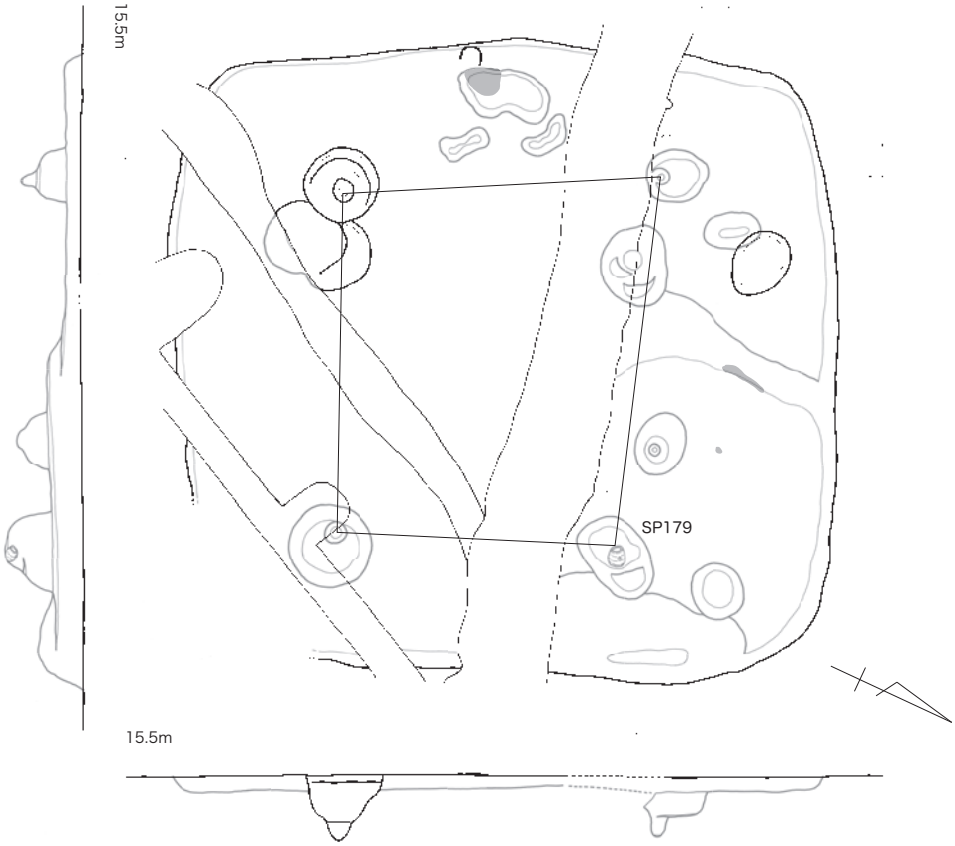



図 28　SC170 実測図（S=1/3）

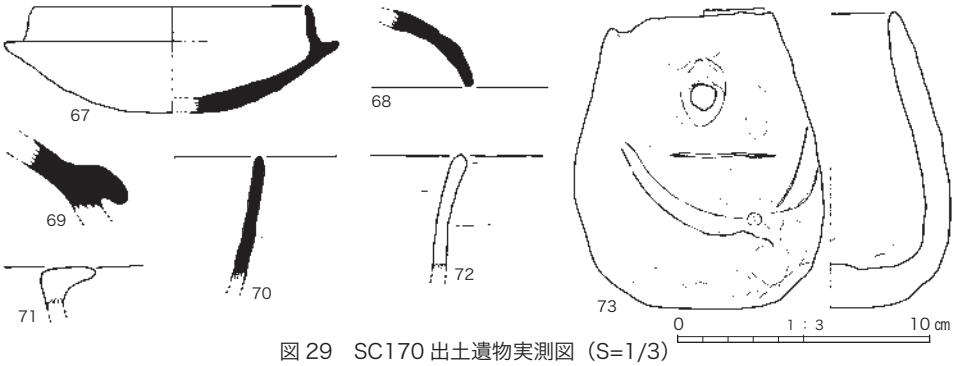



図 29　SC170 出土遺物実測図（S=1/3）

**SC175（図 30、31・Ph.33）** 調査区東端で検出し、一辺 5.8m を測る。埋土は淡黄灰色シルト土である。プランが他の竪穴建物より大きい。調査区壁際で全容がつかめなかったため、当初は地形の落ちの可能性も考えていた。カマドに相当する焼土はみられず、底面まで掘下げた。

出土遺物は図 31 の 74 ～ 79 である。74 ～ 77 は須恵器坏蓋、坏身である。77 は外面淡青灰色、内面アズキ色で、焼成は良い。1 / 4 から復元作図した。78 は弥生土器甕の底部である。79 は土師器甕で、焼成はやや不良、磨滅する。淡橙色である。

**SC192（図 30、31・Ph.33）** SC175 内で検出し、一辺 3.7m を測る。SC175 底面で遺構をはじめて捉えた。当初は大きな屋内土坑を想定していたが、掘り下げると主柱穴が出たため、竪穴建物と認識した。

図 31 の 80 ～ 82 は須恵器である。82 は甕で肩部を故意に打ち欠く。肩部より上は完存する。胴部片はない。裏返した状態で出土しており、甕などの置台として転用されたものか。

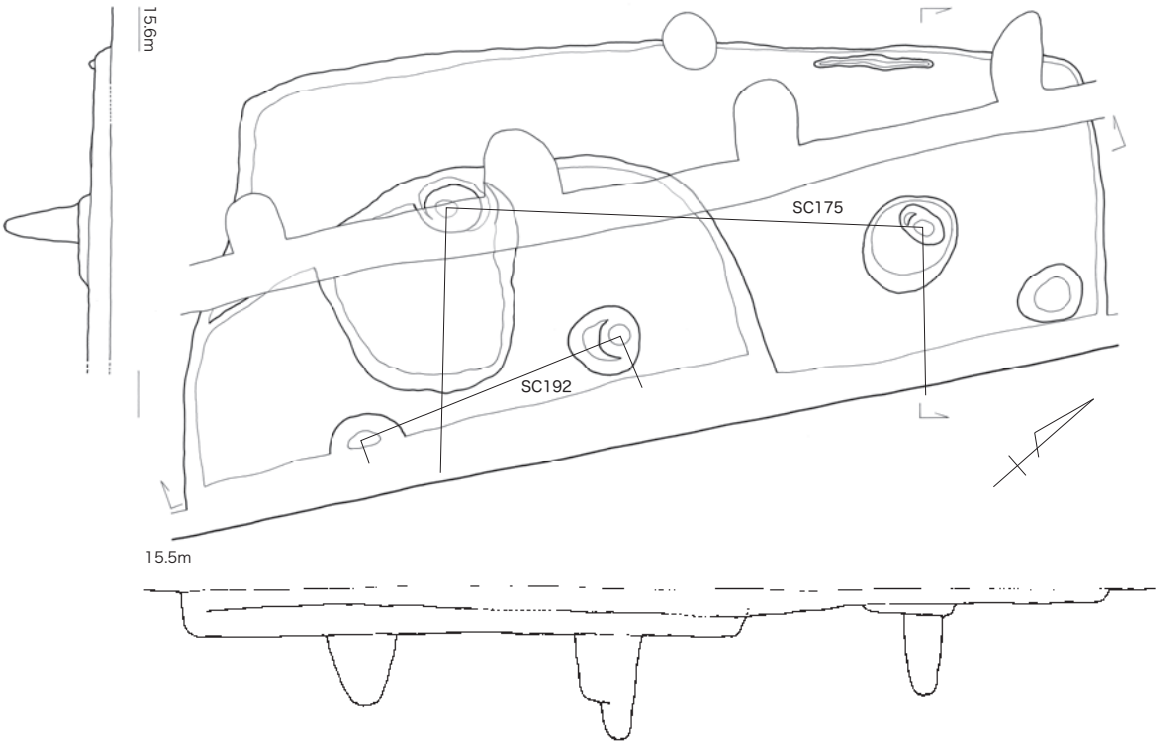



図 30　SC175・SC192 実測図（S=1/50）

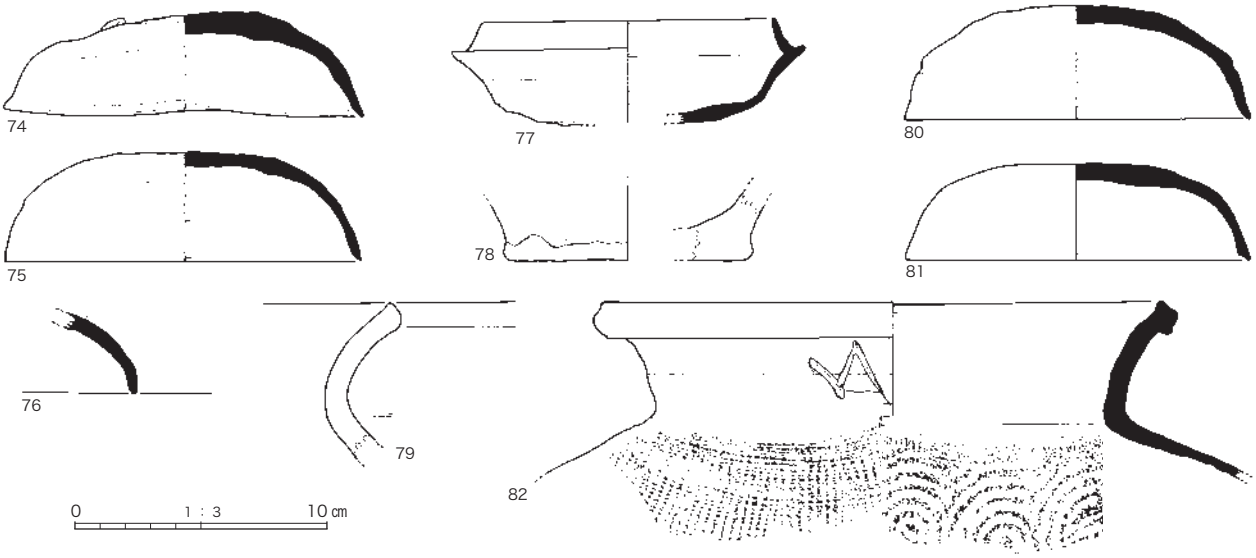



図 31　SC175・SC192 出土遺物実測図（S=1/3）

**SC180（図 32、34）** 調査区南東側で検出した方形の竪穴建物である。遺構検出時は、SC210 との切り合いを捉えることができず、SC180・SC210 全 体を 5 ㎝程度掘り下げた。北東壁中央にカマド燃焼部の焼土のみが残る。

図 34 の 83 ～ 85 は 須恵器で、83 は提瓶である。外面にカキメを施す。焼成は良く、外面はやや黄色みのある灰色、内面は灰色である。外面に自然釉を被る。84 は坏蓋である。85 は坏身で、回転ナデ成形、底部内面に静止ナデを施す。1 / 4 から復元作図した。遺物は薄パンケース 1 / 2 箱分出た。

**SC210（ 図 32 ～ 34・Ph.31 ～ 32）** SC180 の南西で検出し、一辺 3.7 ～ 3.8 を測る。SC180 も含めて全体を 5 ㎝掘下げたところ、北東壁のプランと、カマド部分の黄色粘土ブロック・焼土の広がりを確認した。明確にカマドのプランを捉えていないが、粘土の範囲から推定しつつ掘り下げた。遺構検出面から貼床面までの深さは 0.1m 程度である。主柱穴は掘方まで掘下げた段階で捉えた。

図 34 の 86・90・91 は SC210、87 は SC210 カマド、88 は SP197、89 は SP202 の出土遺物である。86 ～ 89 は須恵器で、86

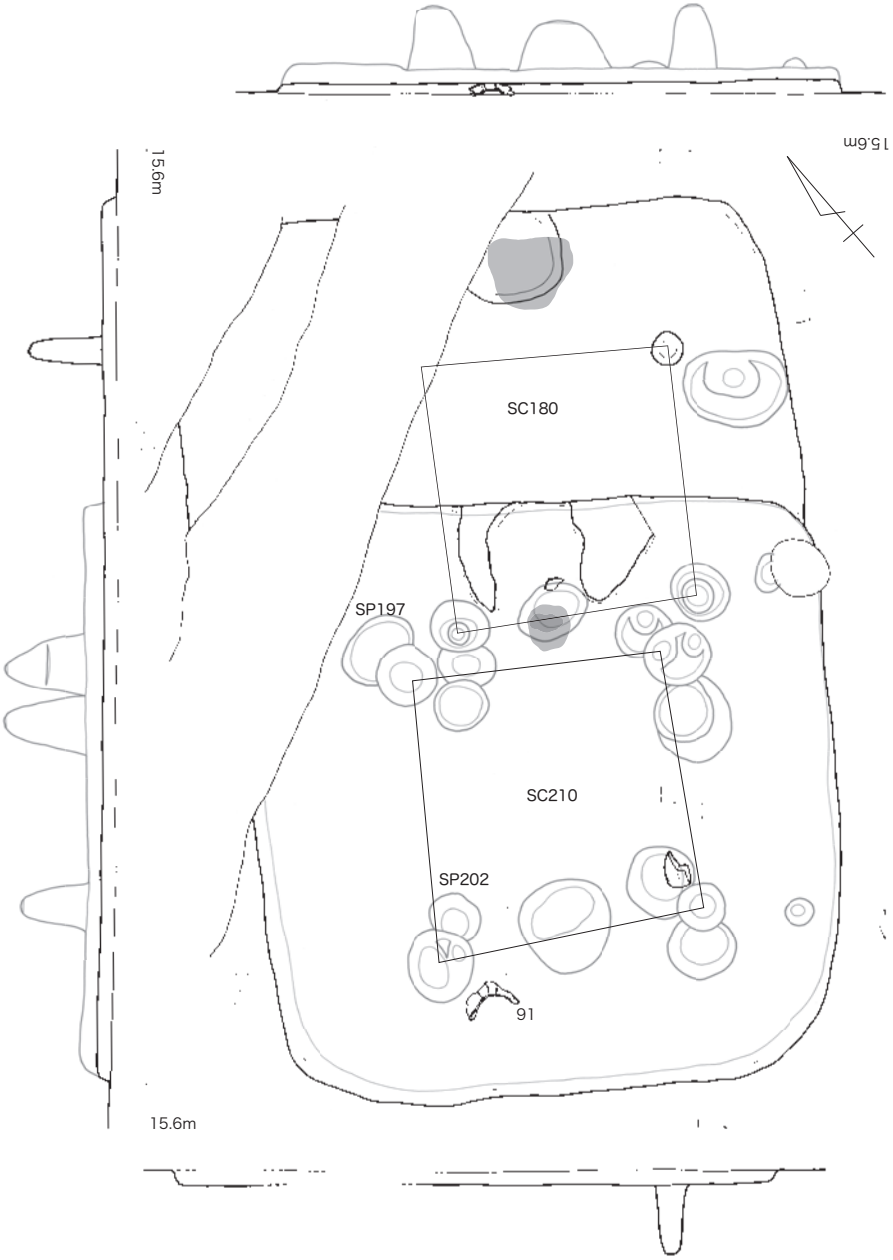



図 32　SC180・SC210 実測図（S=1/50）

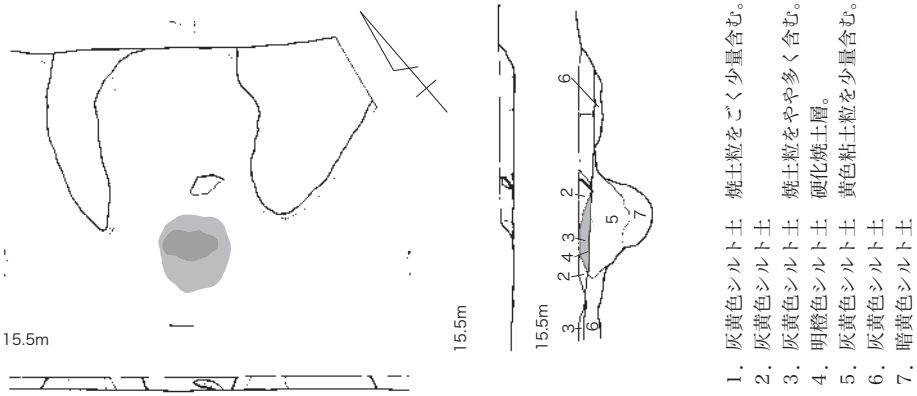



図 33　SC210 カマド実測図（S=1/30）

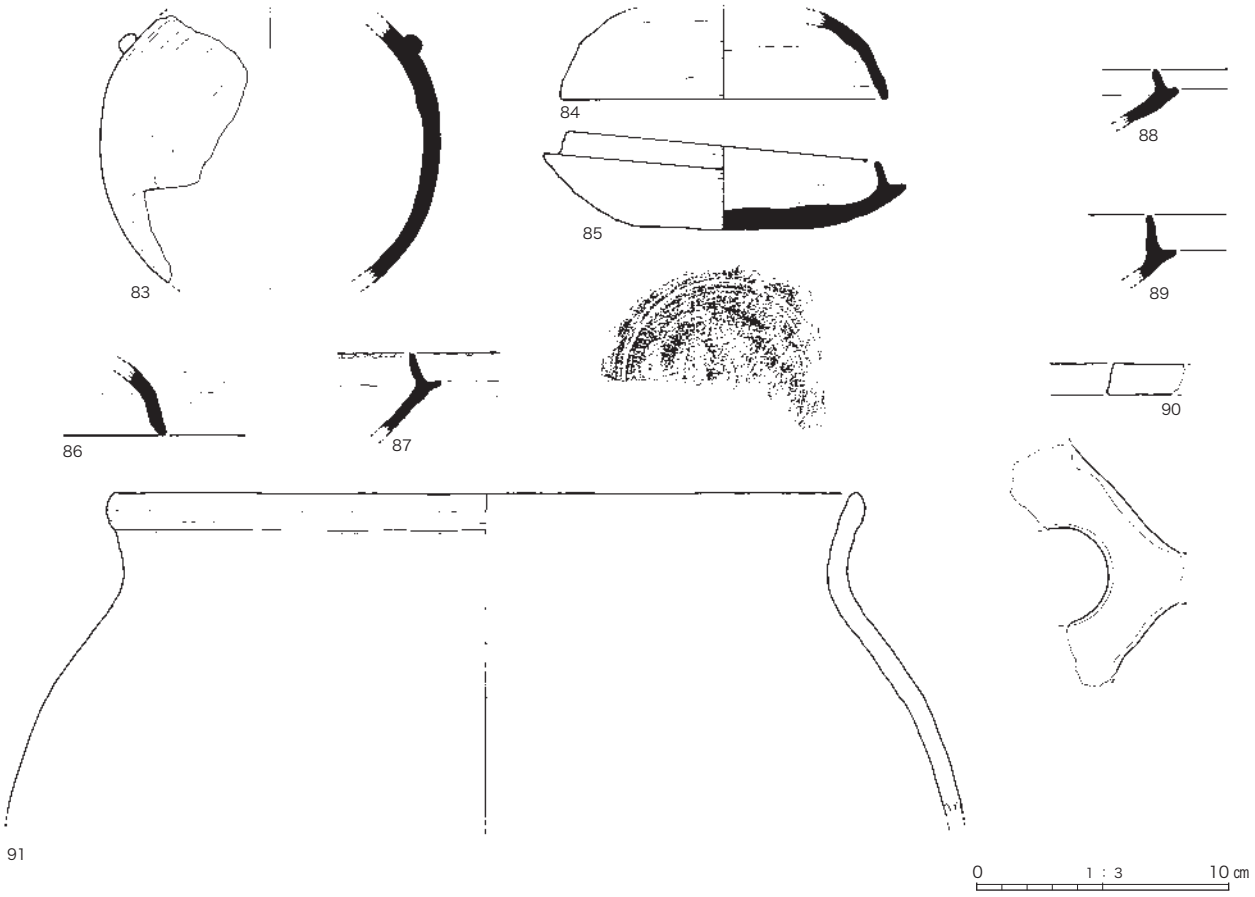



図 34　SC180・SC210・SP197・SP202 出土遺物実測図（S=1/3）

は坏蓋である。87 ～ 89 は坏身である。87 は焼成良好で、外面は赤みを帯びた青灰色、内面はアズキ色を呈する。口縁部を打ち欠く。90・91 は土師器で、90 は甑の底部である。径 1 ～ 2 mm の白色砂を少量含む。焼成は良く、橙色である。91 は甕である。焼成不良で橙色を呈する。磨滅で調整は不詳である。遺物は薄パンケース 1/ 2 箱分出た。

**SC187（図 35）**　調査区南で検出した。埋土は暗茶褐色シルト土である。SD115・SD150 など複数の遺構に切られるため、建物の構造はつかめていない。

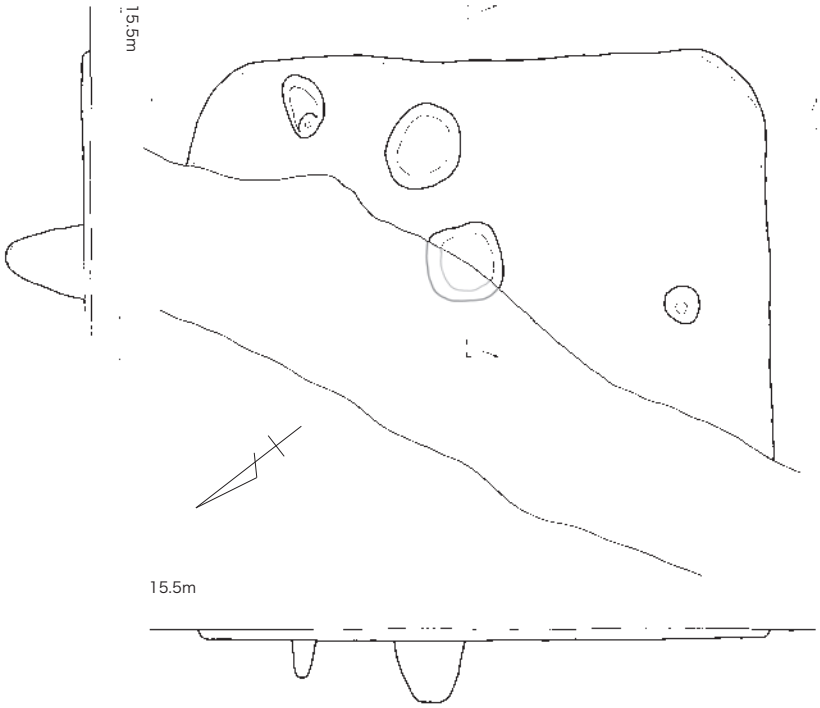



図 35　SC187 実測図（S=1/50）

**SC190（図 36、37、39・Ph.34 ～ 36）** 調査区南東側で検出し、南北軸 4.1m、東西軸 4.0m を測る。SC180 に切られる。遺構検出面から貼床面までの深さは 5 ㎝で、北壁中央にカマドが付くが、カマド袖の構築土と燃焼部の焼土がわずかに残るのみである。カマドは、強く焼けた焼土層（5 層）から、大きく 3 回の使用段階が想定できる。

図 39 の 92・97・100 は掘方、93 ～ 96 はカマド、98・99 は全体から出た。92 は砂岩質の砥石である。黄灰色で鉄分が沈着する。93 ～ 95 は土師器甕である。93 は径 1 ～ 5 mm の白色砂を少量含む。焼成は良く、外面強みのある橙色、内面淡橙色を呈する。底部外面に煤が着く。94 は焼成良好で橙色、やや磨滅する。径 1 ～ 2 mm の白色砂をやや多く含む。95 は焼成不良、外面強みのある橙色、内面橙色を呈する。96 は弥生土器甕で、胎土に径 1 ～ 2 mm の白・黒色砂を少量含む。焼成は良く、外面暗橙色、内面暗灰色である。内外面に強い横ナデを施す。97 ～ 100 は須恵器で、97 ～ 99 は坏蓋である。97 は 1/ 3 から復元した。100 は坏身である。遺物は薄パンケース 1 箱分出た。

**SC200（図 38、39・Ph.37）** 調査区南東端で検出し、東西軸長 3.8m を測る。SC170 に切られる。検出面から貼床面までの深さは 5 ㎝程度である。カマドは北壁中央に付き、構築土と支脚抜き取り穴、焼土が残る。掘方は掘り過ぎている。主柱穴は不明瞭である。図 39 の 101 は須恵器坏身である。

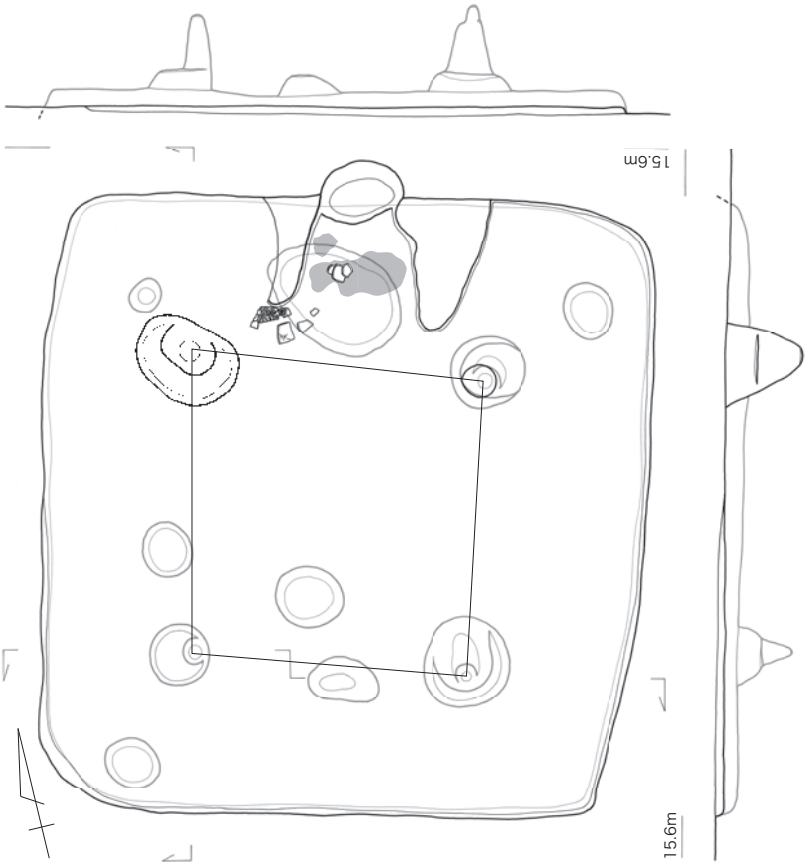
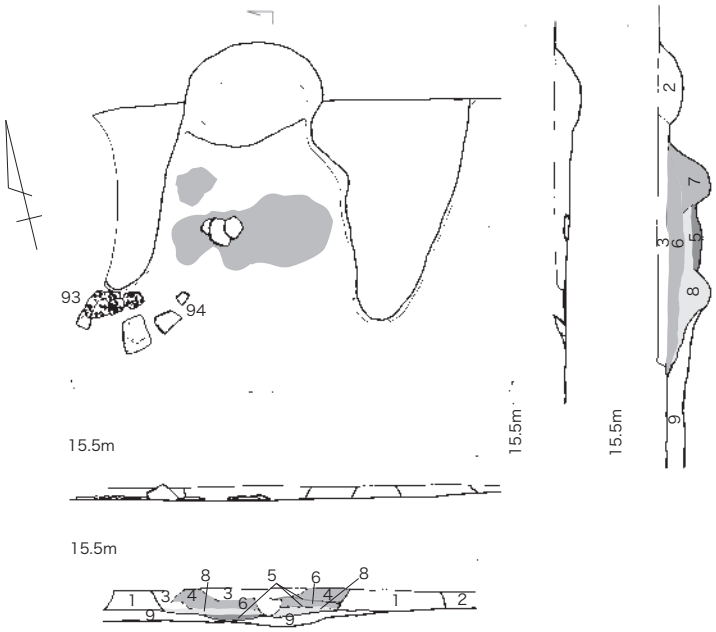



図 36　SC190 実測図（S=1/50）




1．黄色シルト土　　黄色みの強い黄色シルト土ブロックを少量含む。
2．灰黄色シルト土　　竪穴建物埋土。
3．黄灰色シルト土　　カマド上部の構築土。
4．灰橙色シルト土　　焼土粒を少量含む。
5．橙色シルト土　　焼土層。
6．暗灰橙色シルト土　焼土粒を少量含む。
7．暗灰橙色シルト土　焼土粒を多く含む。
8．灰黄色シルト土
9．黄灰色シルト土

図 37　SC190 カマド実測図（S=1/30）

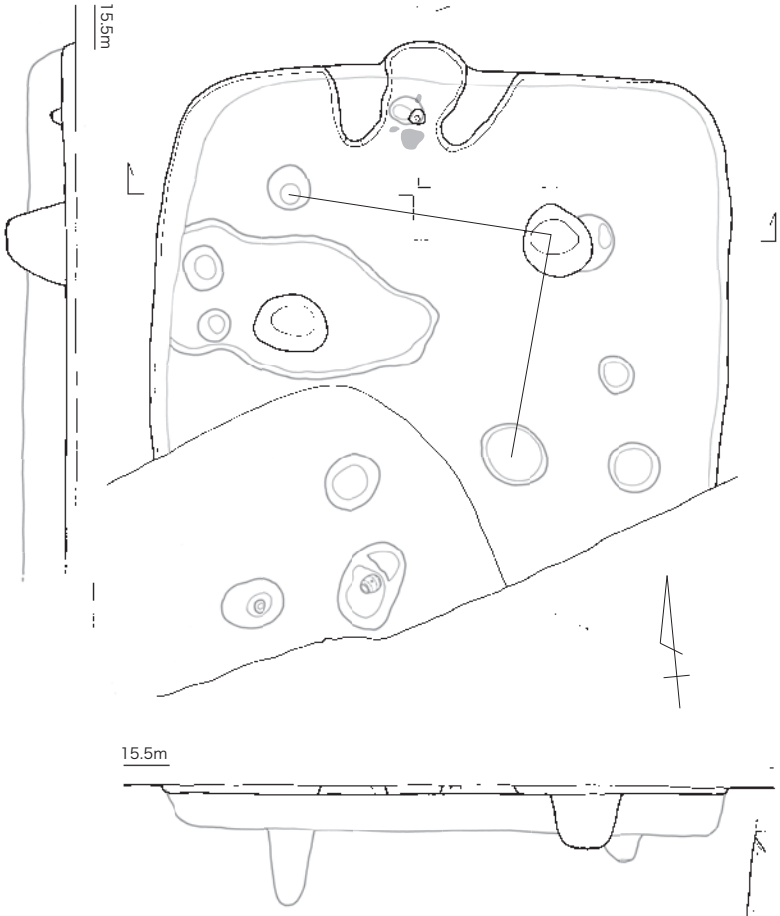



図 38　SC200 実測図（S=1/50）

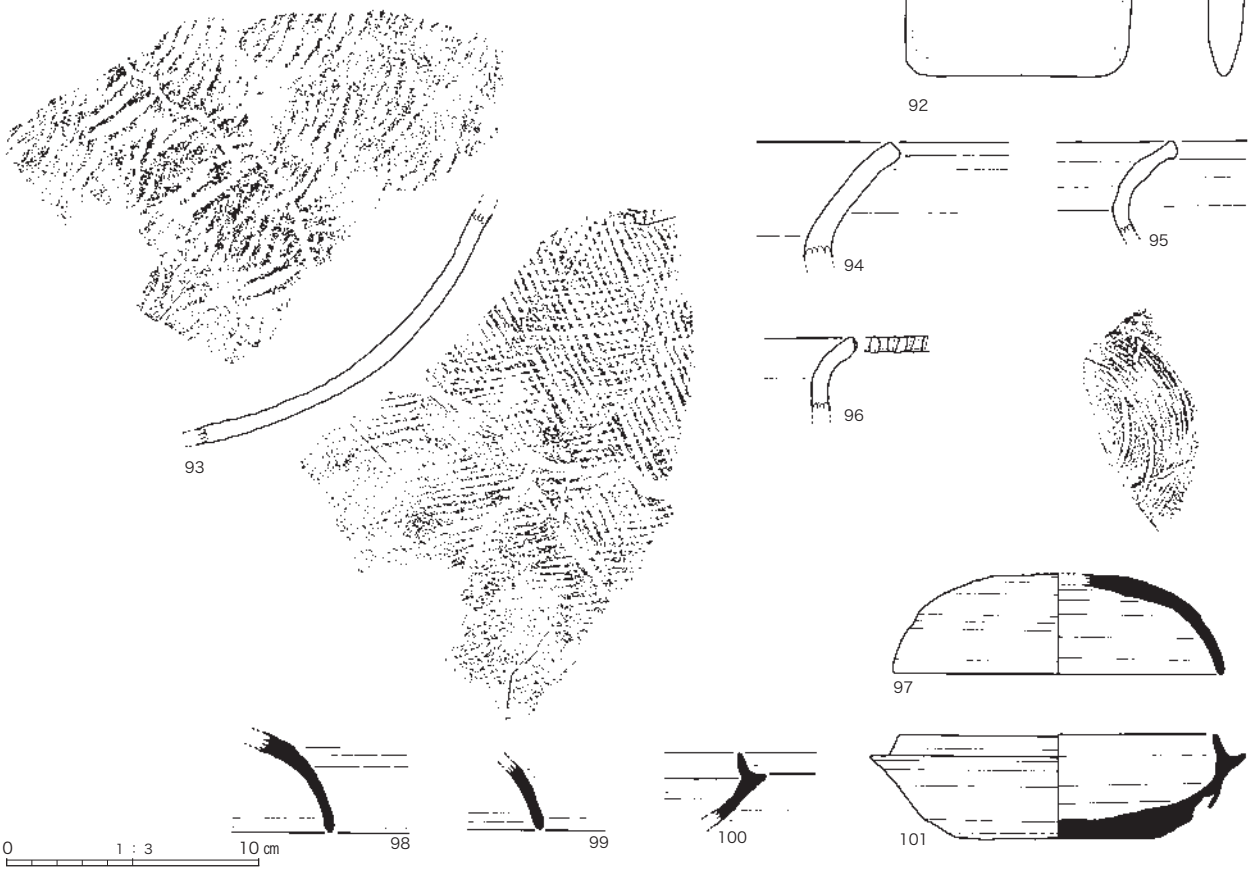



図 39　SC190・SC200 出土遺物実測図（S=1/3、92 は S=1/2）

**SC220（図 40、41・Ph.38、39）** 調査区南側で検出し、主軸長 3.2 ～ 3.4m を測る。遺構検出面から貼床上面までの深さは 0.1m 程度で、埋土は暗灰黄色シルト土である。カマドは北東壁中央に付く。西側の袖はカクランで壊れる。支脚は石で、原位置はとどめていない。燃焼部の焼土が残る。

図 41 の 102 はカマド、103 は掘方、104 ～ 107 は全体から出土した。102･105･107 は須恵器である。102 は甕で、黄灰色を呈し焼成は不良である。外面にタタキがみられるが、磨滅している。105 は坏蓋である。焼成はやや不良である。106 は土師質須恵器の坏身である。橙色で焼成不良、1 / 6 から復元作図した。107 は坏身で、焼成不良で磨滅する。淡灰色を呈し、口縁端部に二次的な被熱痕がある。遺物は薄パンケース 1 箱分出土した。

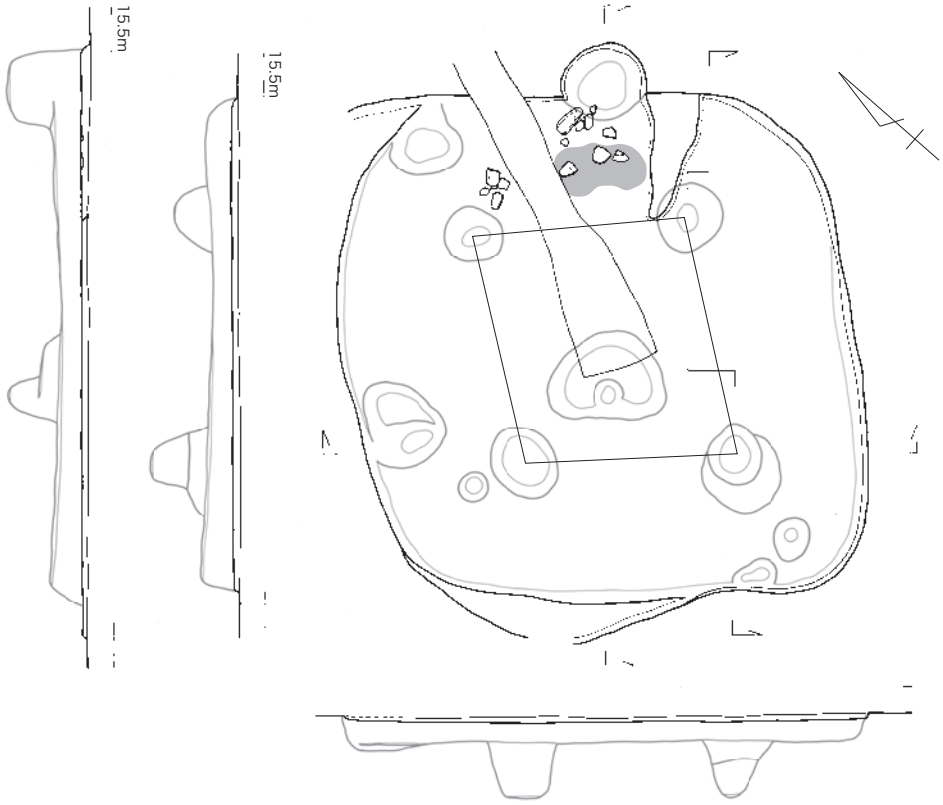



図 40　SC220 実測図（S=1/50）

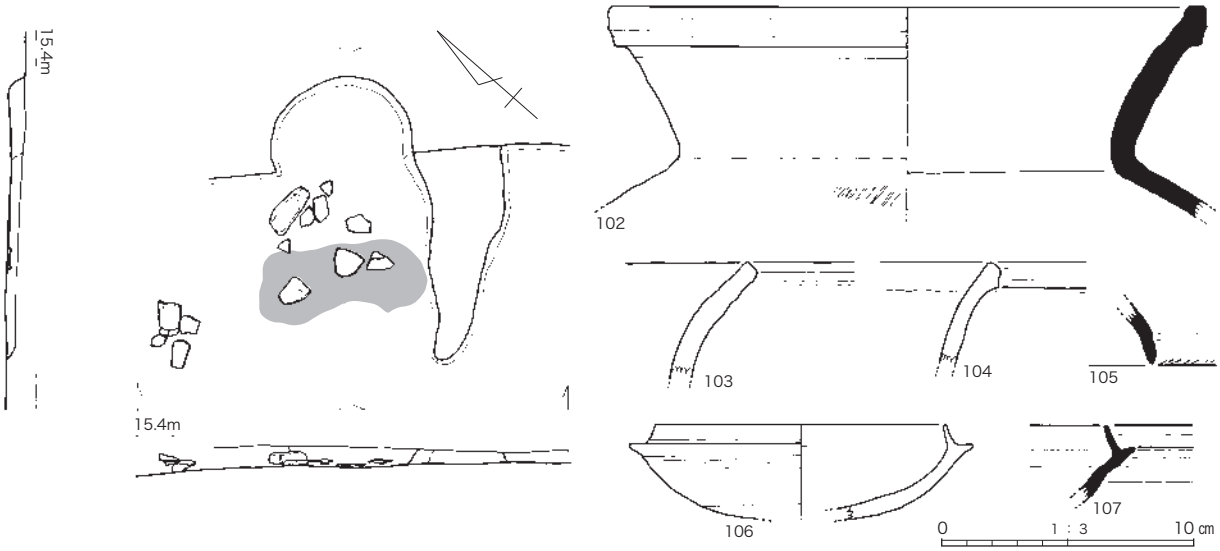



図 41　SC220 カマド実測図（S=1/30）・出土遺物実測図（S=1/3）

**SC250（図 42 ～ 44・Ph.40 ～ 43）** 調査区中央東寄りで検出し、一辺 4.8m を測る。遺構検出時は建物全体を淡黄色シルト土が覆っていたため、捉えることができなかった。北側のカクランを掘削したところ、壁面にカマドの焼土がみえたため、淡黄色シルト土の範囲全体を 0.1m ほど下げて再度遺構検出を試みた。不明瞭だが、地山ブロック混じりの暗灰色シルト土でプランを捉えた。検出面から建物床面までの深さは 0.15m 程度である。カマドは北東壁中央に付き、袖の構築土、支脚石、燃焼部の焼土が残る。支脚手前には完形の須恵器坏身が置かれていた。二次的な被熱痕跡がないため、カマド廃絶後に置いたと思われる。カマドや南壁付近の床面には焼土炭粒が広がる。また、建物中央付近の床面に硬化面があった。

図 44 の 108 ～ 111 は土師器である。108 ～ 110 は鉢で、108 は焼成やや不良、外面淡褐色、内面暗橙色を呈する。口縁内面にコゲが着く。109 は胎土に径 1 ～ 3 mm の白色砂を少量含む。焼成はやや不良で淡橙色である。やや磨滅する。110 は橙色で焼成不良である。111 は甕の胴部である。径 1 mm ～ 1 ㎝の白･赤色砂を多く含む。焼成は良く橙色を呈する。外面頸部は横ナデ、胴部は縦ハケ、内面はナデ･指オサエを施す。112 ～ 115 は須恵器である。112 は坏身で径 1 ～ 3 mm の白色砂を少量含む。焼成は良く、青灰色である。回転ナデ成形で、外面 2/ 3 にヘラケズリ、底部内面に静止ナデを施す。113 はハソウである。焼成は良く、青灰色を呈する。114 は高坏の脚か。径 2 mm の孔がある。115 は高坏の脚で、胎土・焼成ともに良く、外面灰色、内面淡灰色を呈する。116 ～ 118 は弥生土器である。116 は甕で、径 1 mm の白色砂を少量含む。焼成は良く、口縁部は黒橙色、胴部は橙色である。117 は壺である。焼成不良で淡橙色を呈する。径 1 ～ 3 mm の白色砂を多く含む。118 は甕の底部である。やや磨滅する。117・118 は掘方から出た。遺物は中パンケース 1 箱分出土した。

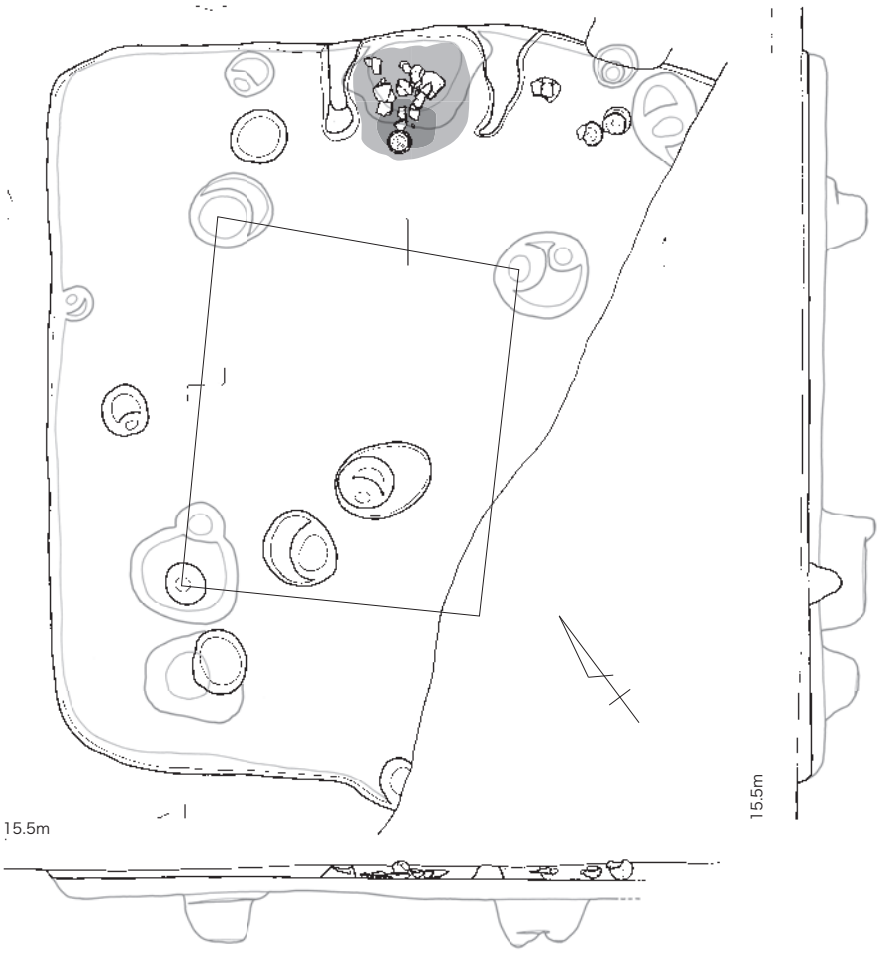
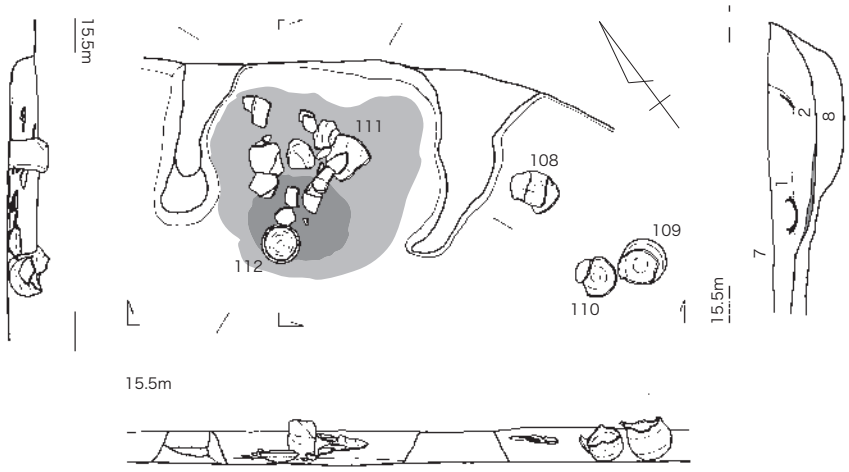
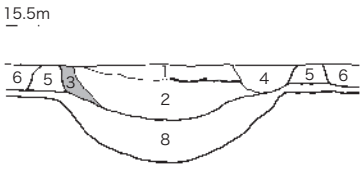



図 42　SC250 実測図（S=1/50）




1．黄色シルト土　　黄色粘土粒を少量含む。カマド上部の崩落土。
2．灰赤褐色シルト土　灰主体。焼土粒をやや多く含む。
3．赤褐色シルト土　　焼土。
4．灰色シルト土
5．黄色シルト土　　カマド袖部の構築土。
6．灰黄色シルト土　　竪穴建物の埋土。
7．赤褐色シルト土　　焼土
8．暗灰黄色シルト土　貼床

図 43　SC250 カマド実測図・土層図（S=1/30）

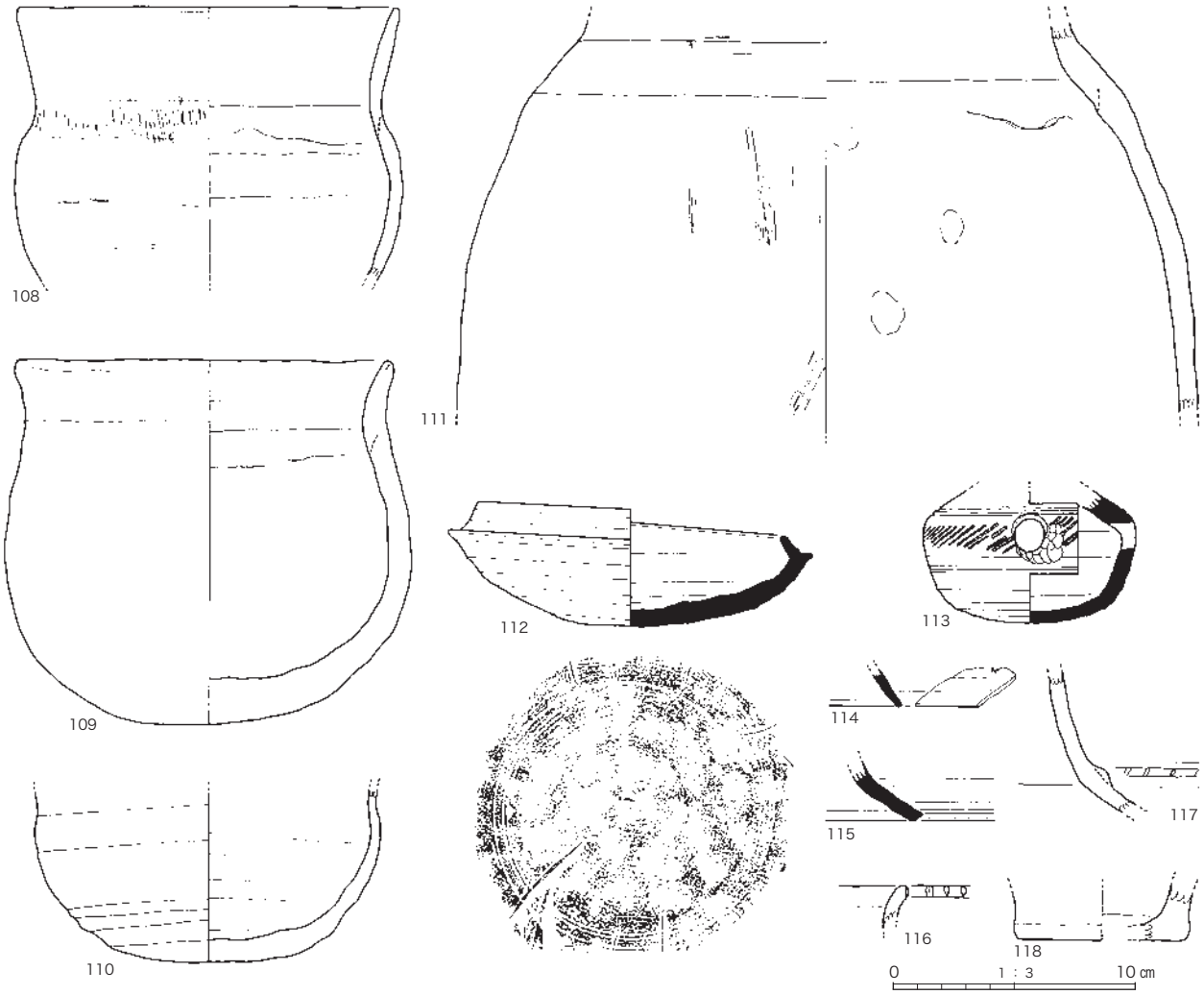



図 44　SC250 出土遺物実測図（S=1/3）

**SC280（図 45、46・Ph.44）** 調査区中央で検出し、南北軸長 4.6m を測る。遺構検出時、SK260 との切り合いを捉えられなかったため、SK260・SC280 全体を掘下げた。埋土は暗灰黄色シルト土である。カマドは南西壁中央に取り付く。袖の構築土が一部残る。カマドの西側壁際で土師器甕、鉢などが出土した。

図 46 の 119 ～ 123 は土師器である。119 は鉢で、胎土に径 1 mm の白色砂粒を少量含む。焼成はやや不良で、暗橙色を呈する。内面にコゲ、外面に煤が付着する。胴部外面は調整不明瞭、胴部内面は指ナデを施す。底部外面は不定方向のハケを施す。120 ～ 123 は甕である。120 は焼成良好で、明褐色を呈する。121・122 は焼成やや不良で、淡橙色である。121 は口縁部回転ナデ、肩部外面はタタキを施し、内面に当具痕が残る。122 は胴部外面にタタキ、底部外面に粗いケズリを施す。123 は焼成やや不良で、外面暗橙色、内面橙色である。径 1 ～ 5 mm の白色砂を少量含む。外面はタタキ、内面はケズリを施す。遺物は薄パンケース 1 / 2 箱出土した。

**SC300（図 47、48・Ph.45）** 調査区南端で検出し、東西軸長 4.3m を測る。検出面から床面までの深さは 0.5m 程度である。中央に炉、壁際にコの字形のベッド状遺構をもつ。ベッド状遺構は明確な段にならずだらだら床面へ下がる。北西側の一部を掘りすぎている。貼床はない。南東壁中央に梯子穴があり、底に根石を置く。主柱穴は 2 本である。

図 48 の 124 ～ 127、129 ～ 130 は土師器である。124・125 は高坏で、124 は焼成良好で明橙色を呈する。径 1 mm の白色砂をごく少量含む。125 は焼成不良で、淡黄灰色である。径 1 mm の白・茶・橙色砂粒を少量含む。磨滅で調整は不明瞭である。126・127・129・130 は甕である。126 は焼成不良で磨滅する。129 は頸部外面に縦ハケ後横ハケ、胴部外面に横ハケ、頸部内面に指オサエ、胴部内面にケズリを施す。

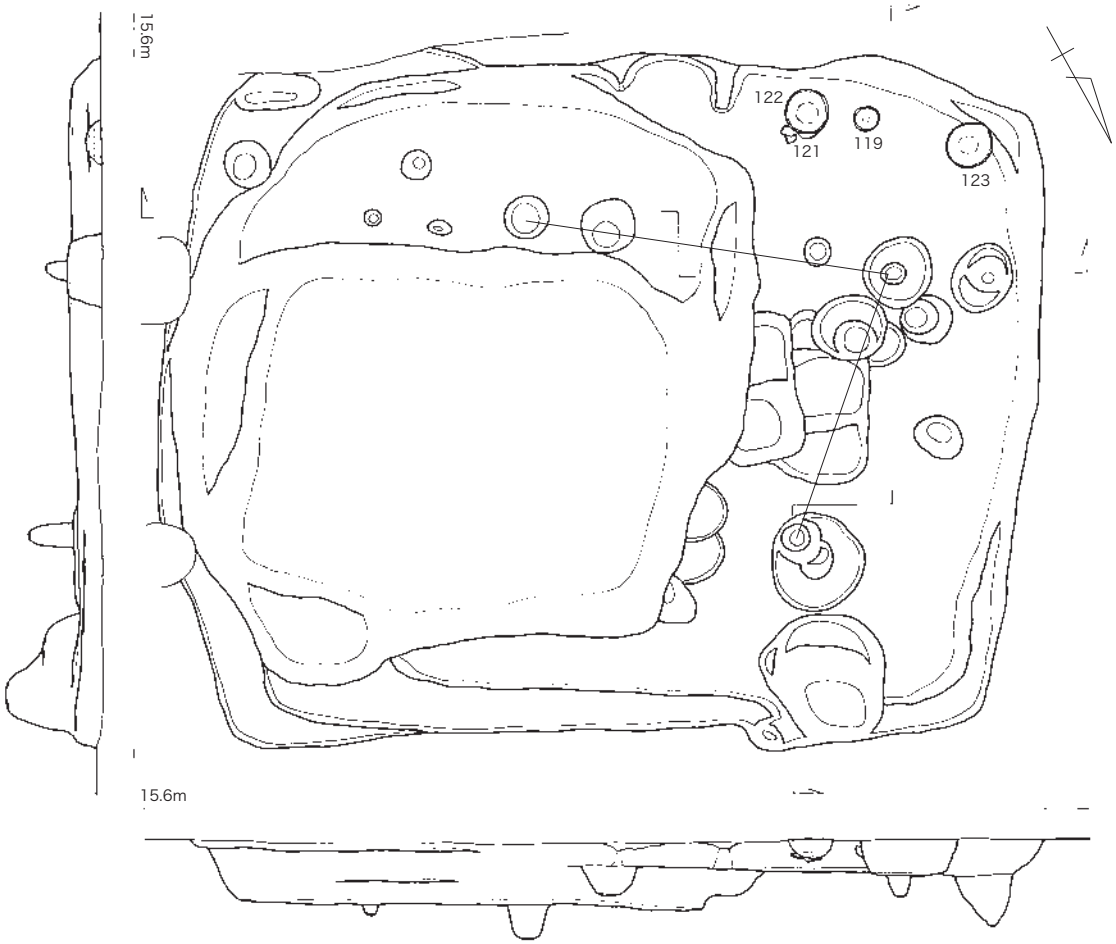



図 45　SC280 実測図（S=1/50）

焼成良好で、淡黄灰色を呈する。胎土に径 1 mm の白・灰・橙色砂粒を多く含む。炉から出た。130 は焼成不良で、橙色である。床面から出た。128 は鞴羽口で、端部が強く焼けて黒灰色を呈する。端部以外は橙色で、焼成は良くない。131・132 は弥生土器甕である。131 は焼成不良で橙色を呈する。胎土に径 1 ～ 2 mm の白色砂をごく少量含む。132 は鋤形口縁で、焼成は良く橙色である。床面から出た。

**SC350（図 49 ～ 51・Ph. 46）** 調査区中央南寄りで検出した長軸長 6.4m、短軸長 4.6m の方形竪穴建物である。中央に炉があり、北・南両壁際にベッド状遺構をもつ。ベッド状遺構は、明確な段差があるが、北端付近はやや不明瞭だった。南側ベッドの壁際には焼土・炭粒が堆積する。主柱穴は２本で、東壁中央に梯子穴（SP433）がある。埋土は灰褐色シルト土である。遺構検出時は、プランが不整形だったため複数竪穴建物の重複だと考えたが、切り合いを捉えられず床面まで掘下げた。①建物北西側に炭層が薄く広がり、その付近に須恵器坏身・甕などが出ていた（カマドか）、②須恵器の出土は検出面から 15㎝程度の深さまでである、③南東壁に不自然な張り出しがある、以上をふまえれば、この部分に別の竪穴建物があったと思われる。よって、抽出図化した古墳時代後期の須恵器・土師器は、SC350 とは別の竪穴建物に伴う可能性が高い。

図 50 の 133 ～ 136 は土師器で、133 は甕、134・135 は高坏、136 は坏である。いずれも焼成不良で磨滅する。133 は口縁部ナデ、胴部外面にタタキを施し、内面に当具痕が残る。137 ～ 146 は須恵器で、137 ～ 140 は坏蓋、141 は蓋、142 は高坏脚、

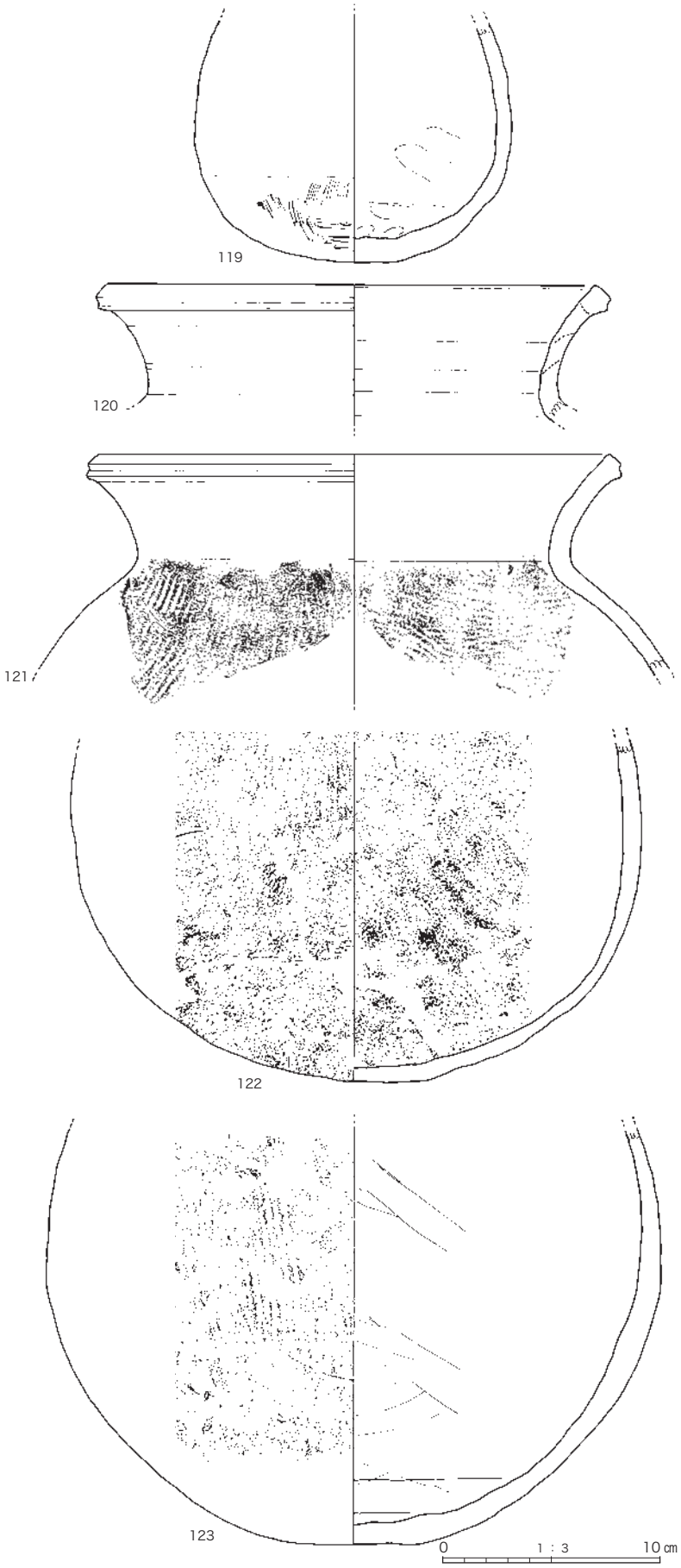
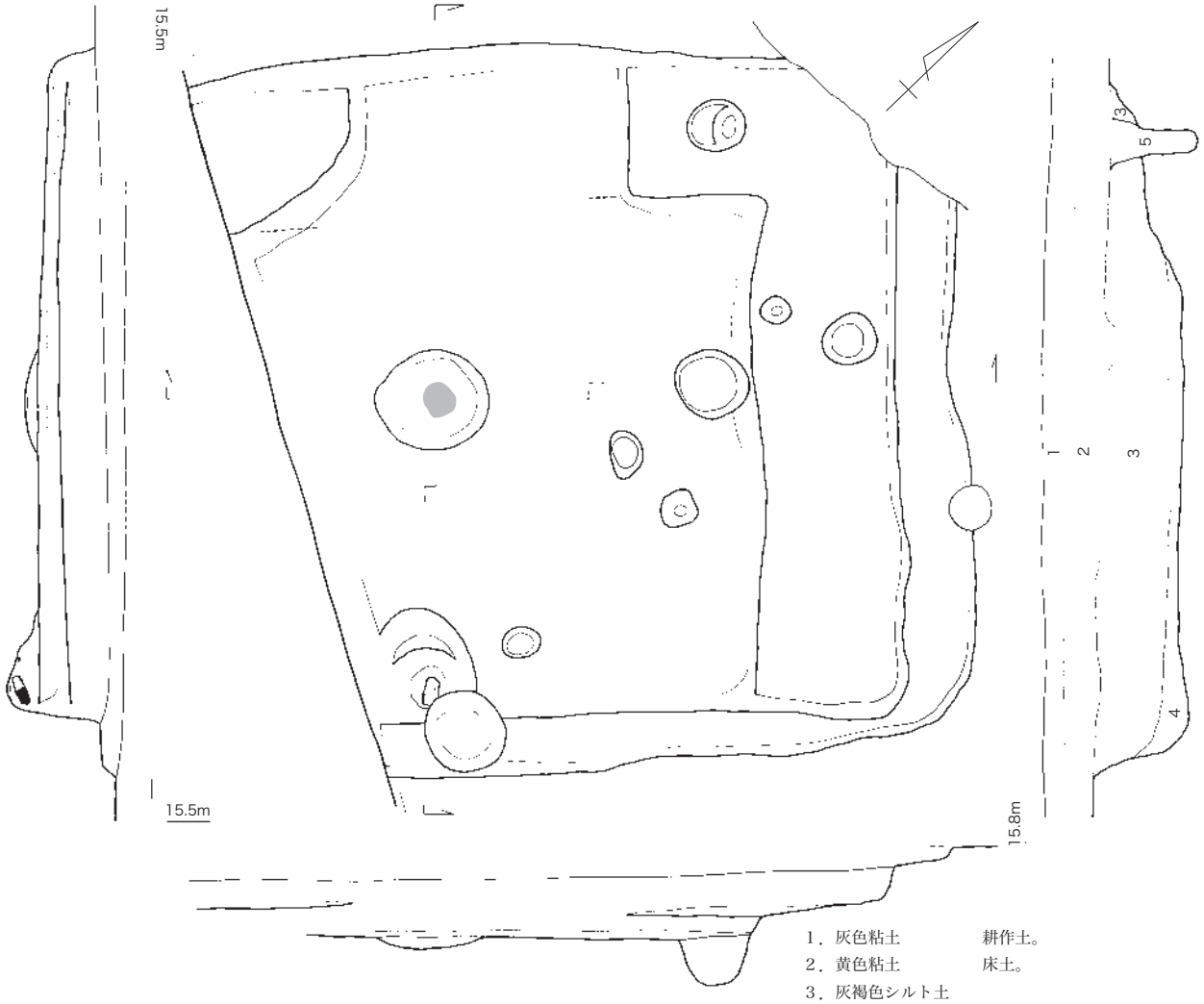
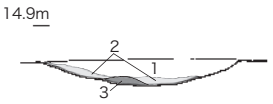


図 46　SC280 出土遺物実測図（S=1/3）




1．灰色粘土　　耕作土。
2．黄色粘土　　床土。
3．灰褐色シルト土
4．暗灰褐色シルト土　炭粒を少量部分的に含む。
5．暗灰褐色シルト土　黄色シルト粒をごく少量含む。




1．暗灰色シルト土　炭粒をごく少量含む。
2．暗灰色シルト土　炭・焼土粒をやや多く含む。
3．明橙色シルト土　硬化した焼土。

図 47　SC300 実測図（S=1/50）・炉土層図（S=1/30）

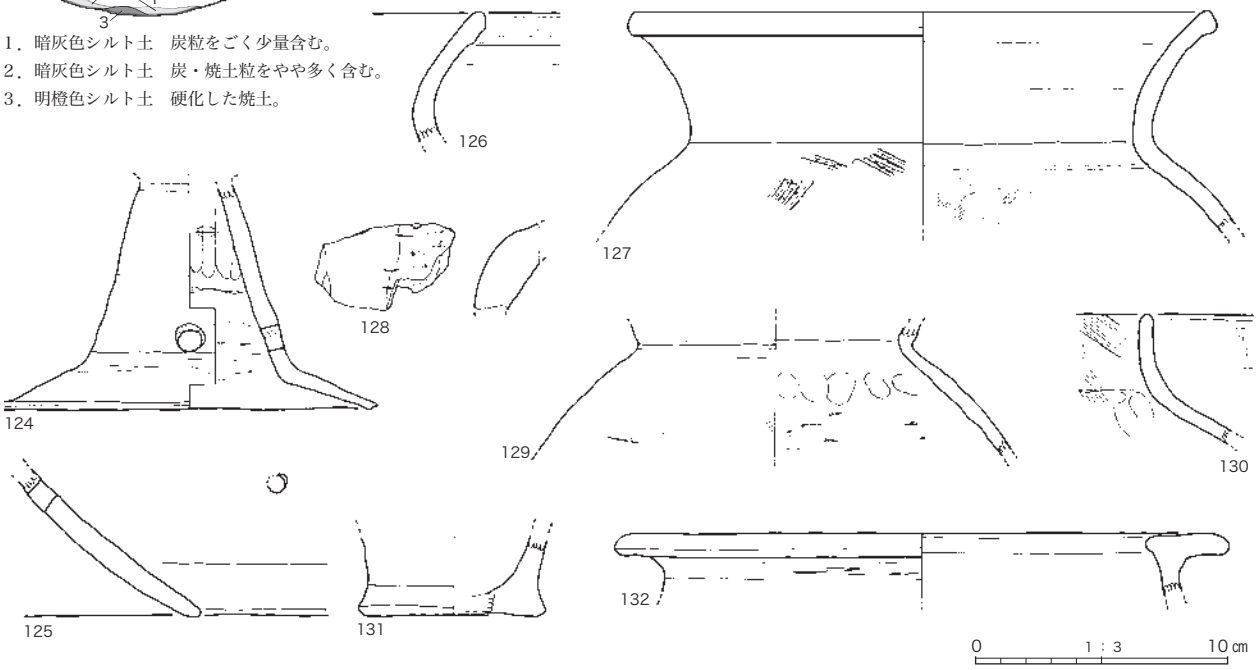



図 48　SC300 出土遺物実測図（S=1/3）

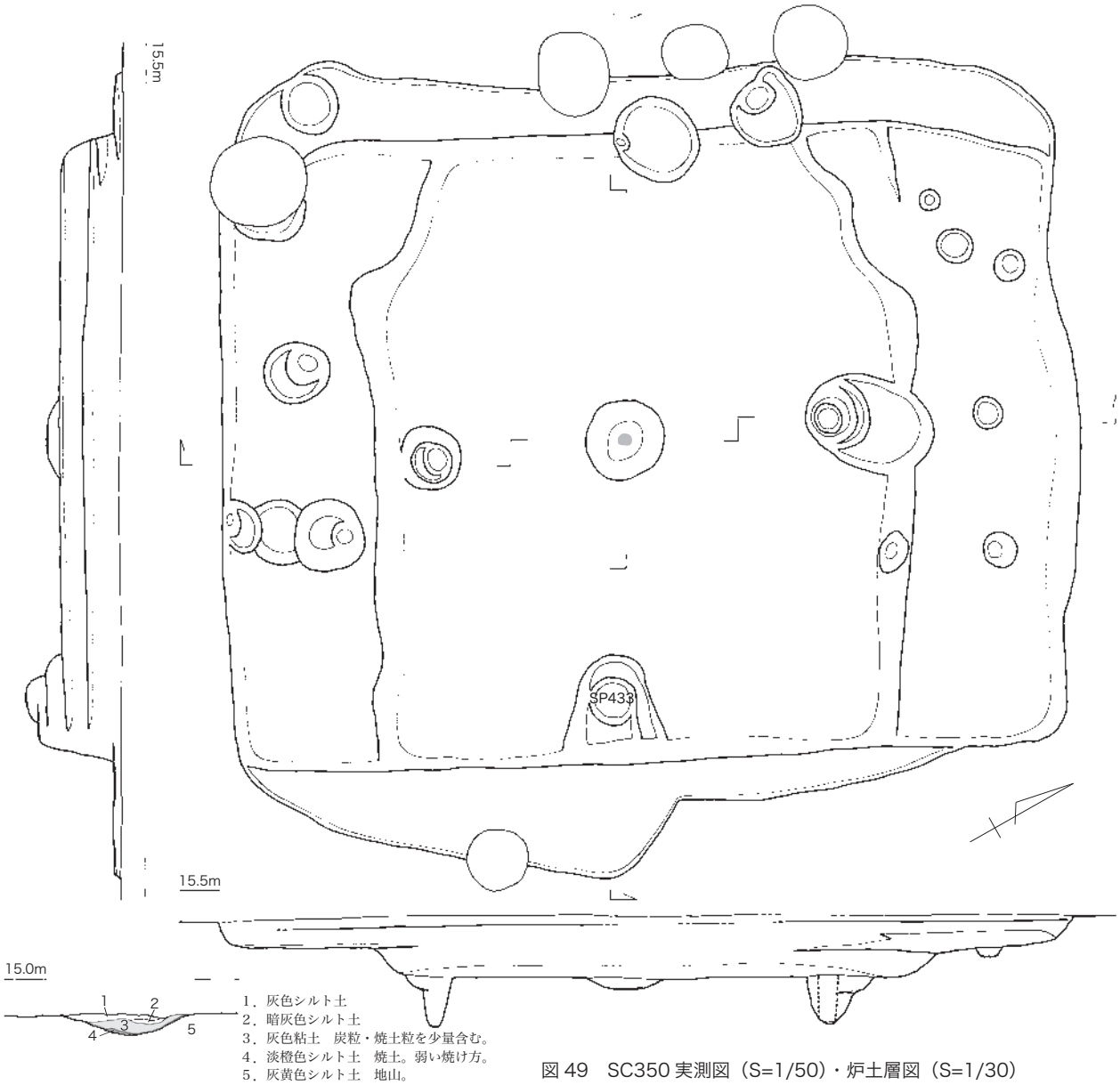



図 49　SC350 実測図（S=1/50）・炉土層図（S=1/30）

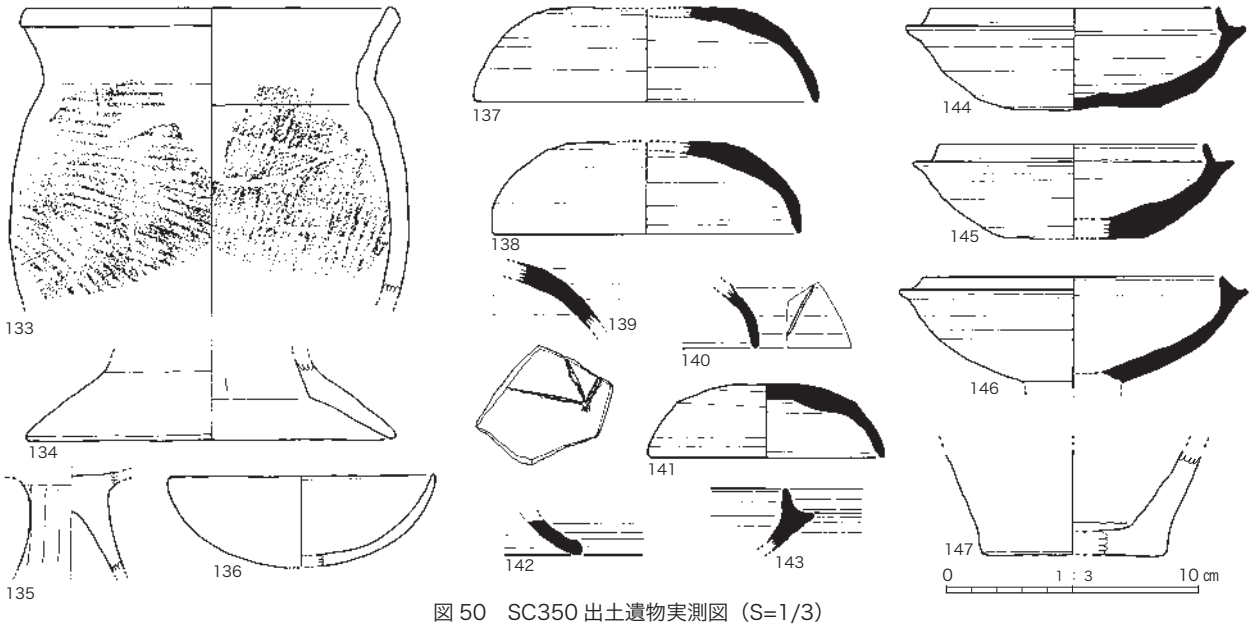



図 50　SC350 出土遺物実測図（S=1/3）

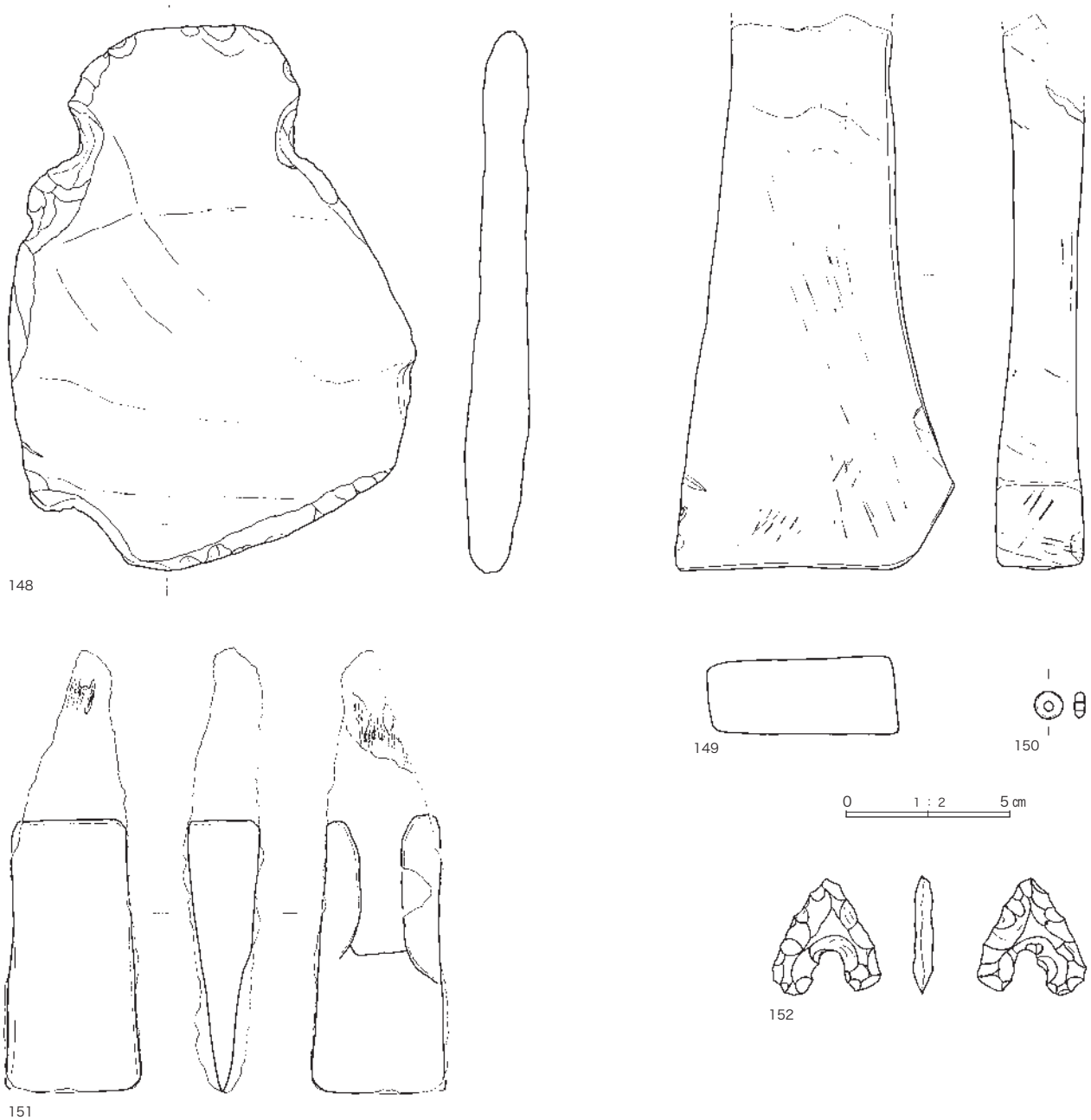



図 51　SC350・SP433 出土遺物実測図（S=1/2、152 は S=1/1）

143 ～ 145 は坏身、146 は高坏である。146 は胎土精良、焼成不良で磨滅する。147 は弥生土器の甕底部である。図 51 の 148 は頁岩の石錘で、淡緑灰色を呈する。149 は砂岩製砥石でやや黄色みのある灰色である。152 は滑石製の臼玉である。151 は袋状鉄斧で、ソケット部に柄の木質が残る。152 は安山岩製の石鏃である。遺物は薄パンケース 1 箱分出た。

**SC460（図 52 ～ 54・Ph.47 ～ 49）**　調査区南端で検出し、一辺 2.6m を測る。SC300 を切るが、切り合いの判断ミスで、先に SC300 を掘削している。カマドは北西壁中央に付く。支脚抜取穴、燃焼部焼土、袖部構築土が残る。カマド中央部を SD160 が切る。カマドの北東横壁際で土師器甑・甕がまとまって出た。

図 54 の 153 ～ 155 は須恵器の坏身である。155 は胎土に径 1 ～ 5 mm の白色砂を少量含む。焼成は良くアズキ色である。回転ナデ成形で、底部外面に手持ちナデ、内面に不定方向の指ナデを施す。156 ～ 161 は土師器である。158 ～ 160 は甕である。161 は甑で、1 / 2 から復元作図した。径 1 ～ 3 mm の白色砂を少量含む。橙色でやや磨滅する。162 は泥岩質の砥石で、暗青灰色を呈する。

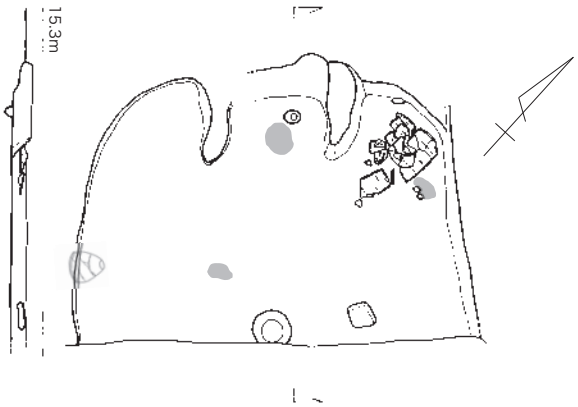



図 52　SC460 実測図（S=1/50）

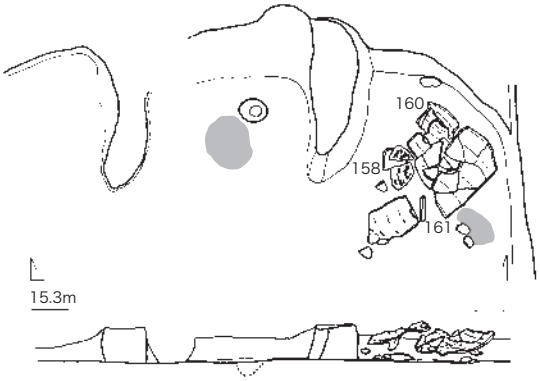



図 53　SC460 カマド実測図（S=1/30）

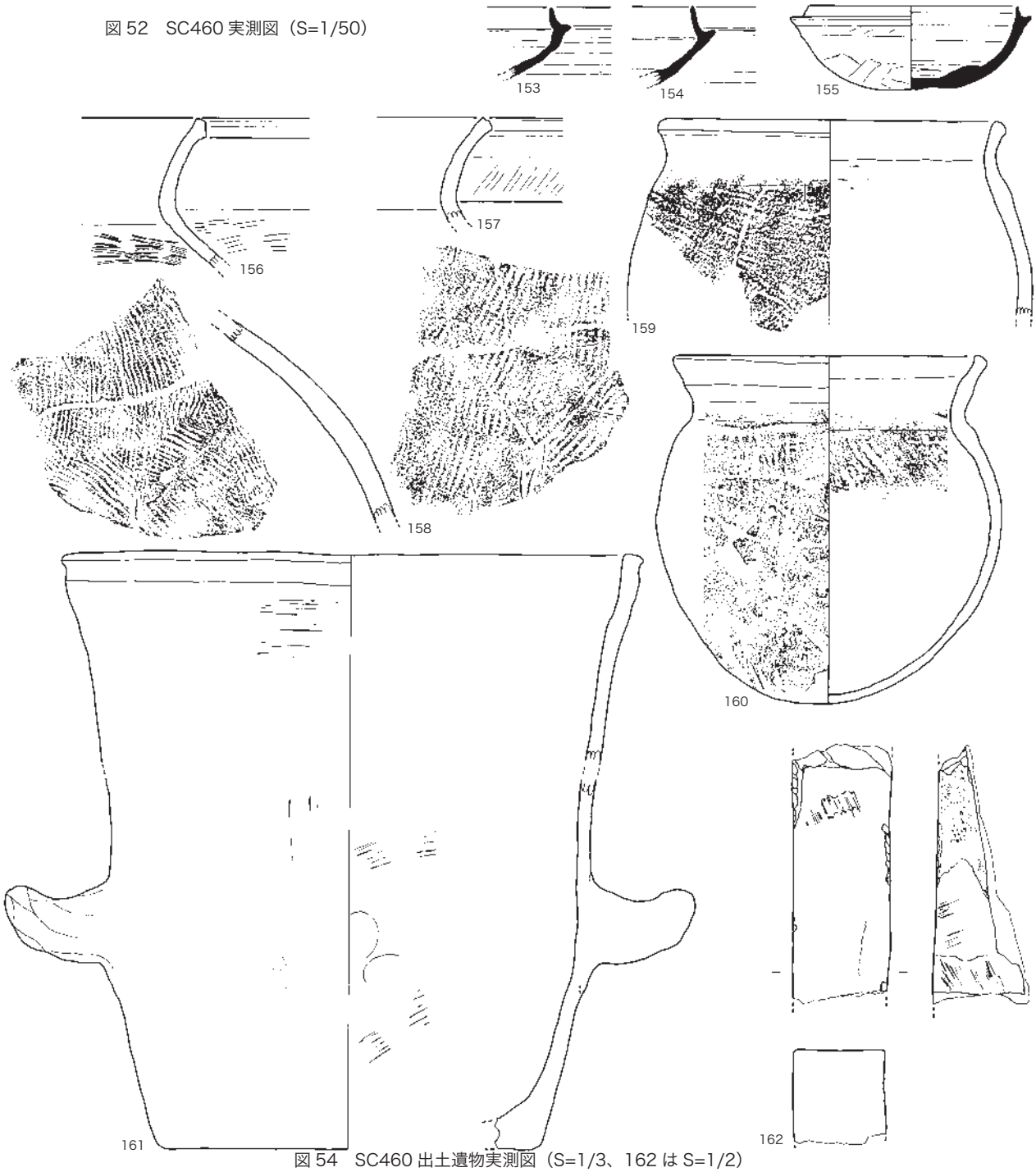



図 54　SC460 出土遺物実測図（S=1/3、162 は S=1/2）

## （２）掘立柱建物

掘立柱建物は９棟検出した。内訳は、２間２間の総柱建物が５棟、３間３間の建物が１棟、１間３間の建物が２棟、１間２間の建物が１棟である。

**SB0240（図 55、56・Ph.50）** 調査区北側で検出した２間２間の総柱建物である。SD030 との切り合いは不明瞭だったため、掘削の都合上 SD030 を先に掘下げている。東西 3.3m、南北 3.2m で、東西柱間約 1.6m、南北柱間約 1.7m を測る。柱穴掘方は概ね円形で、径 0.4 ～ 0.5m である。

図 56 の 163 は SP241、164・165 は SP388 の出土遺物で、いずれも須恵器である。163 は壺の胴部である。径１～３mm の白色砂を少量含む。焼成は良く青灰色を呈する。外面にケズリ、内面にナデを施す。164 は土師質の坏身で､径１mm の白色砂を少量含む。焼成は不良でやや磨滅する。明橙色を呈する。165 は坏身で、径１mm の白色砂を少量含む。焼成はやや不良でやや磨滅しており、淡い青灰色である。回転ナデ成形で、底部１/２にヘラケズリを施す。底部内面にタタキの痕跡がある。

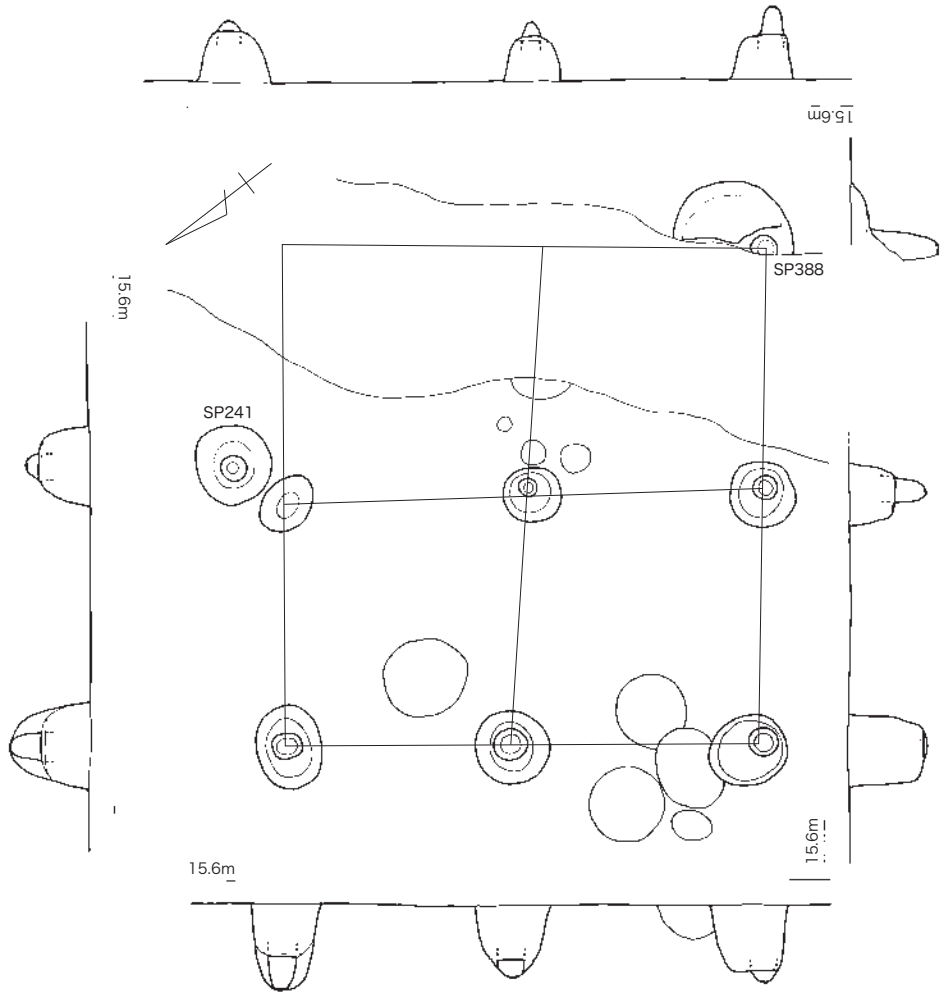



図 55　SB240 実測図（S=1/50）

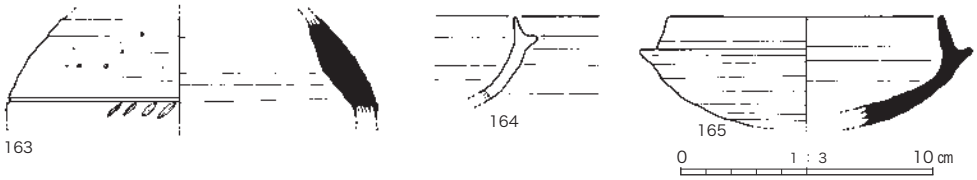



図 56　SB240 出土遺物実測図（S=1/3）

**SB270（図 57･Ph.51、52）** 調査区中央で検出した２間２間の総柱建物である。東西 2.2m、南北 2.6m で、東西柱間 0.9 ～ 1.0m、南北柱間 1.1 ～ 1.4m を測る。検出面から 0.1m 程度掘下げたところで、柱痕跡を確認した。柱痕跡は径 0.2m 前後である。柱穴掘方は楕円形で、径は概ね 0.5m である。

166 ～ 168 は須恵器の坏蓋である。166 は SP271、167 は SP277、168 は SP274 の出土である。168 は外面ヘラケズリ、内面はナデで一部に強いナデ、指オサエを施す。

**SB470（図 58、59・Ph.53）** 調査区中央南西寄りで検出した２間２間の総柱建物である。東西 3.9m、南北 4.0m で、東西柱間約 1.8m、南北柱間約 2.0m を測る。根石をもつ柱穴は SP374 以外にも複数あったが、石を図化せずに完掘してしまった。柱痕跡は不明である。

図 59 の 169 ～ 171 は須恵器で、169・171 は坏蓋、170 は坏身である。169 は回転ナデ成形で外面天井部にヘラケズリ、内面天井部に不定方向の静止ナデを施す。170 は坏身である。淡灰色で焼成不良、磨滅する。172 は土師器高坏である。胎土に径 1 mm の白色砂をごく少量含む。焼成はやや不良で淡い橙色を呈し、磨滅している。169 は SP371、170 は SP374、171 は SP447、172 は SP440 から出た。

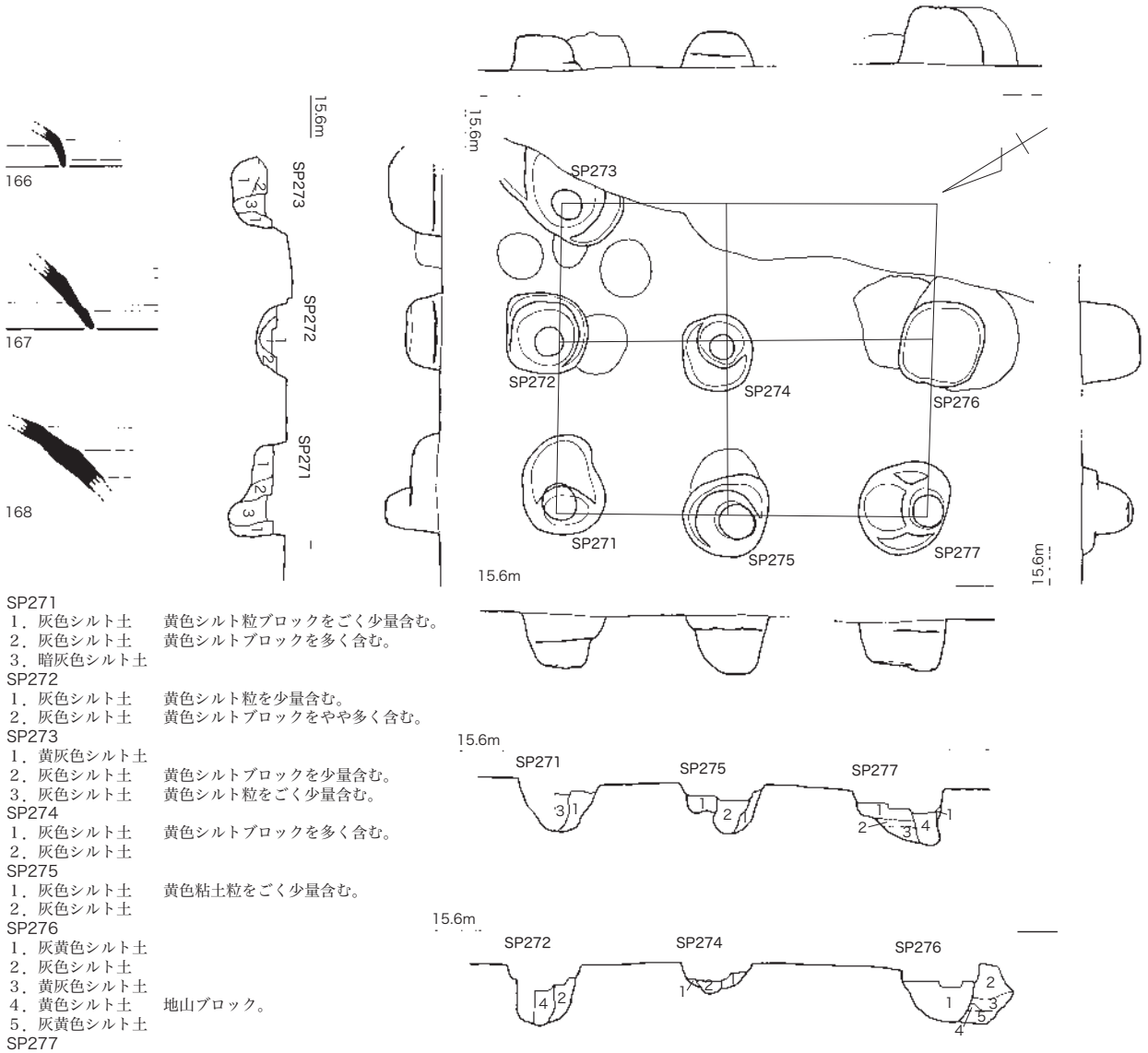



図 57　SB270 実測図（S=1/50）・出土遺物実測図（S=1/3）

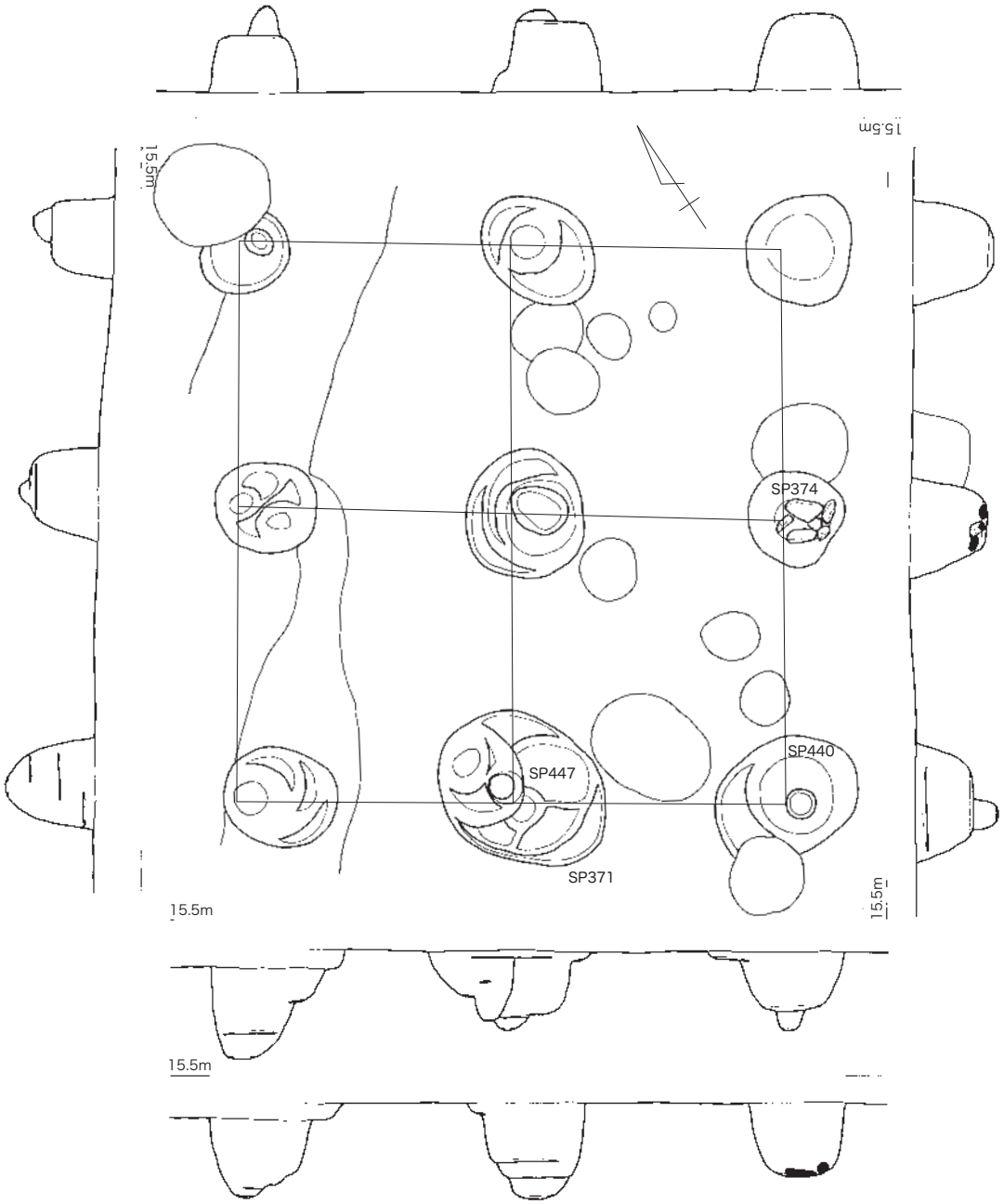



図 58　SB470 実測図（S=1/50）

図 59　SB470 出土遺物実測図（S=1/3）

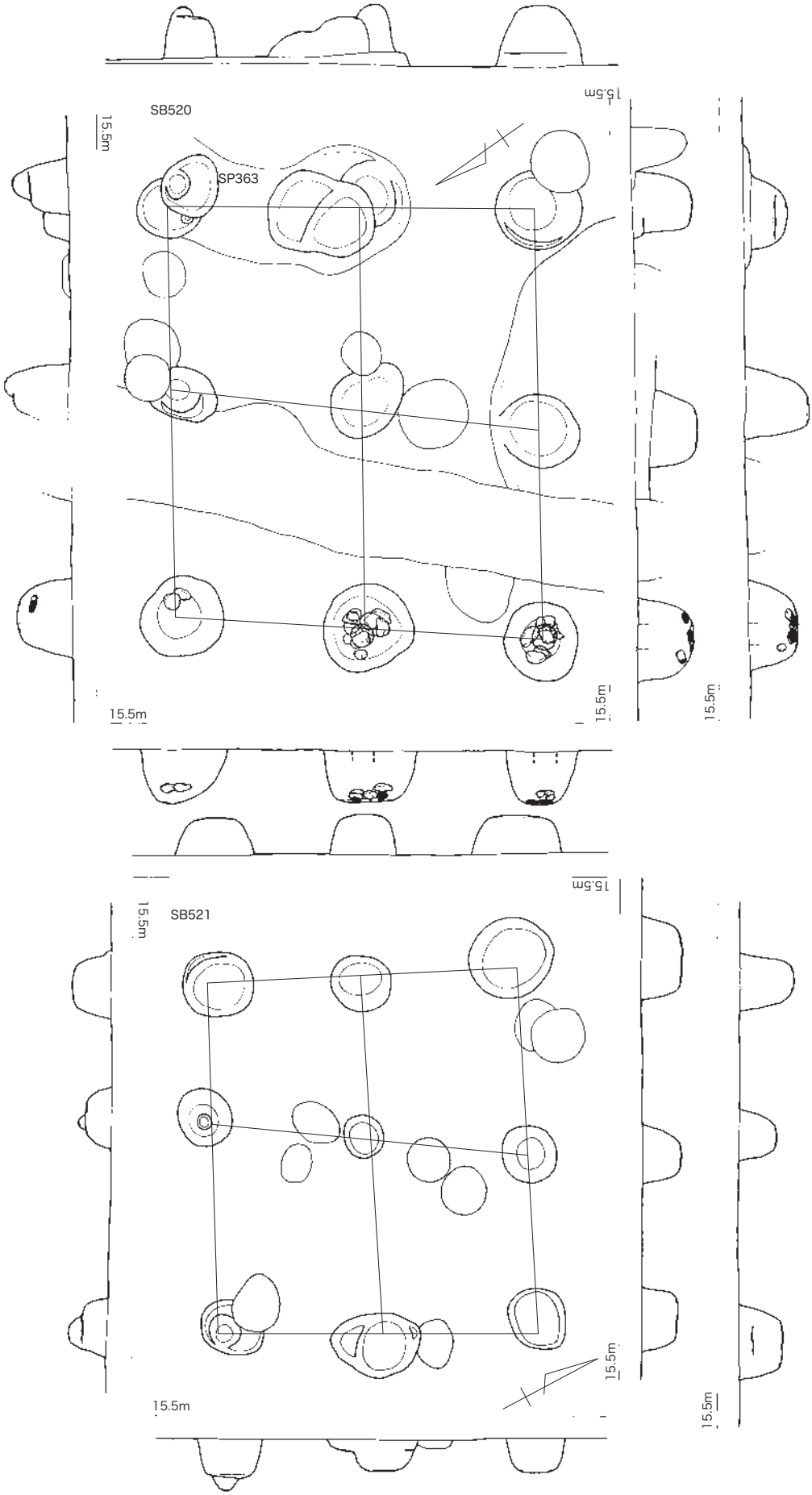



図 60　SB520・SB521 実測図（S=1/50）

**SB520（図 60、61）** 調査区中央南西寄りで検出した２間２間の総柱建物である。東西 3.2m、南北 3.5m で、東西柱間約 1.3m、南北柱間約 1.6m を測る。柱穴掘方は径 0.6 ～ 0.8m 程度の楕円ないし長楕円形で、柱痕跡は径 0.2m である。柱穴床面に根石をもつものがある。

図61 の 173 は土師器甑の把手である。径１～３mm の白色砂を少量含む。焼成はやや不良で橙色である。

**SB521（図 60）** 調査区中央北寄りで検出した２間２間の総柱建物である。東西 3.0m、南北 2.6m で、東西柱間約 1.4m、南北柱間約 1.3m を測る。柱穴掘方は円形ないし長楕円形で、径は概ね 0.4m である。柱痕跡は不明である。図面上で建物復元した。

**SB522（図 62）** 調査区北西側で検出した３間３間の建物である。梁行 4.3m、桁行 4.3m で、梁間約 1.4m、桁間約 1.3m を測る。柱穴掘方は径 0.5m の楕円形で、柱痕跡は不明である。図面上で建物復元した。

174 は SP298 出土の土師器甕である。胎土に径 1 mm の白色砂を少量含む。焼成はやや不良で磨滅する。橙色を呈する。外面タタキ、内面に当具痕がある。

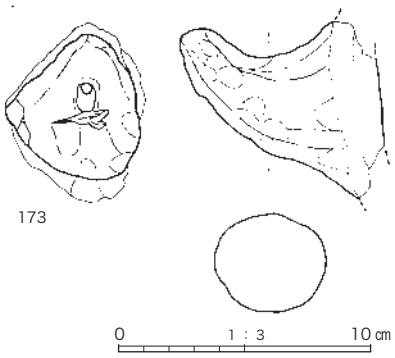



図 61　SP363 出土遺物実測図（S=1/3）

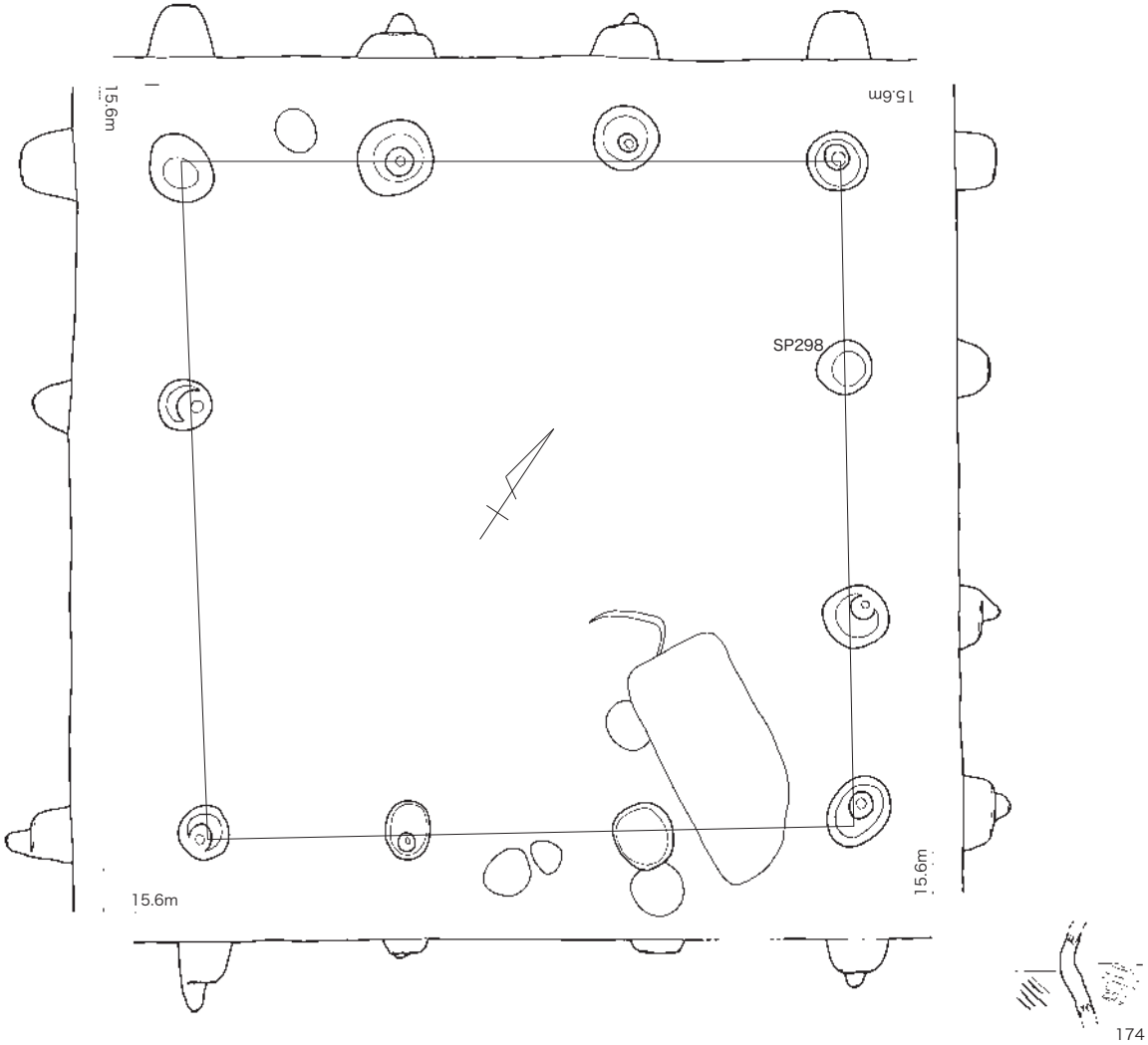



図 62　SB522 実測図（S=1/50）・出土遺物実測図（S=1/3）

**SB523（図 63、64）** 調査区中央南寄りで検出した 1 間 3 間の建物である。梁行 2.6m、桁行 4.2m で、桁間約 1.3m を測る。柱穴掘方は径 0.5 ～ 0.8m の円形で、柱痕跡は不明である。図面上で建物復元した。

図 64 の 175･176 は SP347、177 は SP365、178 は SP366、179 は SP378、180 は SP379 の出土である。175 手捏ね土器の鉢である。胎土は精良で、橙色を呈する。焼成は不良で磨滅する。176 ～ 180 は須恵器で、176・177・179 は坏身である。178 は坏蓋である。回転ナデ成形で、天井部外面にヘラケズリ、天井部内面に静止ナデを施す。外面がやや風化している。180 は蓋で立ち上がりを欠く。径 3 mm の白色砂を少量含む。焼成良好で暗青灰色を呈する。

**SB524（図 65）** 調査区南西端で検出した 1 間 3 間の建物である。梁行 2.3m、桁行 4.0m で、桁間約 1.6m を測る。柱穴掘方はばらつきがあるが、円ないし楕円形で径 0.4 ～ 0.8m 程度である。柱痕跡は不明である。図面上で建物復元した。

**SB525（図 66・Ph.54）** 調査区中央で検出した 1 間 2 間の建物である。梁行 1.8m、桁行 3.6m で、桁間約 1.5m を測る。柱掘方は楕円形で長軸長 0.8m 程度、柱痕跡は不明である。SC280、SD030 に切られる。

181 は SP314 出土の弥生土器甕である。焼成不良で橙色を呈する。胎土に径 1 ～ 3 mm の白色砂をやや多く含む。

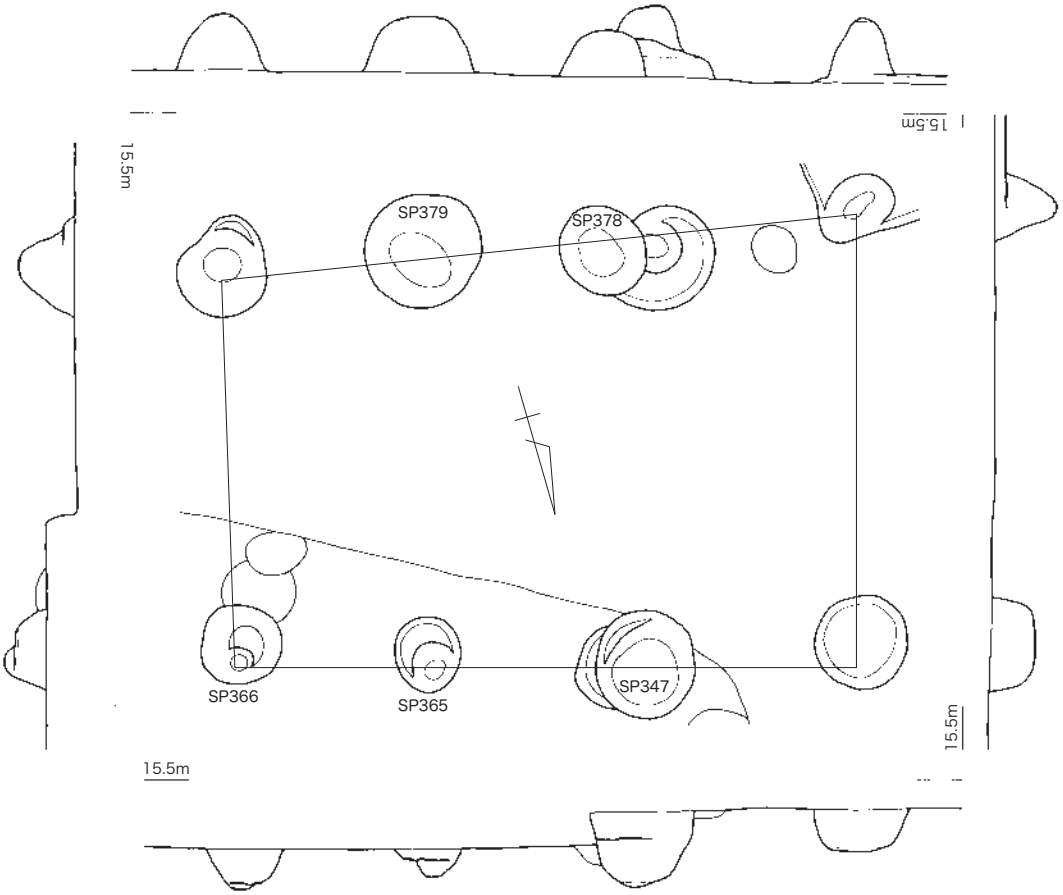



図 63　SB523 実測図（S=1/50）

図 64　SB523 出土遺物実測図（S=1/3）

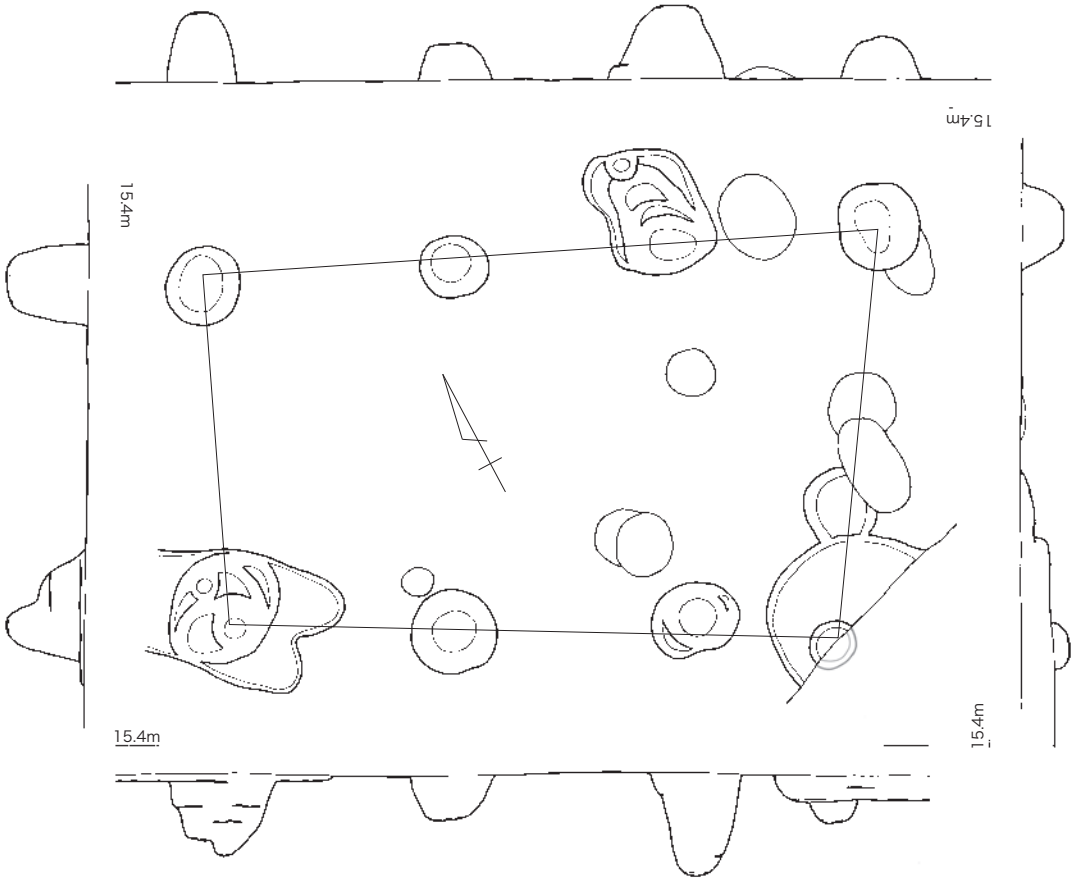



図 65　SB524 実測図（S=1/50）

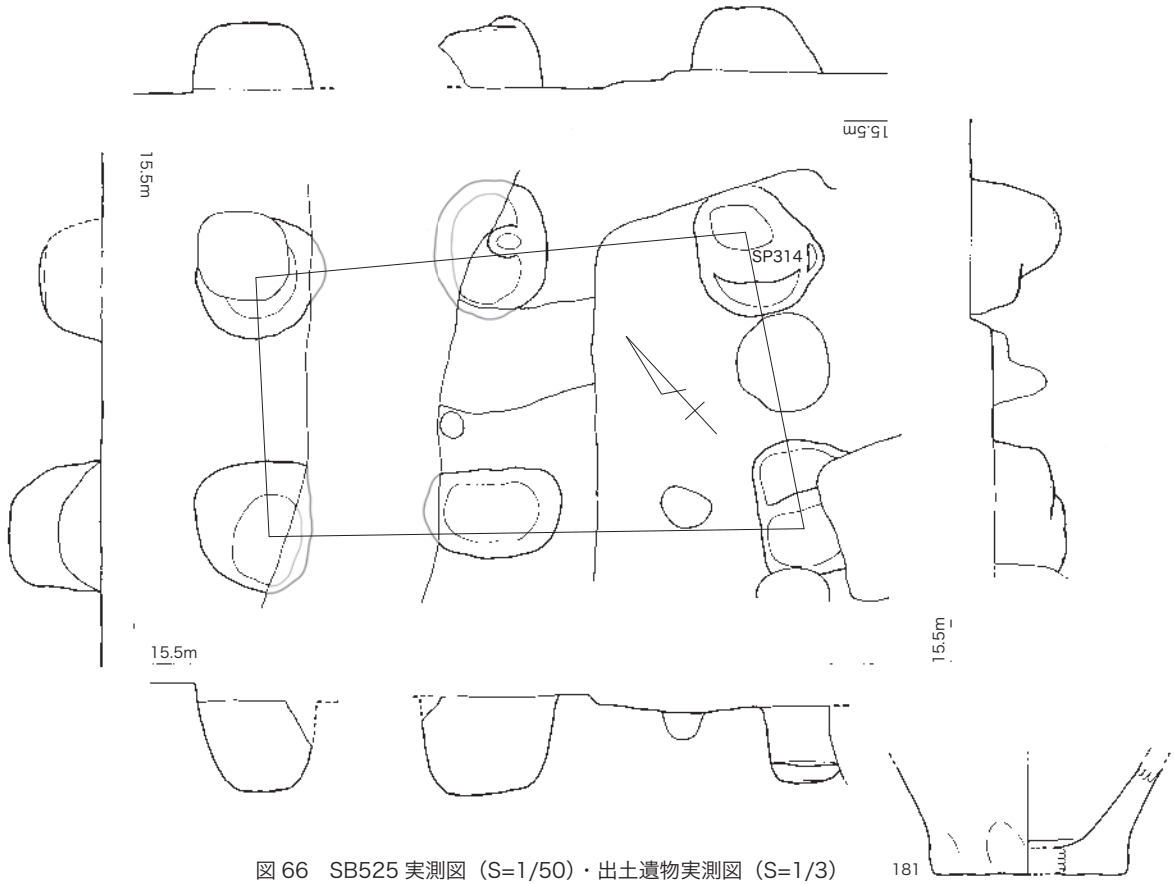



図 66　SB525 実測図（S=1/50）・出土遺物実測図（S=1/3）

（3）溝

調査区外に延びる主要な溝は6本検出した。2本は奈良時代で、北東–南西方向に並行して延びる。そのうち、溝SD150はより直線的で、本調査区付近が西海道大宰府路推定ライン上にあたることから、官道側溝の可能性がある。対になる側溝や波板状凸面は未確認である。

**SD015（図67・Ph.55、56）** 調査区を北東・南西方向に直線的に走る溝である。幅0.5～0.8m、検出面からの深さ約0.6mで、断面U字ないし逆台形をなす。埋土は黒褐色シルト土主体で、埋土の色がほかの遺構に比べて明瞭であるため、プランを捉えやすい。遺物はほとんど出ていない。古墳時代後期の竪穴建物に切られる。

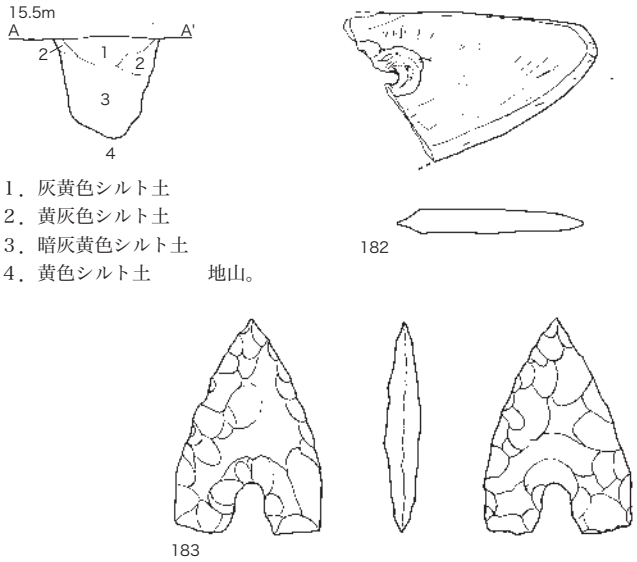
182は輝緑凝灰岩の石包丁である。表面に擦痕が残る。暗赤紫色を呈する。183は安山岩製の石鏃である。

**SD030（図68・Ph.57～59）** 調査区を北東・南西方向に走る溝で、幅0.4～1.45m、検出面からの深さ約1.2mを測る。断面U次状をなす。南西に向かうにつれて、幅が狭小になる。埋土の色・質が地山に似ており、遺構のプランを捉えにくい。掘りすぎている箇所がある。埋土に遺物をあまり含まず、下層にかけてほとんど出なくなる。須恵器が上層で出ているが、見落とした遺構に伴う遺物の可能性も排除できない。SB470に切られる。

184は石斧である。淡青灰色を呈する。表面に調整の叩打痕が残る。握った部分はすり減る。185～187は須恵器坏身である。185は焼成不良で磨滅する。淡青灰色を呈する。187は回転ナデ成形後、胴部外面に不定方向のナデを施す。188は土師質須恵器椀である。径1～2mmの白色砂を少量含む。焼成不良で橙色を呈する。磨滅する。189～192は弥生土器である。189は高坏で、外面に縦ハケを施す。外面に丹塗が残る。190・191は甕、192は高槻坏の鋤形口縁である。いずれも焼成不良で橙色を呈する。磨滅で調整は不明瞭である。193・194は縄文土器の鉢である。内面にナデを施す。外面は器面が磨滅し調整不明瞭である。焼成はやや不良で、外面橙色、内面暗茶色を呈する。下層から出土した。193は条痕文土器の鉢である。内外面に条痕が確認できる。胴部外面は淡橙色、口縁部外面と内面は暗灰色を呈する。焼成は良い。

**SD115（図69～71・Ph.60、61）** 調査区を北東・南西方向に直線的に走る溝である。幅0.5～0.8m、検出面からの深さ約0.6mで、断面U字ないし逆台形をなす。埋土の色・質が地山に似ており、検出当初は遺構を認識していなかった。撹乱の壁面土層観察で掘り込みを確認した。壁面は掘りすぎている部分が多くある。竪穴建物や掘立柱建物など、ほかの遺構を切る。SD150と並行する。図化した遺物のうち、弥生土器はSX450付近の掘削の際に出たものである。

図70の195～207は上層出土遺物である。195～204は須恵器である。195は甕で、青灰色を呈し焼成良好である。外面立ち上がり部分にカキメを施す。196は蓋である。胎土精良で焼成も良く、青灰色を呈する。回転ナデ成形で、天井部外面にヘラケズリ、天井部内面に静止ナデを施す。197～200は椀である。197は焼成良く青灰色を呈する。胎土に径1～3mmの白色砂を少量含む。回転ナデ成形後、みこみに静止ナデを施す。高台の接合部は指頭痕が残る。198は焼成良好で、赤みのある紫色を呈する。199は胎土は精良で、淡灰色を呈する。焼成不良で磨滅しており、調整は不明瞭である。200は回転ナデ成形後、みこみに軽い静止ナデを施す。高台を欠く。底部外面にヘラ記号がある。胎土に径1mmの白色砂をごく少量含む。焼成は良く、青灰色を呈する。201は短頸壺の蓋か。土師質で、焼成は良く、赤紫色である。回転ナデ成形後、天井部外面にヘラケズリ、天井部内面に静止ナデを施す。202はハソウである。焼成良好で青灰色を呈する。203は長頸壺で、外面青灰色、内面赤紫色である。胎土に径1～2mmの白色砂をごく少量含む。204は甕の底部、接合部分である。底部に当具痕が残り、外面にタタキ、内面にハケを施す。胎土は精良で、淡灰色を底する。205～207は土師器である。205は台付皿で、胎土は精良、焼成良好で明橙色を呈する。回転ナデ成形である。206・207は甑の把手である。径1～5mmの白色砂




1．灰黄色シルト土
2．黄灰色シルト土
3．暗灰黄色シルト土
4．黄色シルト土　　地山。

図 67　SD015 土層図（S=1/40）・出土遺物実測図（182 は S=1/2、183 は S=1/1）

1．暗灰黄色シルト土
2．暗黄灰色シルト土
3．灰黄色シルト土
4．灰黄色シルト土
5．黄灰色シルト土
6．黄色シルト土　　地山ブロック。
7．暗黄灰色シルト土
8．暗灰黄色シルト土　白灰色粘土粒を少量含む。
9．暗灰黄色シルト土　８層より暗い。
10．黄色シルト土　　地山ブロック。
11．暗黄色シルト土
12．暗灰色シルト土
13．灰黄色シルト土
14．黄灰色シルト土
15．暗灰黄色シルト土
16．暗灰色シルト土
17．暗黄色シルト土
18．暗い灰黄色シルト土
19．暗黄色シルト土
20．黄色シルト土　　地山。
21．黄色シルト土　　地山。20 層より濃い黄色。

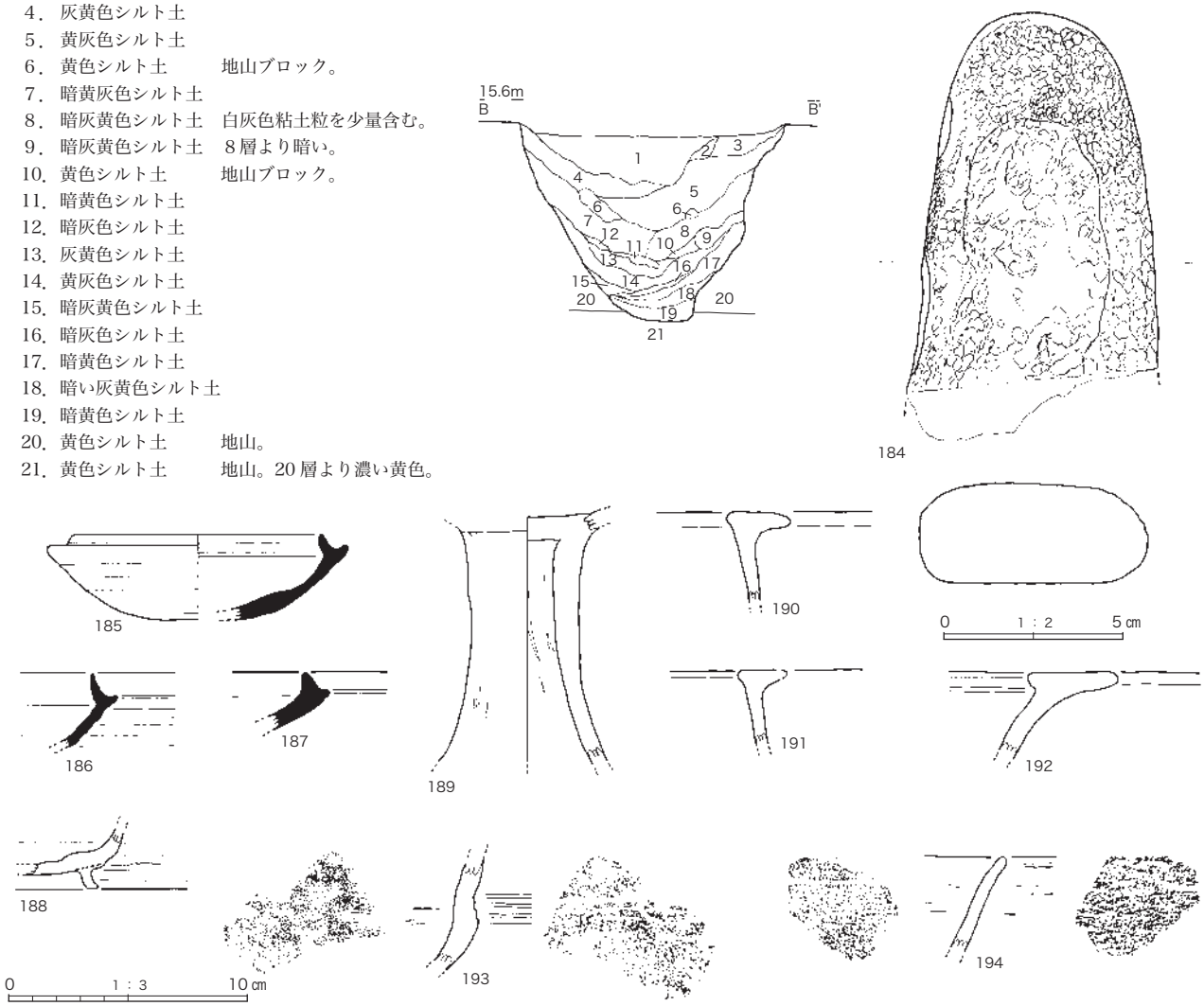
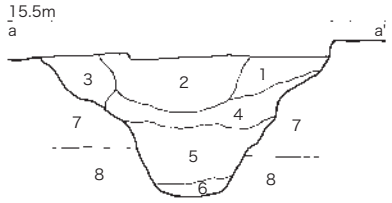



図 68　SD030 土層図（S=1/40）・出土遺物実測図（S=1/3、184 のみ S=1/2）

をやや多く含む。焼成良好で橙色である。207は胎土に径1mmの白色砂を少量含む。淡橙色で焼成は良い。

図71の208～219は下層出土遺物である。208～211は須恵器である。208は甕で、外面にカキメ、口縁部と内面にナデを施す。胎土精良で焼成も良い。青灰色を呈する。209は坏身である。焼成はやや不良で、淡青灰色である。210～212は椀である。210は回転ナデ成形後、胴部外面に工具によるナデかカキメ、みこみには放射状の静止ナデを施す。211は焼成不良で磨滅している。212は土師器椀である。回転ナデ成形で、胴部外面にヘラケズリ、みこみに静止ナデを施す。焼成はやや不良で、橙色を呈する。213～219は弥生土器甕である。213は径1～3mmの白色砂をやや多く含む。焼成不良で橙色を呈する。口縁部内面に横ハケ、胴部内面に横ナデを施す。口縁端部にコゲが付着する。214～217は器面が磨滅しており調整は不明瞭である。218は底部内面にコゲが付着する。219は明橙色を呈する。遺物は薄パンケース2箱分出土した。




1．淡黄色シルト土
2．暗黄色シルト土
3．淡黄色シルト土
4．灰黄色シルト土　濃い黄色シルト土を少量含む。
5．灰黄色シルト土　濃い黄色シルト土をやや多く含む。
6．淡黄色シルト土
7．黄色シルト土　　地山。
8．黄褐色シルト土　地山。

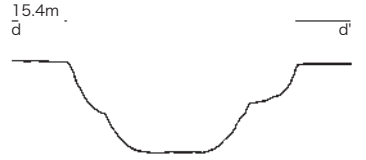



図69　SD0115実測図（S=1/250）・土層図・断面図（S=1/40）

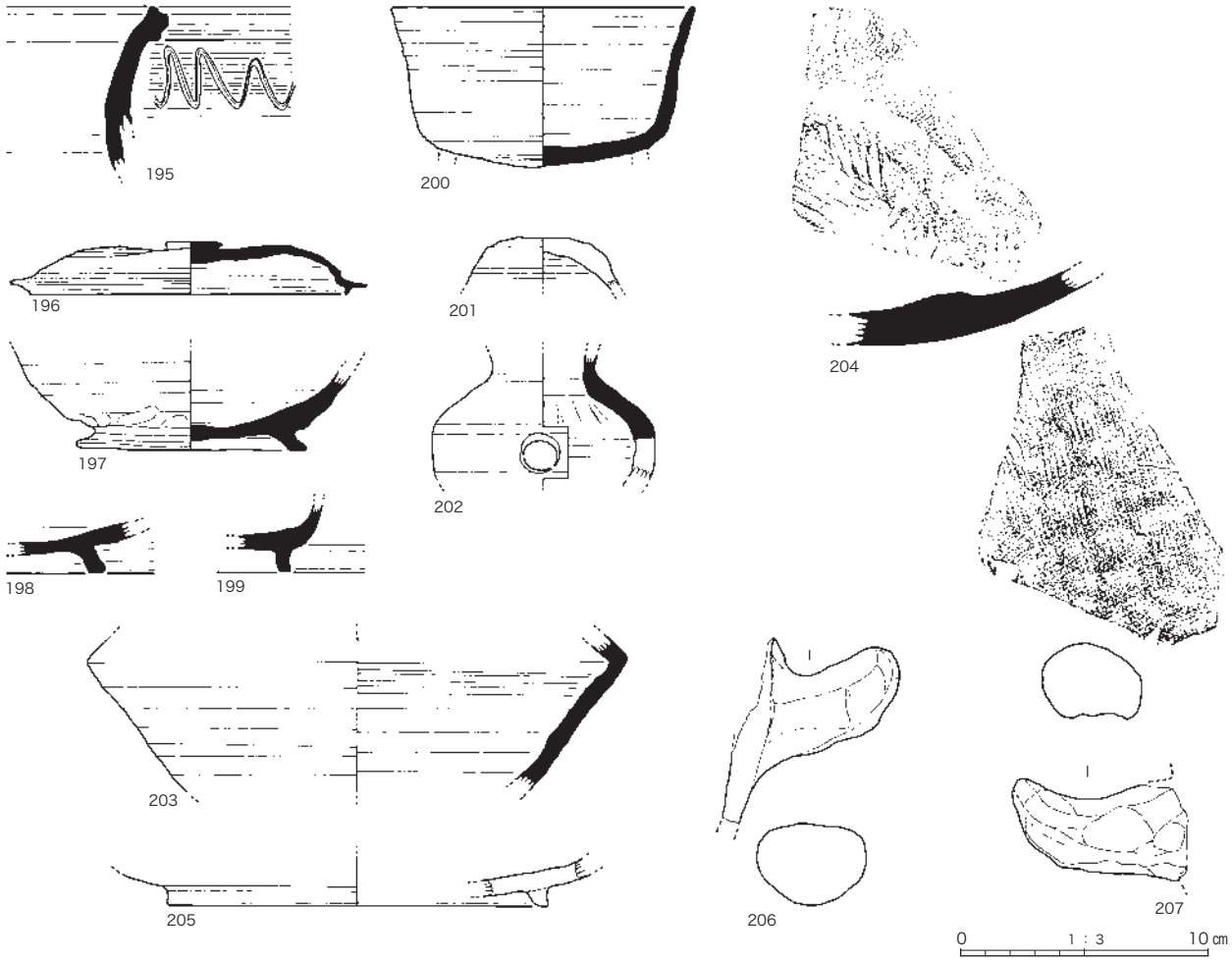



図 70　SD115 上層出土遺物実測図（S=1/3）

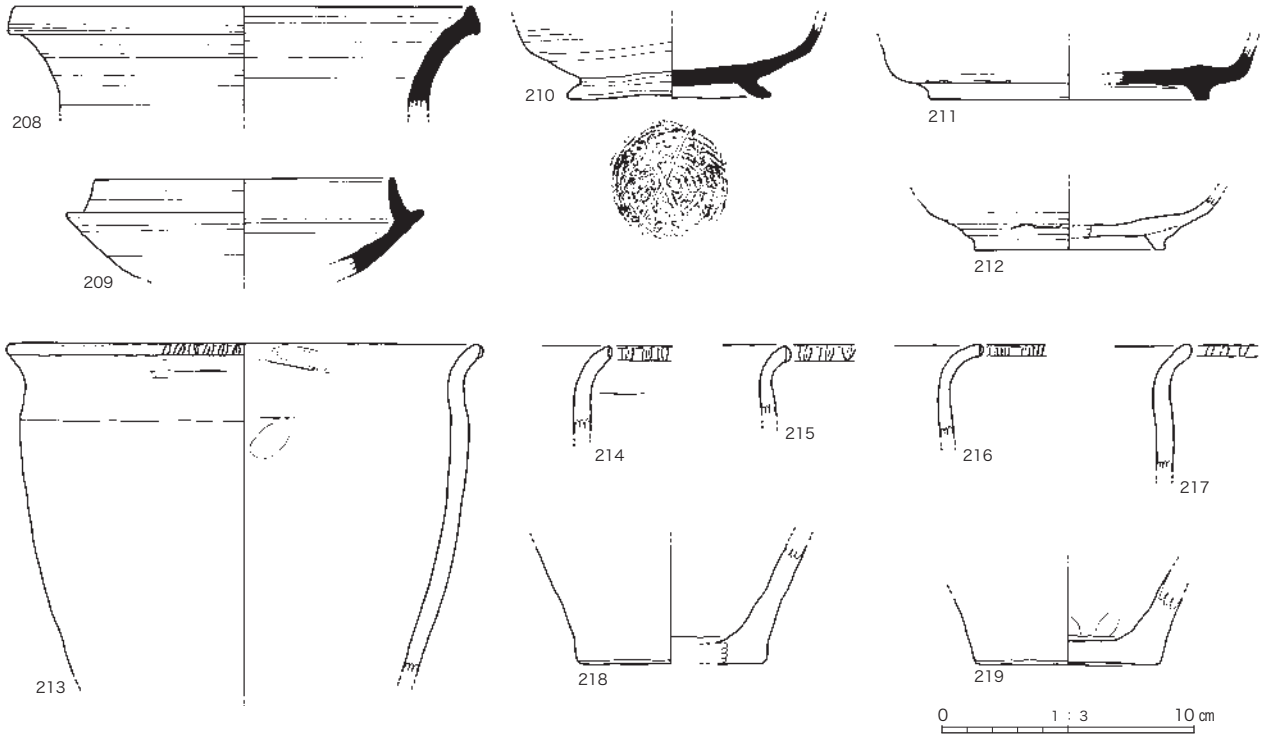



図 71　SD115 下層出土遺物実測図（S=1/3）

**SD150（図72～75・Ph.60、62～66）**　調査区を北東・南西方向に直線的に走る溝である。幅0.5～0.8m、検出面からの深さ約0.6mを測る。断面略U字形で、中位に段を有する。底面は凹凸がある。SD115と同様、検出当初は遺構を認識しておらず、撹乱の壁面土層で掘り込みを確認した。①出土遺物、②直線的である、③本調査区付近が西海道大宰府路推定ライン上にあたる、をふまえれば、官道側溝の可能性がある。ただし、対になる側溝や波板状凸面は未確認である。遺物は薄パンケース4箱分出土した。

図73の220～245は須恵器である。220・228・231は上層、225・226・229・241・243・244・246・247・248・257は中層、230・245は下層から出土した。220～225は蓋である。220は回転ナデ成形後、天井部外面にヘラケズリ、天井部内面に静止ナデを施す。221・222は天井部外面にヘラ記号がある。223は焼成良好で青灰色を呈する。天井部内面にヘラ記号がある。224は回転ナデ成形後、外面3/4にヘラケズリ、天井部内面に静止ナデを施す。225は回転ナデ成形で、外面1/3にヘラケズリを

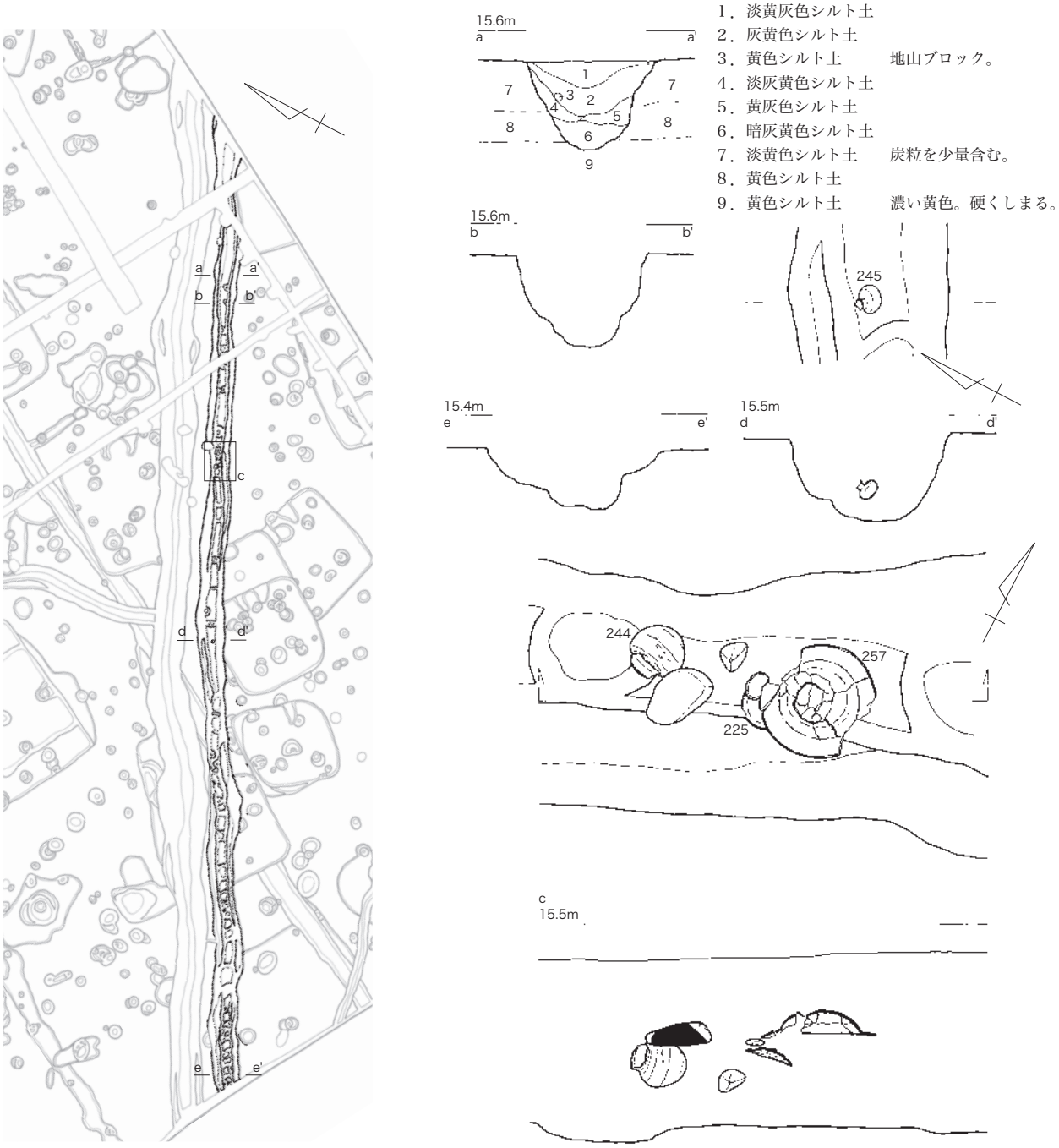



図72　SD0115実測図（S=1/250）・土層図・断面図（S=1/40）・個別出土状況図（S=1/20）

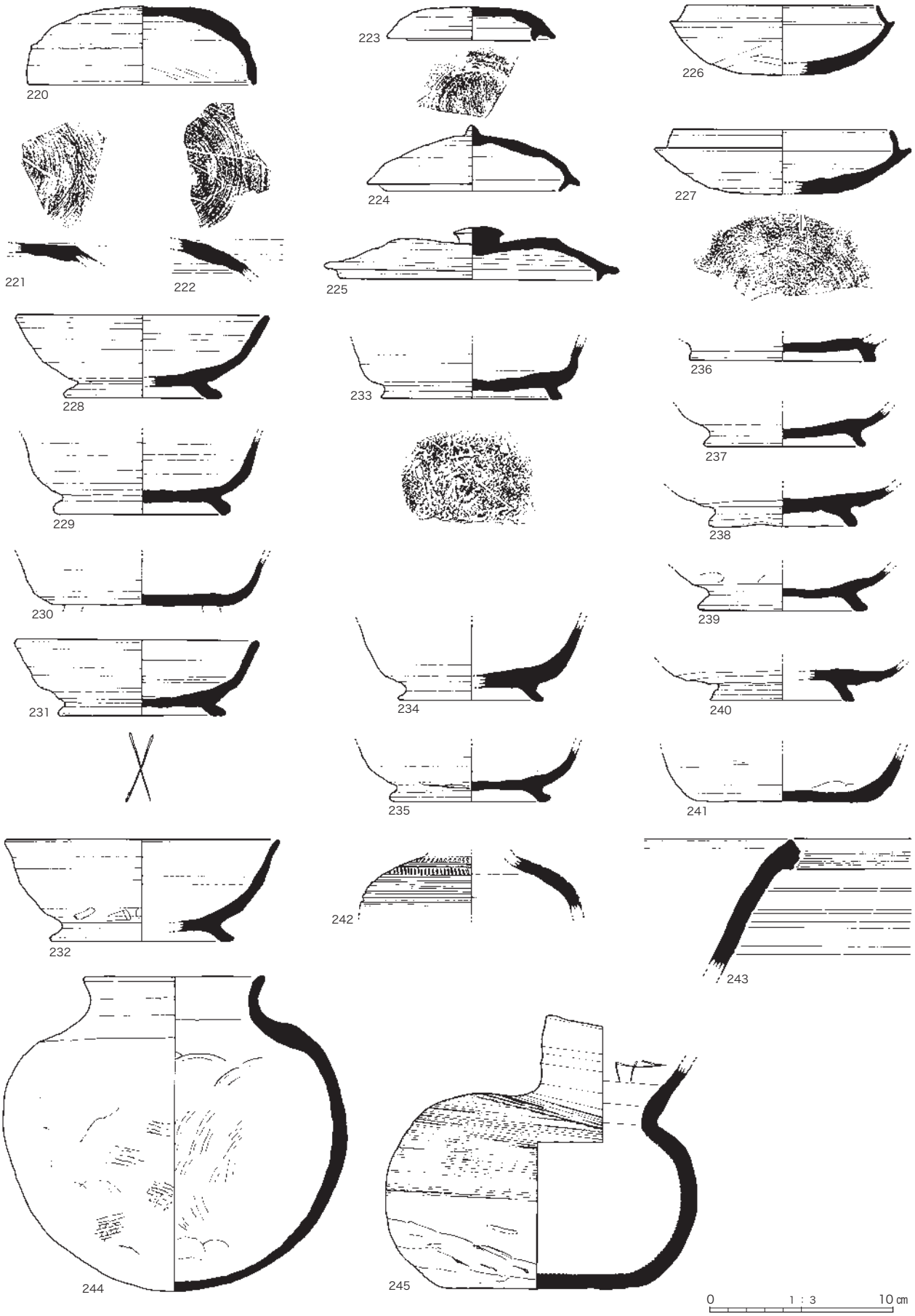



図 73　SD150 出土遺物実測図（1）（S=1/3）

図 74　SD150 出土遺物実測図（2）（S=1/3）

施す。つまみ部はナデ成形である。９割残存する。226・227 は坏身である。226 は胎土精良、焼成良好である。回転ナデ成形後、外面２/３に手持ちヘラケズリ底部内面に静止ナデを施す。227 は底部外面にヘラ記号がある。１/３から復元作図した。回転ナデ成形後、外面２/３にヘラケズリ、底部内面に静止ナデを施す。228 ～ 240 は椀である。228 は回転ナデ成形で、みこみに静止ナデを施す。229 は回転ナデ成形で、底部外面にヘラケズリを施す。１/２から復元作図した。230 は回転ナデ成形で、底部外面にヘラケズリを施す。高台を欠く。下層から出土した。231 は焼成やや不良で磨滅する。底部外面にヘラ記号がある。232 は回転ナデ成形で、高台部と椀部の接合面に工具ナデ、みこみに静止ナデを施す。233 は胎土精良、焼成良好である。234 は焼成不良で磨滅する。235 は回転ナデ成形で、みこみに静止ナデを施す。236 は径１mm の白・黒色砂を少量含む。焼成不良で淡灰色を呈する。237 は焼成やや不良、淡灰色を呈し、磨滅する。238 は淡青灰色で焼成良好である。239 は回転ナデ成形後、みこみに静止ナデを施す。240 は外面赤紫色、内面青灰色を呈する。焼成は良好である。241 は底部外面に工具による不定ナデ、胴部外面に工具ナデ、みこみに静止ナデ、胴部内面に横ナデを施す。242 は長頸壺か。胴部外面にカキメを施す。243 は甕である。焼成良く、青灰色を呈する。SK467 の甕（371）と接合する。244 は甕である。径１～３mm の白色砂を少量含む。淡青灰色で焼成は不良、磨滅する。口縁部に回転ナデを施し、外面にタタキ、内面に当具痕、底部内面に指頭圧痕が残る。245 は横瓶である。底部外面に手持ちヘラケズリ、胴部外面にカキメ、口縁部に回転ナデを施す。胴部外面の一部に灰を被る。

図 74 の 246 ～ 260 は土師器である。246 ～ 253 は甑把手である。246 は焼成やや不良で橙色である。胎土に径１～２mm の白色砂をやや多く含む。247 は橙色～暗灰色で、焼成やや不良、胴部内面に縦方向のケズリを施す。248・249 は焼成やや不良で橙色である。250 は焼成不良で橙色、磨滅する。251 は焼成良好で橙色を呈する。252 は径１mm の白色砂を少量含む。橙色を呈し、焼成は不良、やや磨滅する。253 は焼成やや不良で、淡橙色を呈する。254 は高坏である。胎土は精良で暗橙色を呈する。焼成不良で磨滅する。255 は丸底壺で、回転ナデ成形である。焼成良好で、外面濃い橙色、内面暗橙色を呈する。256 は高坏の脚部である。濃い橙色で焼成不良である。磨滅しており、調整不明瞭である。257 は鉢である。胴部外面下位に斜めハケ、胴部外面上位に縦ハケ、口縁部外面にナデ、口縁部内面に横ハケ、胴部内面にケズリ、底部内面にナデを施す。胎土に径１mm 前後の白色砂を少量含む。焼成は良く、外面淡橙色、内面橙色を呈する。外面に煤、赤色顔料と思われるものが付着する。258 は甑で、外面にタタキを施し、内面当具痕がある。焼成良く、橙色である。259・260 は甕である。259 は焼成やや不良で橙色である。260 は径１mm 前後の白色砂を少量含む。焼成良く、外面暗橙色、内面淡橙色を呈する。外面にタタキ、内面に当具、口縁部に横ナデを施す。

図 75 の 261・262 は弥生土器甕の底部である。261 は底部に指オサエ、ナデを施す。胴部は磨滅で調整不明瞭である。262 は橙色～赤褐色を呈する。磨滅する。

図 76 は SD115・SD150 の出土遺物である。263 は須恵器椀、264 は土師器甑把手、265 は白磁皿である。

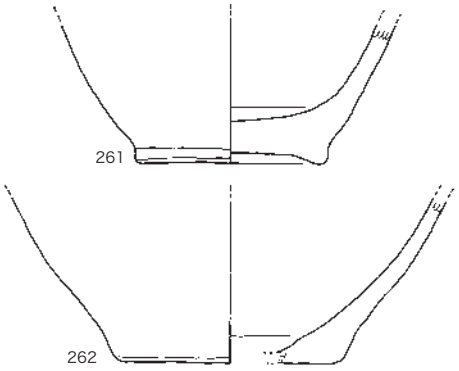



図 75　SD150 出土遺物実測図（３）（S=1/3）

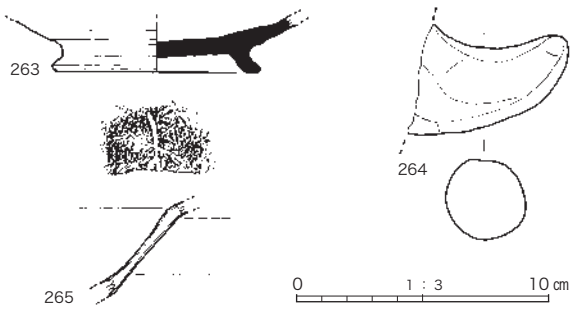



図 76　SD115・SD150 出土遺物実測図（S=1/3）

**SD160（図 77・Ph.67 ～ 69）** 調査区南で検出した東西方向に走る溝である。幅 0.5m 前後、深さ約 0.3m を測る。SC170 付近の北壁側面に杭の痕跡を確認した。杭間隔は一定ではなく間隔幅 0.8 ～ 2.0m である。266・267 は須恵器で、266 は坏身、267 は坏蓋である。268 は土師器甕、269 は移動式カマドである。

**SD195（図 78・Ph.70、71）** 調査区西で検出した北西・南東方向に走る溝である。幅 0.7m 前後、深さ約 0.5m を測る。SD115 に接続する。270・271 は須恵器で、270 は蓋、271 は椀である。

**SD507（図 79・Ph.72、73）** 調査区北西端で検出し、幅約 0.5m、長さ 2.5m、深さ 0.4m を測る。南西端に須恵器坏蓋（272）・坏身（273）、土師器鉢（274）を重ねて置く。土坑墓か。

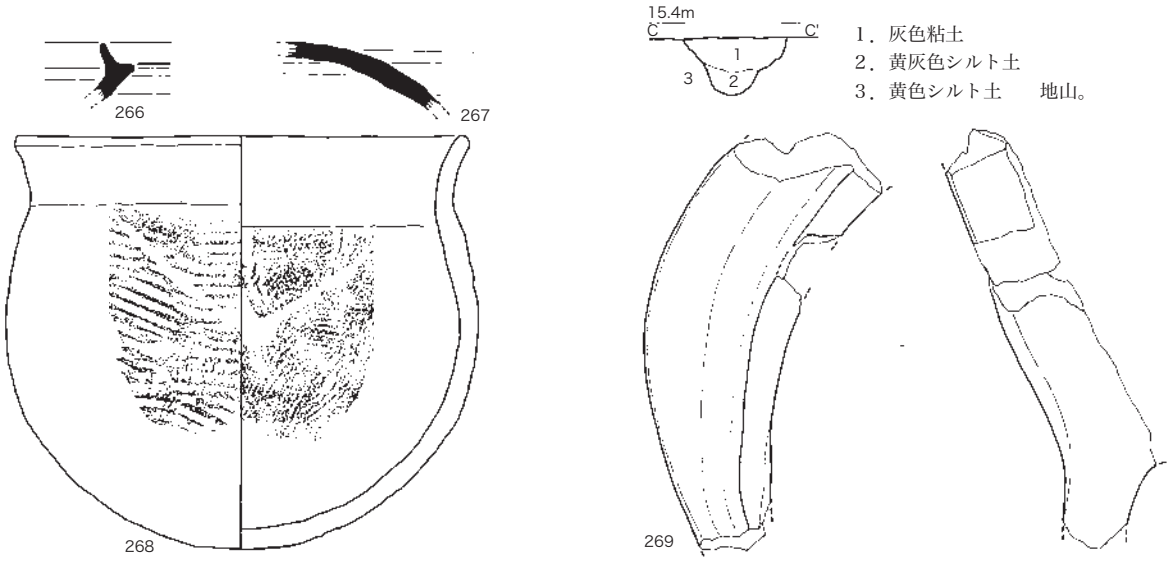



図 77　SD 土層図（S=1/40）・出土遺物実測図（S=1/3）

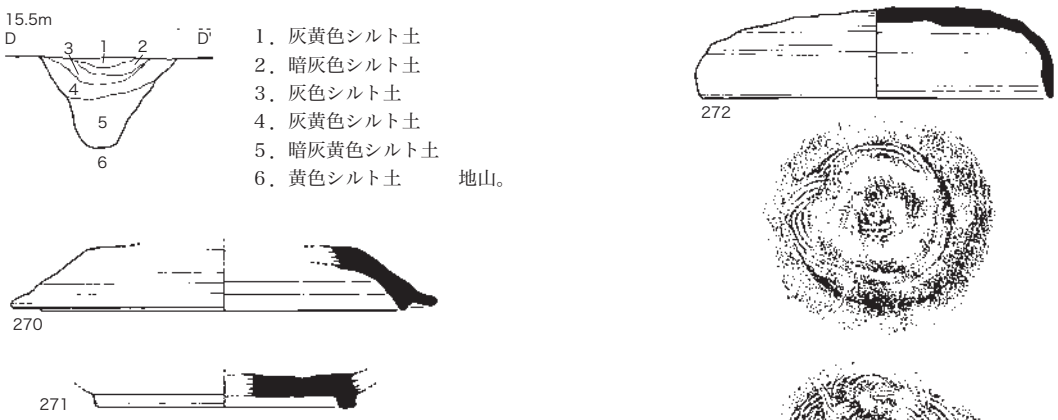



図 78　SD195 土層図（S=1/40）・出土遺物実測図（S=1/3）

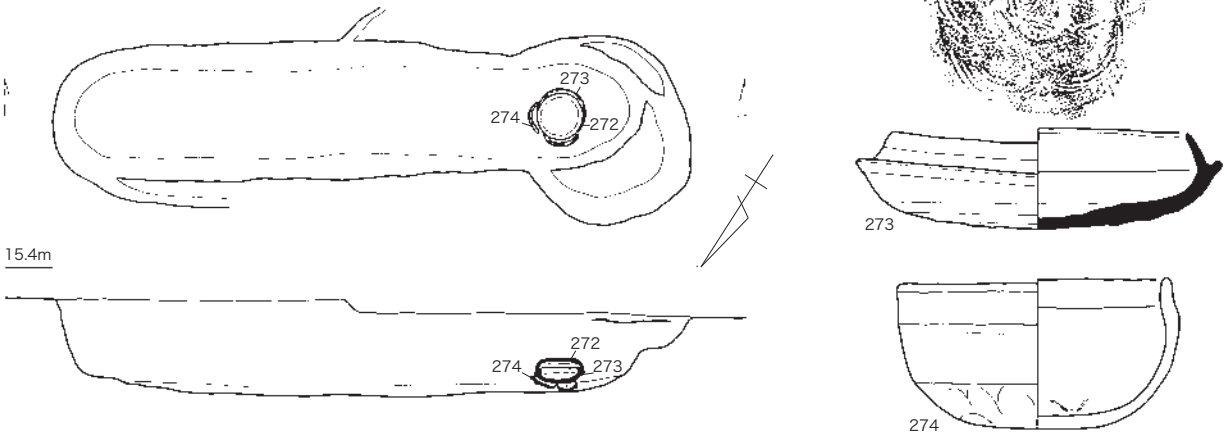



図 79　SD507 実測図（S=1/30）・出土遺物実測図（S=1/3）

（4）土坑

**SK024（図 80・Ph.74）** 調査区北側で検出し、長軸長 1.9m、短軸長 1.6m、深さ 0.2 ～ 0.3m を測る。南側のプランは不明瞭で、土器の出土範囲を任意で掘下げた。埋土は灰白～明黄褐色シルト土である。

275 ～ 277 は土師器で、275 は甕である。276 は丸底壺、277 は高坏でいずれも焼成不良、磨滅する。278・279 は須恵器で、278 は坏蓋、279 は坏身である。

**SK071（図 81）** 調査区北東で検出し、長軸長 1.3m、短軸長 0.4m、深さ 0.3m を測る。半裁時に掘りすぎている。

280 は須恵器坏身である。淡灰色を呈する。281 は土師器甕である。橙色で、径 1 ～ 3 mm の白色砂をやや多く含む。280、281 ともに焼成不良で、磨滅する。

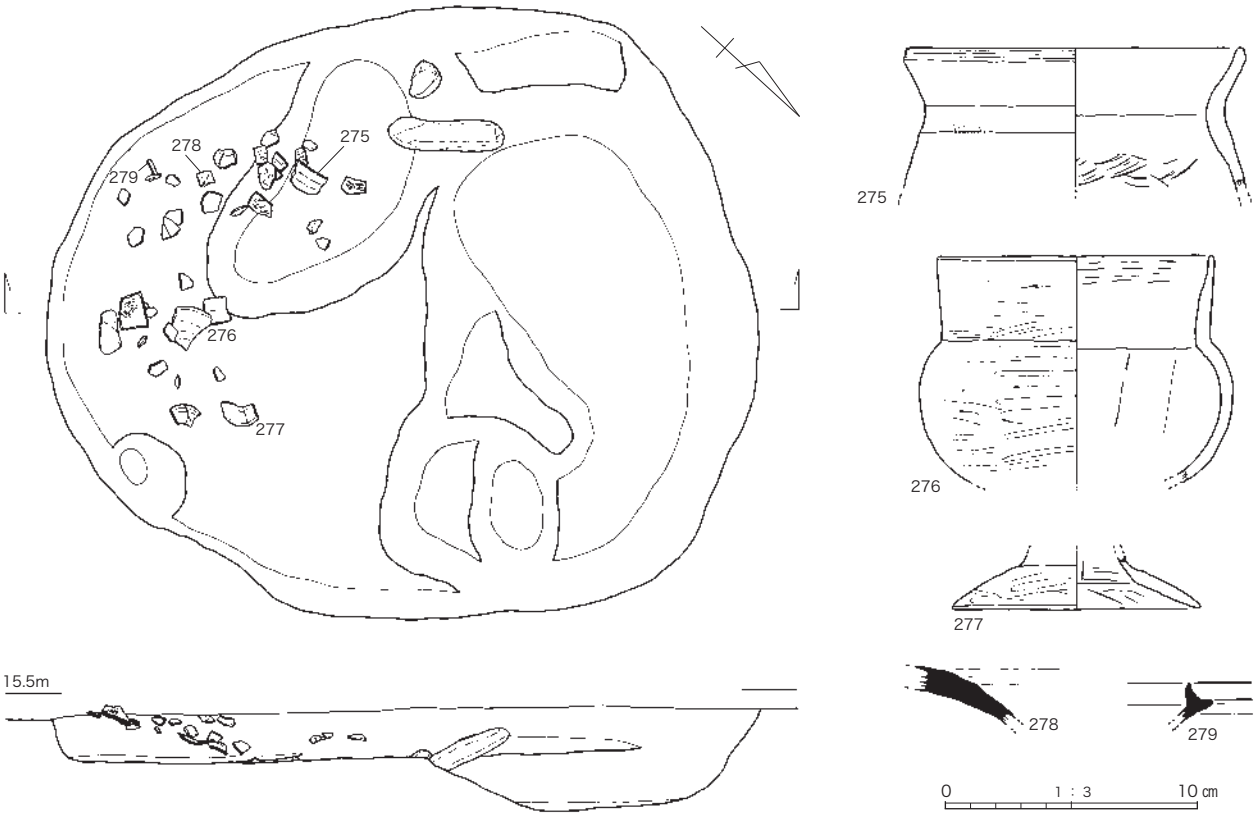
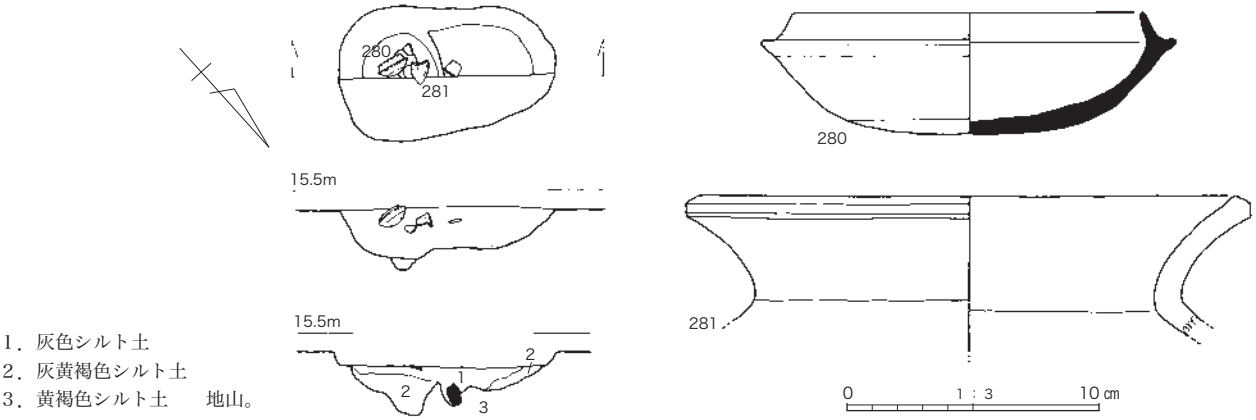


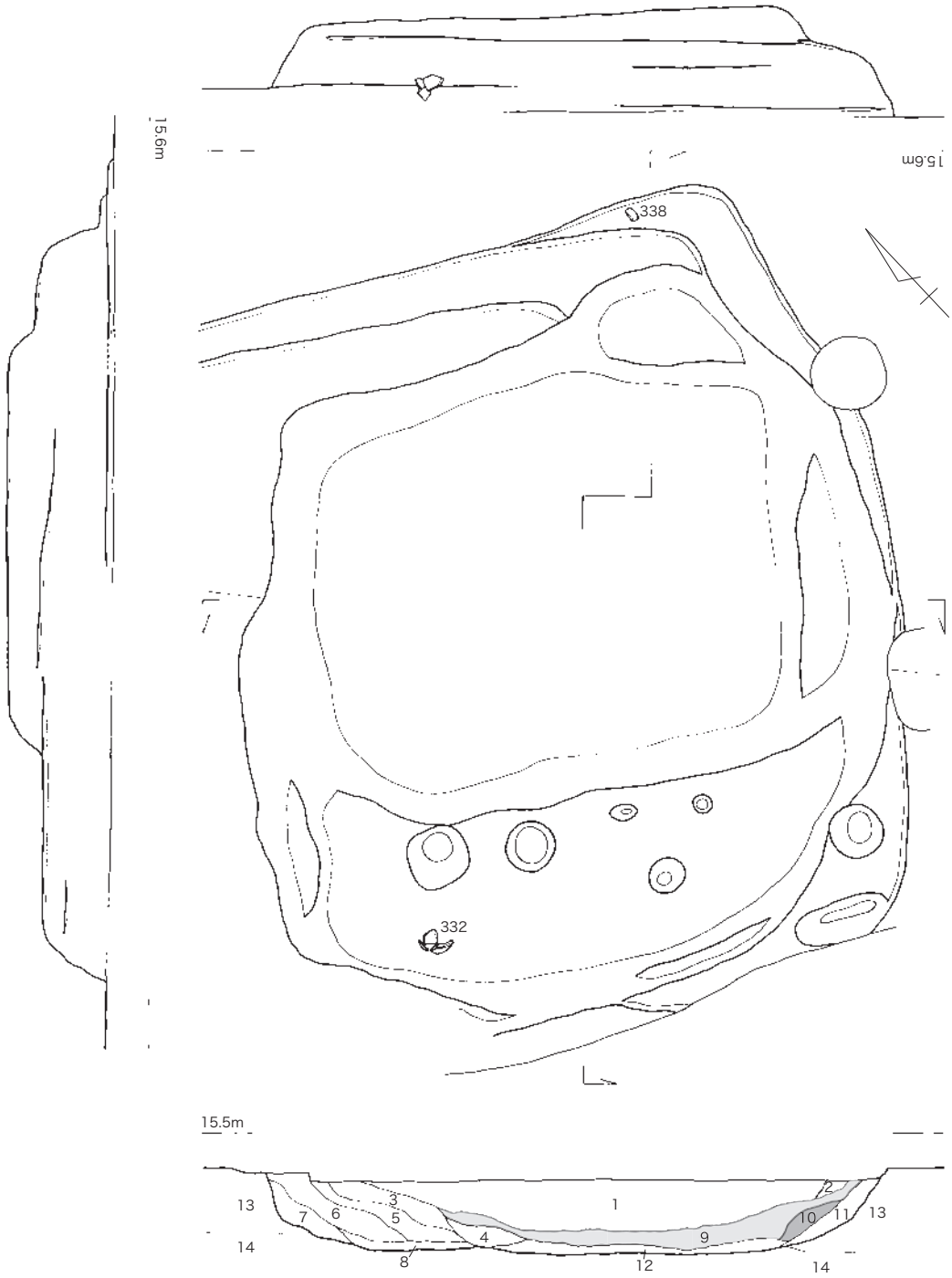

図 80　SK024 実測図（S=1/20）・出土遺物実測図（S=1/3）




1．灰色シルト土
2．灰黄褐色シルト土
3．黄褐色シルト土　　地山。

図 81　SK071 実測図（S=1/40）・出土遺物実測図（S=1/3）

**SK260（図 82・Ph.44、75）** 調査区中央で検出し、長軸長 4.3m、短軸長 3.6m、検出面からの深さ 0.6m を測る。遺構検出時は SC280 との切り合いが不明瞭だったため、同時に掘下げている。SC280 の完掘後、改めて遺構検出し、略方形のプランを捉えた。土層はレンズ状堆積で、立ち上がりは緩やかな弧を描く。下層の炭・焼土層直上の遺物量がとくに多い。遺物は中パンケース 3 箱分出土した。主柱穴やカマド・炉などの竪穴建物に伴う施設がないため、土坑と判断した。




1．茶褐色シルト土
2．灰黄色シルト土
3．灰色シルト土
4．灰色シルト土　炭粒をごく少量含む。
5．黄色シルト土　灰色粘土粒を少量含む。
6．黄灰色シルト土
7．灰色シルト土
8．灰色シルト土　炭粒・焼土粒をごく少量含む。
9．灰色粘土　炭粒を多く、焼土粒を少量含む。
10．灰色粘土　焼土粒を多く含む。
11．灰色シルト土　炭粒をごく少量含む。
12．暗黄色粘土
13．黄色シルト土　地山。
14．明黄色シルト土　地山。硬くしまる。

図 82　SK260 実測図（S=1/40）

図 83 の 282 ～ 307 は土師器である。282 ～ 289 は坏である。282 は胎土に径 1 ～ 3 mm の白色砂をごく少量含む。焼成は不良で磨滅し、調整は不明瞭である。橙色を呈する。283 は淡茶色で、焼成は良い。径 2 ～ 3 mm の白色砂を少量含む。回転ナデ成形である。284・285 はいずれも橙色で、焼成不良、胎土は精良である。286 は胎土は精良で明橙色、焼成は不良である。内面はミガキか。287 は濃橙色で胎土は精良である。焼成不良で磨滅している。288 は橙色で焼成は不良である。内面はミガキか。289 は淡茶色で、径 1 mm の白色砂をごく少量含む。焼成は良い。ナデ成形で、部分的に強いナデを施す。外面胴部に煤らしきものが付着する。290 は高坏である。胎土は精良で橙色を呈する。焼成は不良で磨滅している。内外面に回転ナデを施す。291 は鉢か。胎土に径 3 ～ 5 mm の白色砂を少量含む。焼成は良く、橙

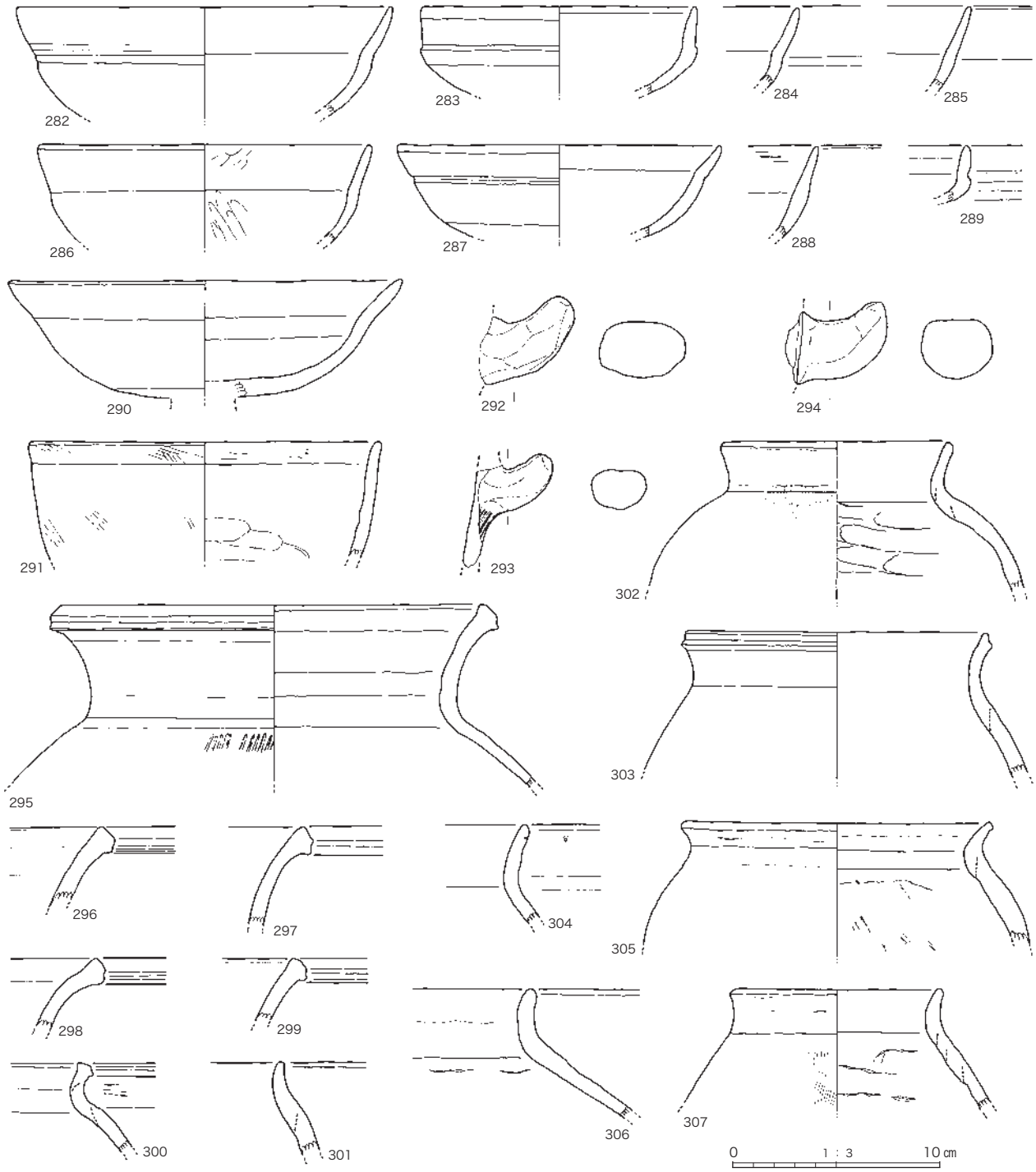



図 83　SK260 出土遺物実測図（1）（S=1/3）

色を呈する。やや磨滅している。外面に斜めハケ、口縁部内面に横ハケ、胴部内面にやや強めの横ナデを施す。292 ～ 294 は甑の把手である。292 は径 1 ～ 2 mm の白色砂をやや多く含む。焼成は良く、淡橙色を呈する。293 は胎土に径 1 ～ 5 mm の白・赤色砂を少量含む。焼成はやや不良で、淡白橙色である。294 は焼成不良で橙色を呈する。295 ～ 307 は甕である。295 は焼成不良で橙色を呈する。径 1 mm の白色砂を少量含む。肩部外面にタタキ、口縁部内外面、肩部内面にナデを施す。磨滅している。296 は焼成やや不良で、淡白橙色を呈する。297・298 は橙色で焼成不良、磨滅する。299 は焼成良好で、橙色を呈する。径 1 mm の白・赤色砂を少量含む。回転ナデ成形である。300 は径 1 mm の白色砂をごく少量含む。焼成は良く、暗橙色を呈する。口縁部に横ナデを施す。胴部内面にタタキの当具痕がある。301 は胎土に径 1 ～ 2 mm の白色砂をやや多く含む。焼成はやや不良で、外面暗橙色、内面暗灰色を呈する。302 は焼成良好で橙色である。径 1 ～ 5 mm の白色砂をやや多く含む。胴部～頸部外面に縦ハケ、口縁部内外面と胴部内面に横ナデを施す。303 は径 1 ～ 3 mm の白色砂を少量含む。外面橙色、内面暗茶色で、焼成は不良である。胴部外面は磨滅や剥離で調整不明瞭である。口縁部は横ナデを施す。胴部内面は煤が付着する。調整は不明瞭だが、ケズリか。304 は径 1 ～ 2 mm の白色砂を少量含む。焼成はやや不良で、外面橙色、内面暗茶色を呈する。口縁部は横ナデないしナデ、胴部内面はケズリを施す。胴部外面は剥離で不明瞭だが、タタキか。口縁部外面に煤が付着する。306 は径 1 mm の白色砂を少量含む。焼成不良で磨滅する。橙色を呈する。307 は径 1 ～ 5 mm の白色砂をやや多く含む。焼成良好で、暗茶色を呈する。外面に縦ハケを施す。図 84 の 308 ～ 334 は須恵器である。308 ～ 319 は坏蓋である。308 は胎土精良で、焼成不良、淡青灰色を呈する。回転ナデ成形後、天井部外面にヘラケズリ、内面に静止ナデを施す。ほぼ完形である。311 は 1/ 2 から復元作図した。天井部内面に静止ナデを施す。焼成良好で青灰色、部分的に赤紫色を呈する。314 は天井部内面に当具痕が残る。 1/ 4 から復元作図した。315 は外面に別個体が釉着し、灰を被る。歪む。320 ～ 331 は坏身である。320 は胴部外面に灰を被る。焼成は良く、青灰色～灰色を呈する。 1/ 2 から復元作図した。321 はほぼ完形である。外面に当具痕らしきものがある。322 は胎土に径 1 ～ 3 mm の黒色砂を少量含む。外面灰色、内面淡青灰色を呈する。磨滅している。325 は回転ナデ成形後、胴部 2/ 3 にヘラケズリ、底部内面に静止ナデを施す。323 は焼成不良で磨滅し、調整は不明瞭である。外面白黄色、内面黒灰色を呈する。332 は提瓶である。胎土は白色で、径 1 mm の白色砂をごく少量含む。焼成は良く、胴部上半の外面に自然釉がかかる。釉色は深みのある緑色で、外面やや黄色みのある灰色、内面灰白色を呈する。胴部外面に別個体が釉着する。外面にカキメ、内面に横ナデ、指オサエを施す。また、内面には当具痕跡がある。333 は高坏の脚部である。外面にカキメを施す。胎土は精良で、焼成良好、青灰色を呈する。334 は蓋である。335 は弥生土器甕である。胎土に径 1 mm の白色砂を少量含む。焼成不良で、磨滅する。突帯部分に丹塗の痕跡がある。橙色を呈する。336 は縄文土器で、条痕文土器の鉢である。焼成良好で、外面茶色、内面淡白橙色を呈する。337 は鉄製鎌である。端部を折り曲げる。刃部幅 2.5㎝、厚さ 0.2㎝を測る。338 は層灰岩の扁平片刃石斧で、表面は風化する。

図 85 は SK260・SC280 検出時の出土遺物である。339 ～ 346 は土師器で、339 ～ 345 は甕である。339 は焼成やや不良で、橙色を呈する。341 は胎土に径 1 mm の白色砂をごく少量含む。灰橙色で焼成は良い。つくりが精緻な印象を受ける。343 は焼成やや不良で、外面橙色、内面暗灰橙色を呈する。口縁部に煤がつく。344 は口縁部に煤が付着する。焼成は良く、暗橙色である。345 は口縁部にナデ、特に内面に強いナデ、胴部内面にケズリを施す。口縁部を中心に煤がつく。焼成は良く、外面橙色、内面暗茶色を呈する。346 は高坏である。347 ～ 356 は須恵器で、347 ～ 351 は坏身である。349 は土師質の須恵器である。焼成は良く、橙色で一部アズキ色を呈する。351 は焼成良好で、外面青灰色、内面アズキ色である。 1/ 4 から復元作図した。352 は蓋である。353 は回転ナデ成形後、天井部に手持ちヘラケズリを施す。また、ヘラ記号がある。 1/ 3 から復元作図した。356 は土師質須恵器で、焼成良好、橙色を呈する。

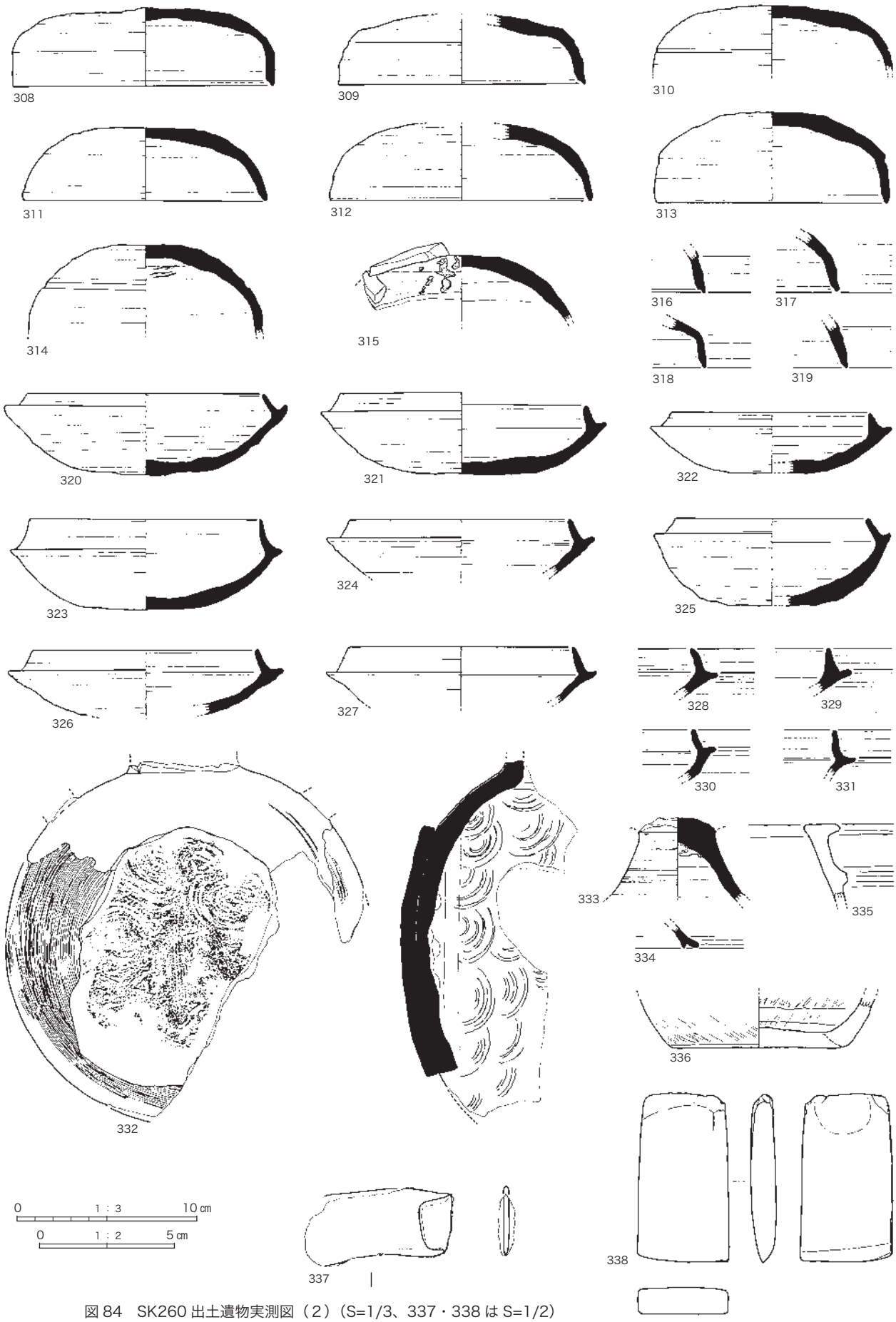



図 84　SK260 出土遺物実測図（2）（S=1/3、337・338 は S=1/2）

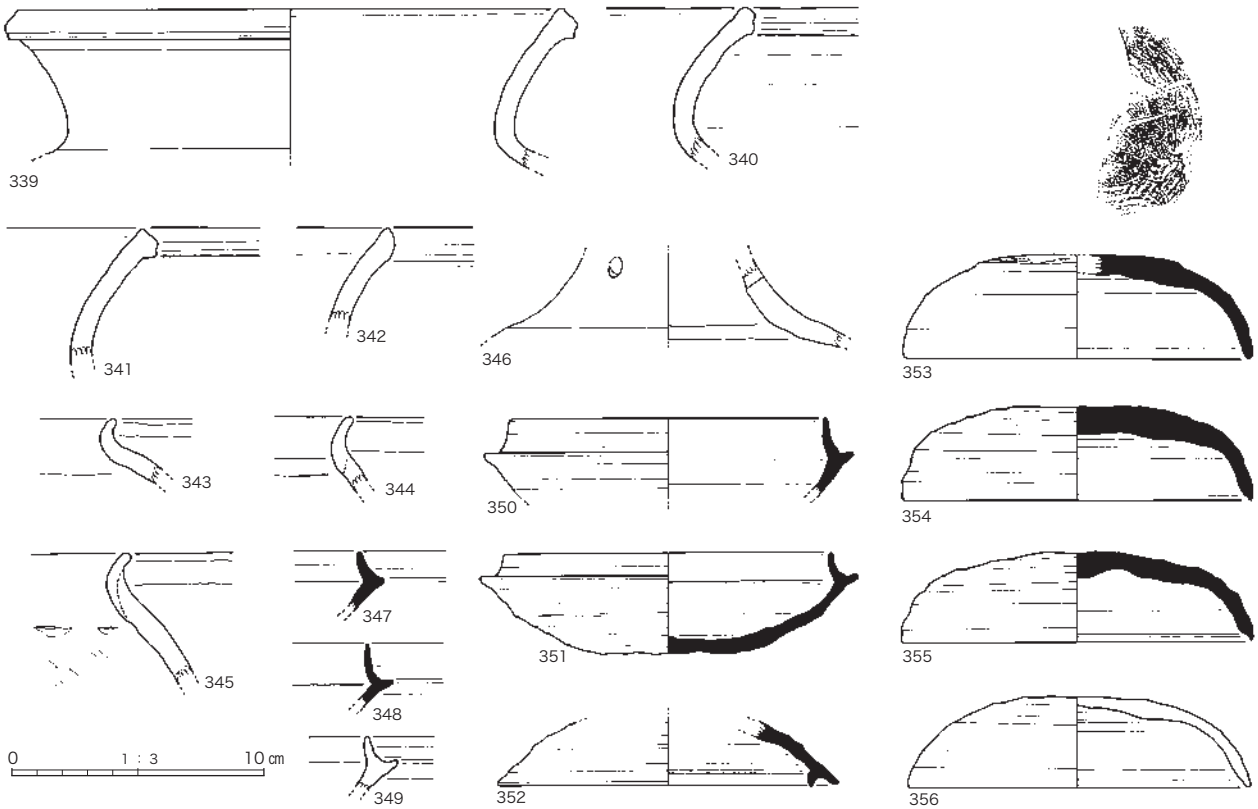



図 85　SK260・SC280 検出時出土遺物実測図（S=1/3）

**SK443（図 86･Ph.76）**　調査区南側で検出した楕円形の土坑である。長軸長 1.5m、深さ 0.45m を測る。SD150 と SC220 に切られる。

357 ～ 361 は須恵器である。357・358 は坏蓋で、いずれも完形、焼成良好で青灰色を呈する。357 は天井部内面に静止ナデを施す。360･361 は甕で､胎土は緻密で精良である。焼成良好で青灰色を呈する。360 は外面タタキ後､カキメを施す｡362 は土師器甕である｡胎土に径 1 ～ 3 mm の白色砂をやや多く含む。橙色～暗灰色を呈し、焼成はやや不良である。外面にタタキを施す。内面はナデか。

**SK456（図 87・Ph.77）**　調査区西端で検出し、長軸長 1.25m、短軸長 0.76m、深さ 0.48m を測る。土坑中央の中下層から須恵器、土師器がまとまって出土した。

363 ～ 365 は須恵器坏身で、いずれもほぼ完形である。363 は焼成良好で、青灰色を呈する。胎土に径 1 ～ 5 mm の白色砂を少量含む。回転ナデ成形後、外面 1 / 2 にヘラケズリ、底部内面に静止ナデを施す。364 は回転ナデ後、外面 1 / 2 にヘラケズリを施す。青灰色で焼成は良い。365 は土師質で、焼成良く赤紫色である。回転ナデ成形後、外面 2 / 3 にヘラケズリ、底部内面に不定ナデを施す。366 ～ 370 は土師器である。366 は鉢である。橙色を呈し、焼成不良で磨滅する。外面に指オサエ・ナデを施す。8 割残存する。367 は甕の底部で、焼成はやや不良、濃い橙色～赤褐色を呈する。368 ～ 370 は高坏である。いずれも焼成不良で磨滅する。369 は脚部外面に縦方向のナデ、坏部外面と口縁部内面に回転ナデ、坏部内面に工具ナデを施す。

**SK467（図 88･Ph.78）**　調査区中央南西寄りで検出し、長軸長 1.6m、短軸長 1.3m、深さ 0.8m を測る。底部付近から須恵器甕の口縁部が 1 個体分出た。記録後に改めて精査したところ、掘り方プランを捉えたため掘削した。柱穴の可能性もあるが、周辺に伴う柱穴が見つからない。底部付近は徐々に湧水する。

371 は須恵器甕である。復元口径は 50㎝を測り、焼成は良く暗青灰色を呈する。胎土に径 1 mm の白色砂をごく少量含む。回転ナデ成形で、口縁部内面上半部に指オサエ痕がある。SD150 中層出土の須恵器甕（243）と接合する。

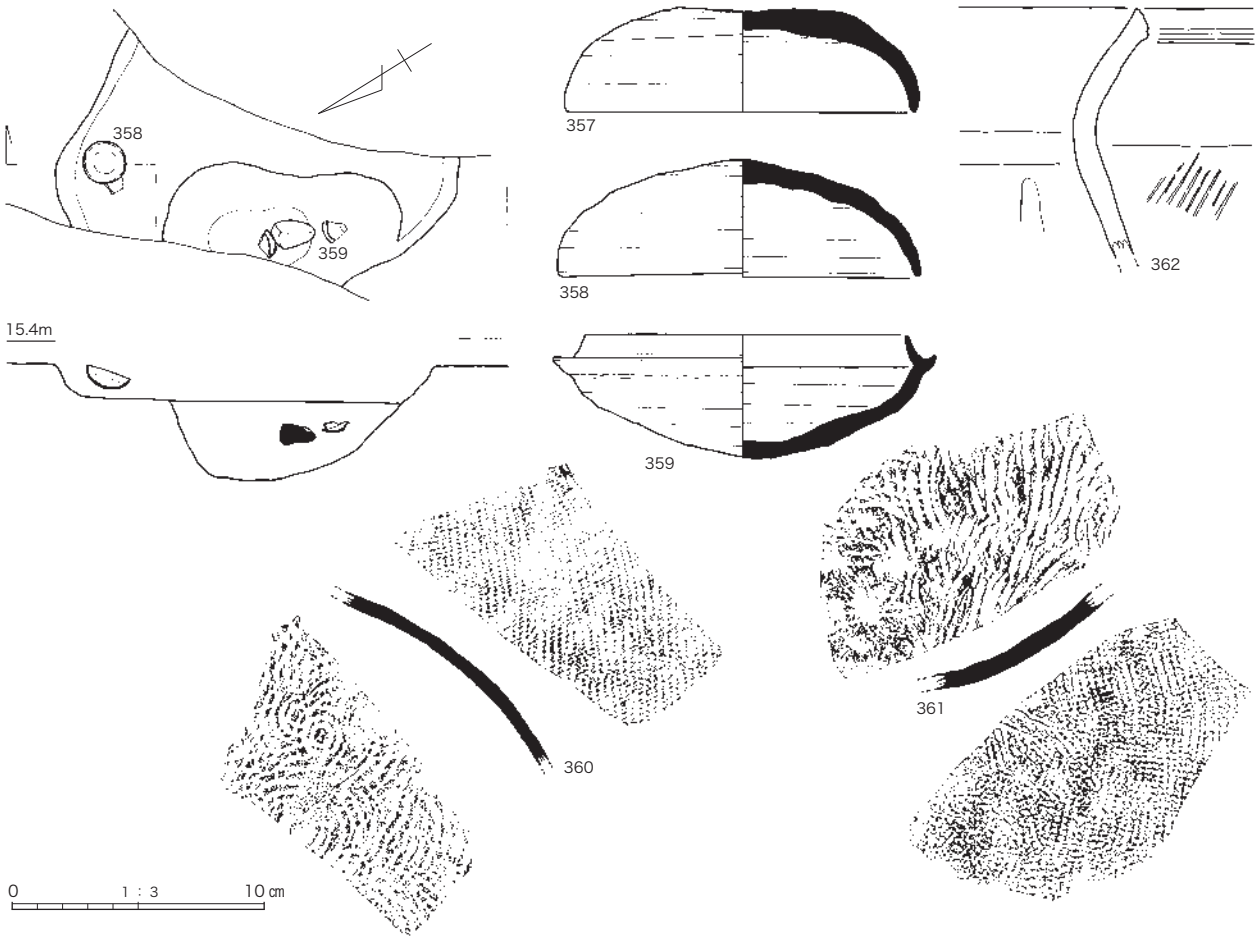



図 86　SK443 実測図（S=1/30）・出土遺物実測図（S=1/3）

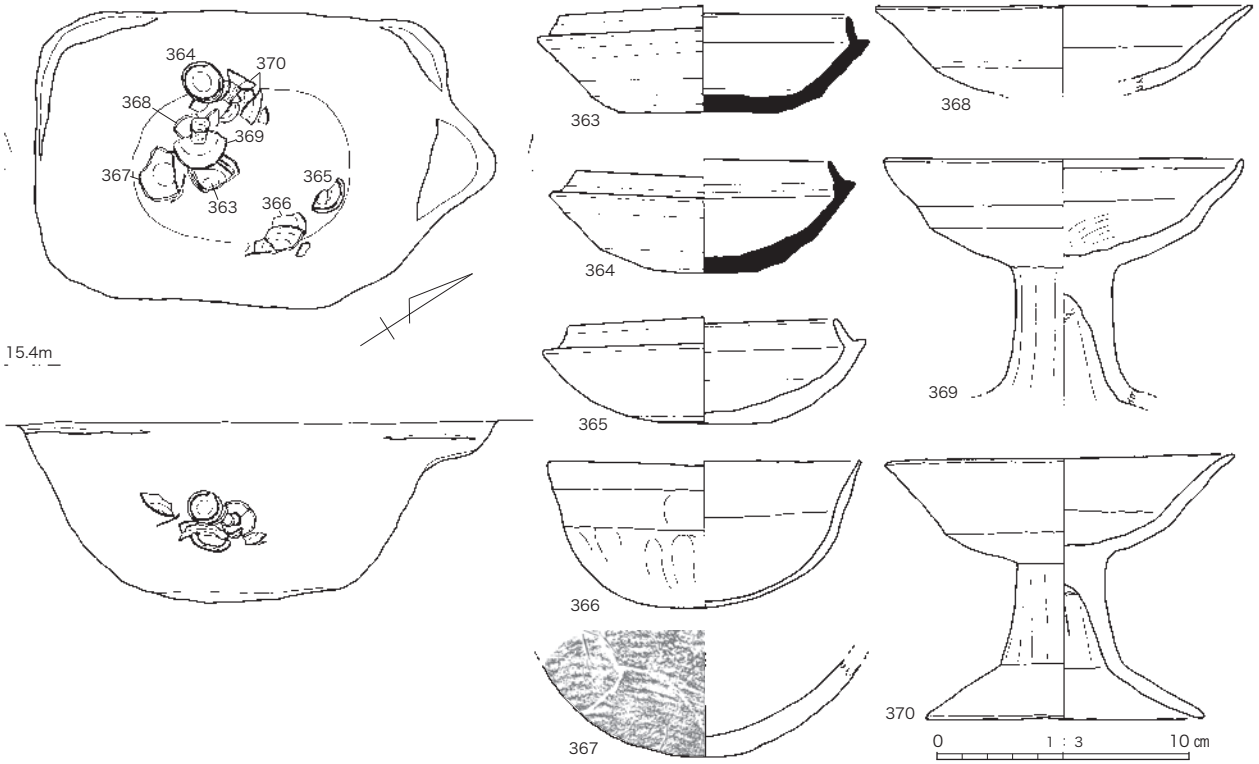



図 87　SK456 実測図（S=1/20）・出土遺物実測図（S=1/3）

（5）柱穴

**SP122（図 89）** 調査区中央西寄り、SC090 の南で検出した。プランは長楕円形である。長軸長 0.5m、短軸長 0.2m、深さ 0.2m を測る。

372 ～ 375 は弥生土器である。372 は甕の底部で、暗橙色を呈する。焼成は不良で磨滅する。373・374 は小壺である。胎土に径 1 ～ 2 mm の白色砂をやや多く含む。橙色で焼成は良い。磨滅しており、調整不明瞭である。

**SP386（図 89）** 調査区中央北寄り、SB240 近くで検出した。プランは楕円形である。長軸長 0.55m、短軸長 0.45m、深さ 0.15m を測る。

375・376 は弥生土器甕の底部である。375 は焼成良く橙色である。外面に縦ハケを施す。376 は胎土に径 1 ～ 3 mm の白色砂をやや多く含む。焼成はやや不良で、暗茶色を呈する。底部に穿孔がある。

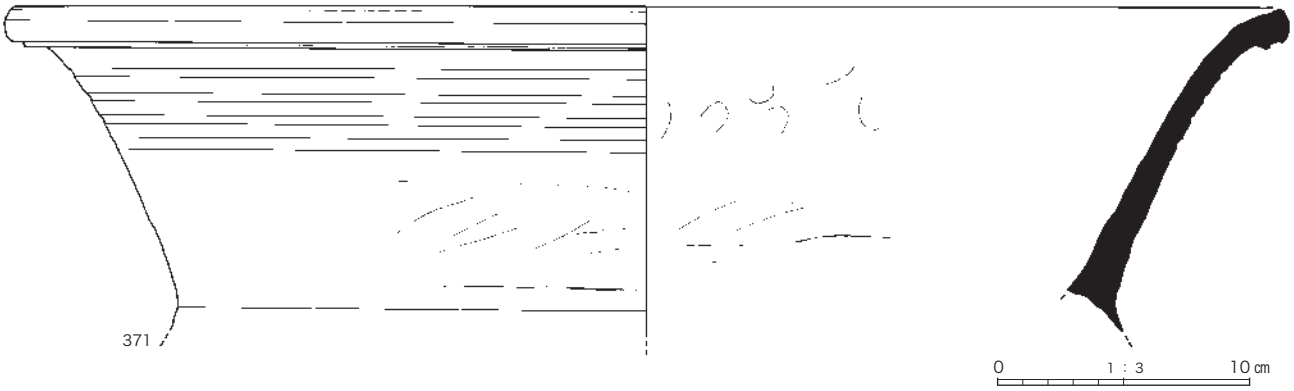



図 88　SK467 実測図（S=1/30）・出土遺物実測図（S=1/3）

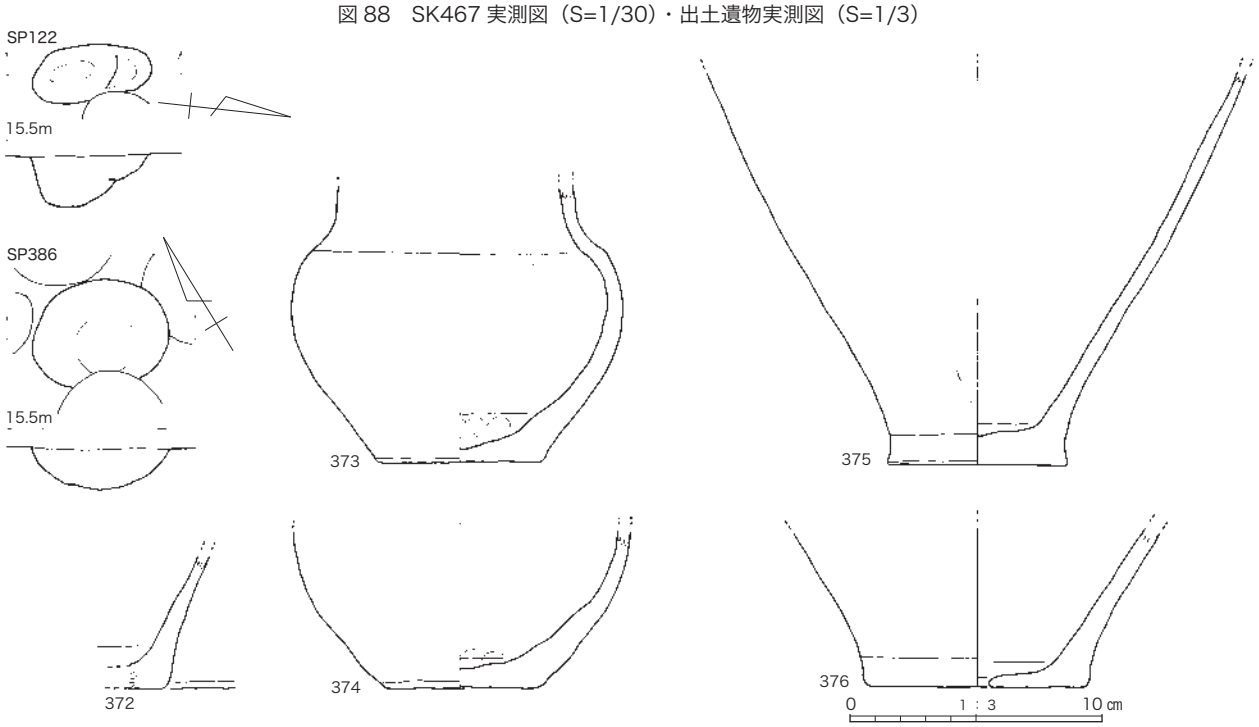



図 89　SP122・SP386 実測図（S=1/30）・出土遺物実測図（S=1/3）

### （6）不明遺構

調査区東側で検出した谷地形と、縄文時代・弥生時代前期の土器を含む不明遺構を取り上げる。縄文時代・弥生時代前期の不明遺構は、プランを明確に捉えられず、土色や土質で範囲を想定して掘削した。

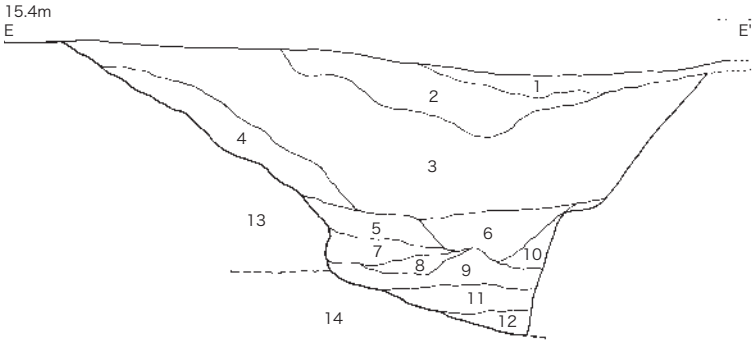
**SX006（図 90・Ph.79）** 調査区北東端で検出した谷地形である。東側に向かってやや緩やかに落ちる。中下位に段があり、その付近で土の堆積状況が変わる。壁面の観察で、13 層の黄色シルト土下に礫を含む 14 層の堆積が判明した。土師器もしくは弥生土器片が出ているが、いずれも小片で磨滅しており図化していない。

**SX073（図 91）** 調査区中央西、SC060 の下面で検出した。明確にプランを捉えたわけではなく、炭・焼土粒をやや多く含む暗茶色シルト土の範囲を掘下げている。

377 は縄文土器で条痕文土器の深鉢である。焼成は良く、暗茶色を呈する。外面は横位の条痕がみられる。内面はナデを施す。

**SX343（図 92・Ph.80）** 調査区南端で検出した谷地形である。東側に向かって緩やかに落ちる。埋土は暗灰色粘土、黄色粘土である。遺物は、須恵器坏身・坏蓋、土師器甕・甑など 15 号ポリ袋 1 袋分出土した。

378 は縄文土器で、黒色磨研土器の浅鉢である。焼成は良く、外面暗茶色、内面暗灰色を呈する。磨滅で調整は不明瞭である。379 は安山岩製の石鏃である。




1．淡黄灰色粘土　径３～５㎝の黄色粘土ブロックをやや多く含む。
2．暗灰色シルト土
3．灰黄色シルト土
4．暗灰黄色シルト土
5．灰黄色シルト土　３層より灰色が強い。
6．青灰黄色粘土
7．灰黄色粘土　５層と８層の漸移層。
8．黄青灰色粘土
9．青灰黄色粘土
10．灰茶色シルト土
11．青灰黄色粘砂　径１～３㎝の砂礫を少量含む。
12．青灰色粘土
13．黄色シルト土
14．明黄色シルト土　13 層より黄色が強い。径～ 10㎝の礫を少量含む。

図 90　SX006 土層図（S=1/40）

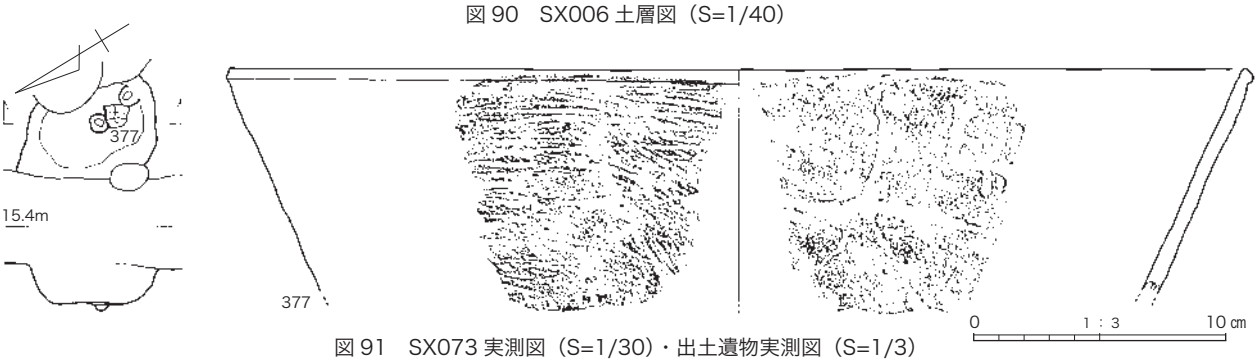



図 91　SX073 実測図（S=1/30）・出土遺物実測図（S=1/3）

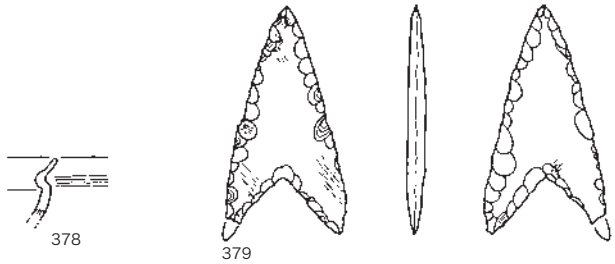



図 92　SX343 出土遺物実測図（378 は S=1/3、379 は S=1/1）

**SX450（図 93 ～ 95･Ph.81、82）** 調査区南側中央南西寄り、SC250 の下面で検出した。SD115 掘削時、溝の壁面に弥生土器甕が入っていたため、遺構の存在を認識できた。覆土は黄色シルト土で、地山とした土と変わらず、平面観察では捉えていない。土器が広がる範囲を任意で掘下げた。土器の検出レベルは標高約 15.0m、土器底面のレベルは概ね標高 14.9m である。

図 95 の 380 ～ 394 は弥生土器である。いずれも器面の風化が進んでおり、調整がわかる資料は少ない。380 ～ 393 は甕である。380 は焼成やや不良で、橙色を呈する。381 は胎土に径 2 ～ 3 mm の白・橙色砂をやや多く含む。焼成はやや不良で、外面淡橙色、内面淡橙色～暗茶色を呈する。調整は内面上部に指オサエ痕跡を確認できる。胴部内面にコゲが付着する。382 は焼成やや不良で、暗茶色～橙色を呈する。383 は胎土に径 1 ～ 3 mm の白色砂をやや多く含む。焼成はやや不良

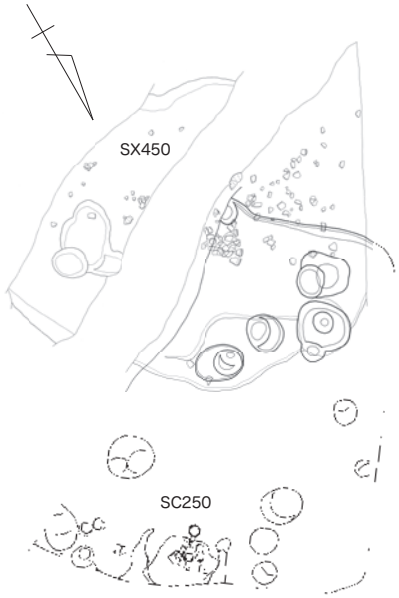



図 93　SX450 配置図（S=1/100）

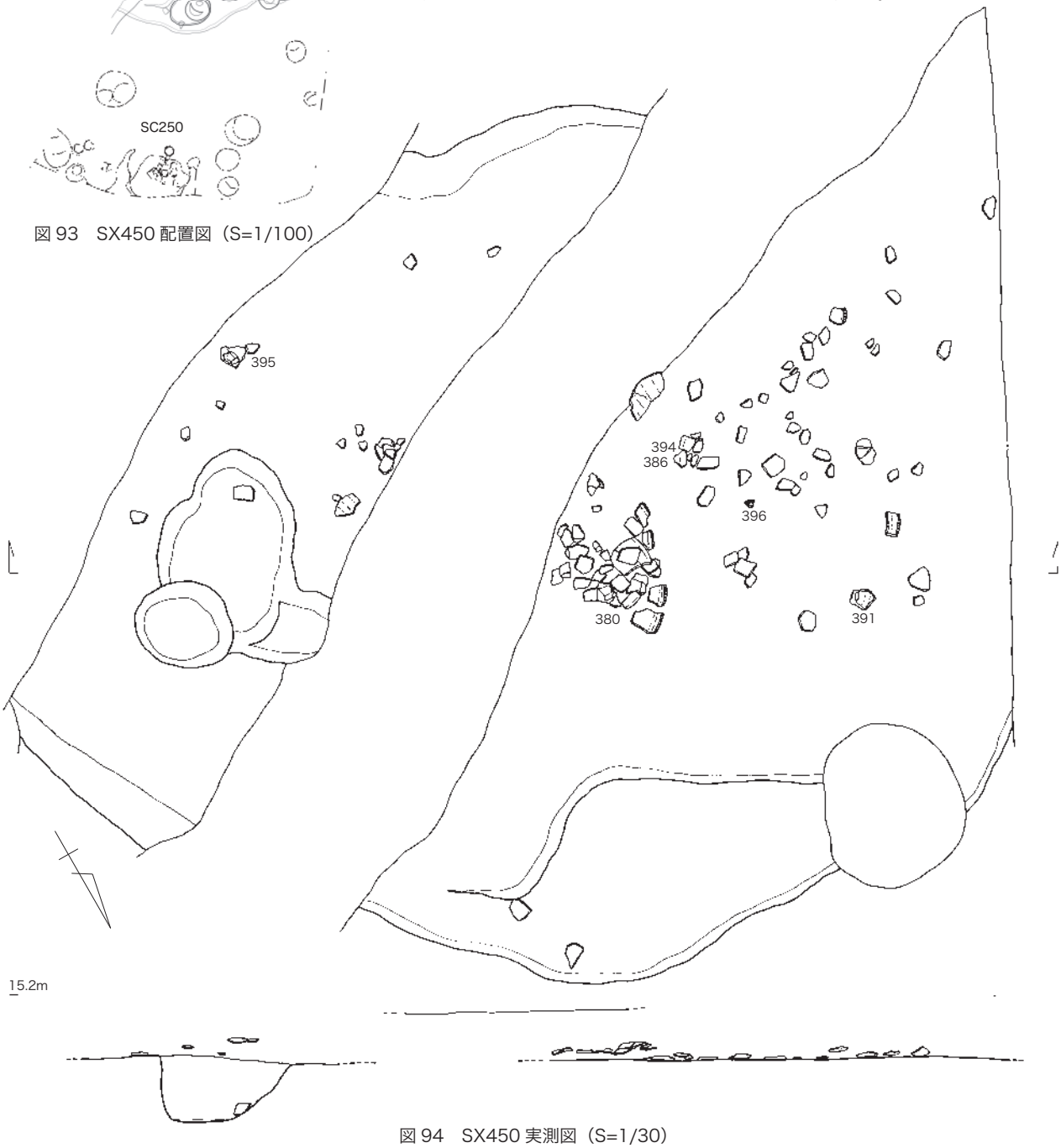



図 94　SX450 実測図（S=1/30）

で、暗橙色である。384 は内面に指オサエ痕がある。焼成やや不良で、外面橙色〜暗橙色、内面橙色を呈する。385 は焼成やや不良で、茶〜橙色を呈する。386 は焼成不良で、暗茶色である。径 1 〜 3 mm の白色砂をやや多く含む。387 は暗い橙色で焼成良好である。388 は胎土に径 1mm の白色砂を少量含む。濃い橙色で、焼成良好である。389 は胎土に径 1 〜 2 mm の白・黒色砂を少量含む。焼成良好で、外面暗橙色、内面橙色を呈する。390 は焼成不良で、外面橙色、内面淡橙色である。391 は胎土に径 3 mm 以下の白・橙色砂をやや多く含む。焼成はやや不良で橙色を呈する。392 は焼成やや不良で、橙色である。底部外面に指オサエ痕がある。393 は胎土に径 1 〜 2 mm の白色砂を少量含む。焼成はやや不良で、外面橙色、内面暗橙色を呈する。底部外面に指オサエ痕がある。底部内面にはコゲが付着する。394・395 は壺である。394 は底部で、焼成やや不良で、淡橙色を呈する。395 は胎土精良で、外面に工具ナデかミガキを施す。焼成不良、橙色である。396 は黒曜石製の石鏃である。透明感のある乳灰白色を呈する。

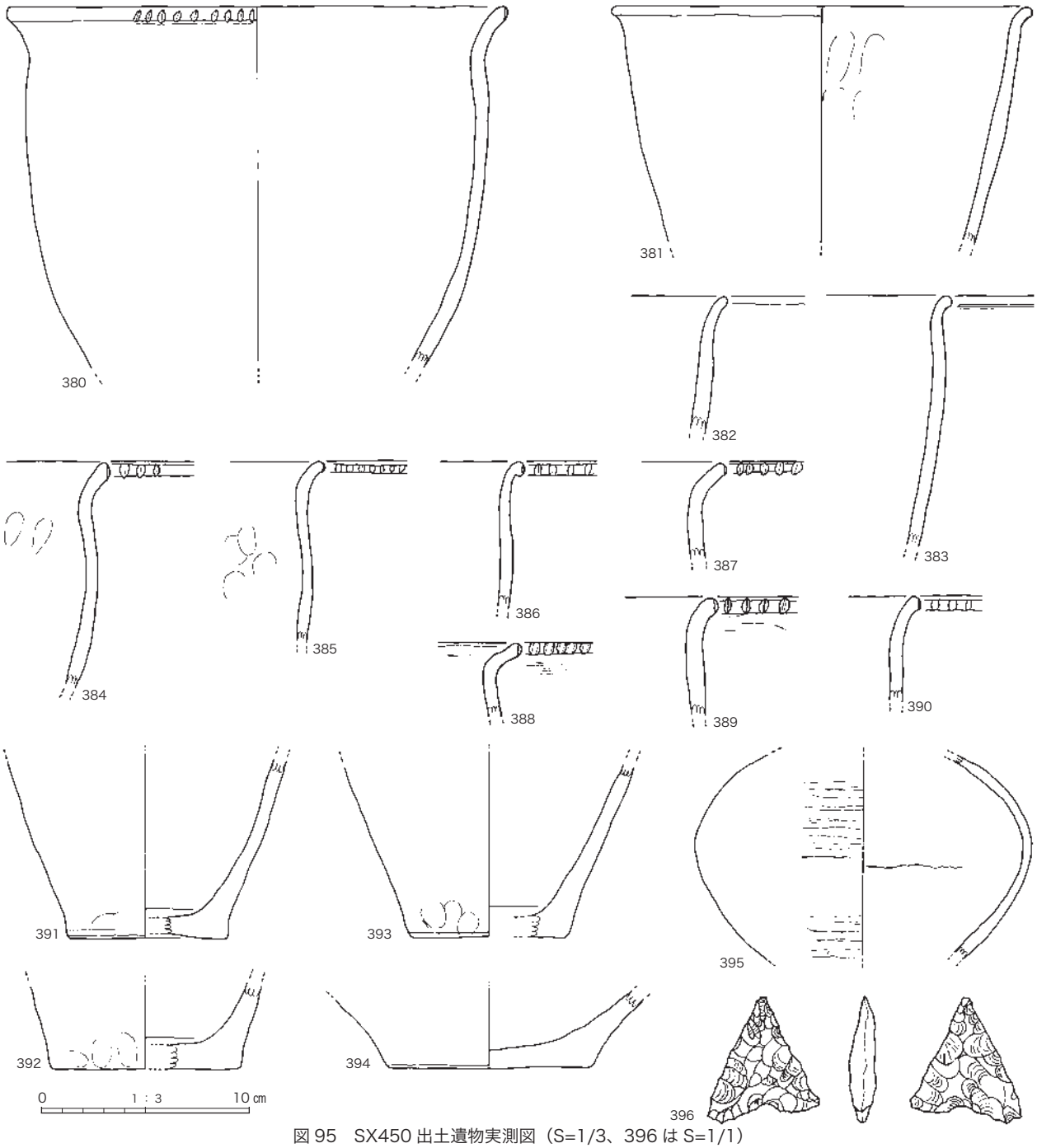



図 95　SX450 出土遺物実測図（S=1/3、396 は S=1/1）

**SX458（図 96・Ph.83）** 調査区南側中央南端、SC460 の下面で検出した。SC460 掘削時、建物壁面に 397 が入っていたため認識できた。焼土・炭粒を含む暗黄色シルト土から出土した。

397 は弥生土器甕である。焼成やや不良で、暗灰色〜暗茶色を呈する。調整は不明瞭である。８割残存する。

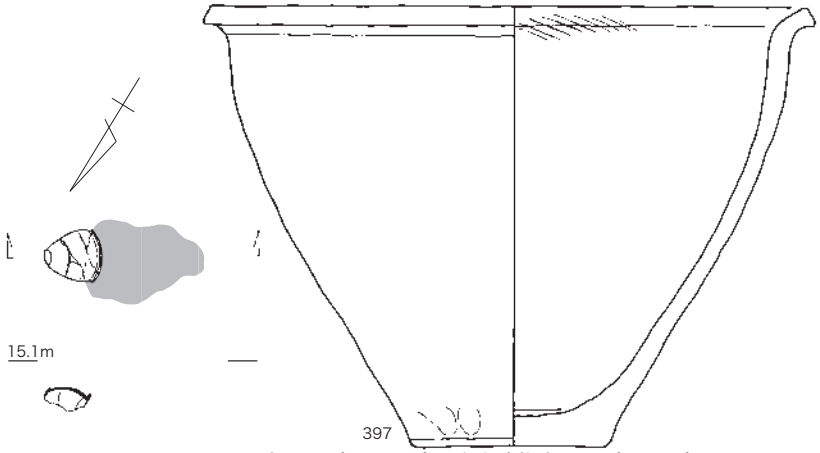



図 96　SX458 実測図（S=1/30）・出土遺物実測図（S=1/3）

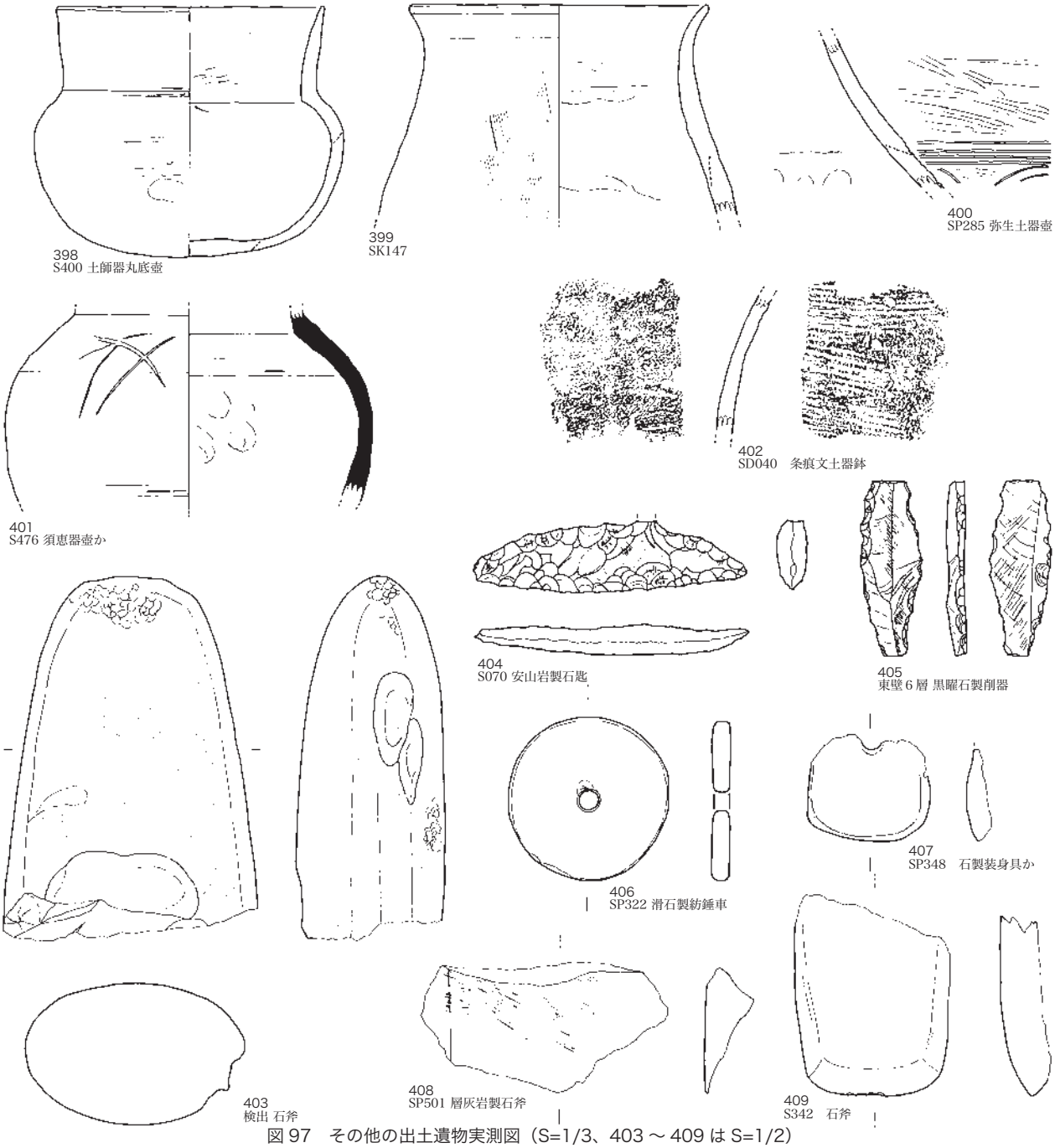



図 97　その他の出土遺物実測図（S=1/3、403 〜 409 は S=1/2）

# 第Ⅳ章　総　括

## １．第５次調査の成果

本調査であきらかにした点を以下にまとめる。

①縄文時代後・晩期、弥生時代前期～中期の土器・石器類が出土した。当該時期から生活痕跡がうかがえるが、明確な遺構は少ない。

②集落の最盛期は古墳時代後期後半で、竪穴建物 23 棟、総柱建物５棟を確認した。竪穴建物は壁中央にカマドがあり、４本主柱穴、方形のものが多い。名子遺跡北西の丘陵上に展開する湯ヶ浦古墳群と概ね時期があうため、それらの古墳に対応する集落と考える。集落の存続期間は短い。

③奈良時代の直線的な溝を確認した。そのうち SD150 はより直線的で、調査地点付近が西海道大宰府路の推定線上にあたるため、西海道大宰府路の道路側溝の可能性がある。

## ２．古代西海道大宰府路について

**駅制**　駅制は、駅（駅家）を拠点に運用された古代の交通制度である。中国に起源を持つ。駅家は、駅使・外国使節の馬の乗り継ぎや給食・宿泊の場で、養老厩牧令 16 条によれば、都と地方拠点を結ぶ七道を中心に、原則 30 里（約 16㎞）ごとに設置された。ただし、山陽道ではその約半分の間隔で設置しており（高橋 1995）、西海道大宰府路も同様である。その理由として、「山陽道は都と山陽道諸国とを連結するばかりでなく、西海道諸国をもつなぎ、交通量は極めて多かったため、駅子や駅馬の負担を少しでも軽減しようという意図」、「より高速の移動を実現しようという意図」があったとみる意見がある（市 2015:p.70）。

**駅路**　駅路とは、駅制で使用された道路をさす。都と地方拠点を結ぶ幹線道路で、大路・中路・小路に区分された。そのうち都と大宰府を結ぶ山陽道と西海道大宰府路（足利 1975）は大路にあたる。駅路の成立は、「白村江での敗戦を契機として、北部九州や瀬戸内海沿岸部では朝鮮式山城が多数築かれたが、直線駅路は山城の近辺を通る傾向が認められる」ため、７世紀後半から８世紀初頭とみる意見がある（市 2015：p.68）。なお、「官道」とは、駅路を含む７世紀後半以降にみられる直線的な計画道路をさす。

発掘調査では、道路痕跡として並行する直線的な側溝や波板状圧痕などが見つかる。大路・中路は道幅 12m 以上、小路は道幅６～９m が多い。直線道路を通しにくい急斜面の山間部では、「つづら折り」道路を採用する場合もある（坂本編 2021）。道路周辺の景観復元研究も進展している。鳥取県青谷横木遺跡では、古代山陰道に沿って築かれた盛土から出た樹木根を樹種同定し、柳と判明した（中村 2017）。

筑前国に置かれた駅家は、獨見・夜久（各 15 疋）、嶋門（23 疋）、津日（22 疋）、席内・夷守・美野（15 疋）、久爾（22 疋）、佐尉・深江・比菩・額田・石瀬・長丘・把伎・廣瀬・隈埼・伏見・綱別（5 疋）（『延喜式』兵部省諸国駅伝馬条）、蘆城（『万葉集』）である。名子遺跡第５次調査地点付近は、席内駅と夷守駅を結ぶ駅路が通る。

**席内駅・夷守駅間駅路の先行研究**　戦前は『延喜式』を中心とする文献の記述をもとに駅家・駅路を推定する検討が進められた。戦後は、歴史地理学では、糟屋郡の山陽道大宰府路推定線は各研究者の意見が概ね一致し、粕屋町戸原・内橋–福岡市東区土井・名子–久山町山田–新宮町立花口–古賀市青柳を通るとみる。ただし、詳細な路線は研究者によって異なる。文献史学では、大高広和が『万葉集』（巻六 963）にある「名児山」を検討し、近世以来の宗像市名児山説を見直し、①古代の宗像郡内、②官道ルート沿い、③名児山の別称をもつ三本松山を「名児山」と想定した（大高 2017）。考古学では夷守駅家（内橋坪見遺跡）・糟屋評衙（国史跡阿恵官衙遺跡）など、粕屋町の発掘調査成果が大きい。内橋坪見遺跡では大型掘立柱建物を検出し、大宰府式鬼瓦や赤色顔料が着いた軒平瓦が出ている（西垣 2014）。また、阿恵官衙遺跡検出では伝路を検出し、溝心幅 21m である（西垣編 2018）。

**名子遺跡第５次調査地点の奈良時代溝 SD150**　①出土遺物、②直線的に延びる、③西海道大宰府路の推定ライン上にあたることをふまえれば、道路側溝の可能性がある。ただし、対になる側溝や波板状圧痕は検出していない。また、敷設替えや存続時期など検討すべき課題は多い。

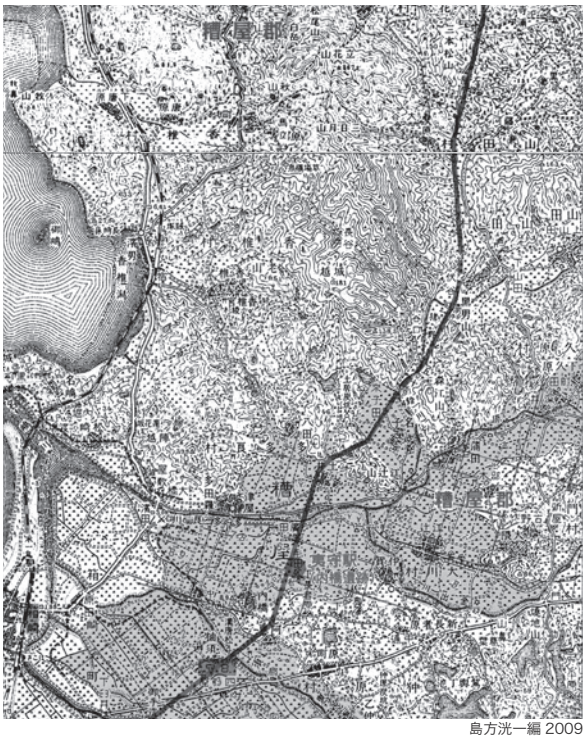
道路の整備は都･地方間の往来を活発にした。その影響は文献にもあらわれており､奈良時代の歌集『万葉集』には、都と地方の人びとの交流・共感を示す歌が数多く残る（上野 2020)。大伴旅人の異母兄妹である大伴坂上郎女の歌に名兒山の歌がある。

冬十一月、大伴坂上郎女の、帥の家を發し上道して、筑前國宗形郡名兒山を越ゆる時に、作る歌一首

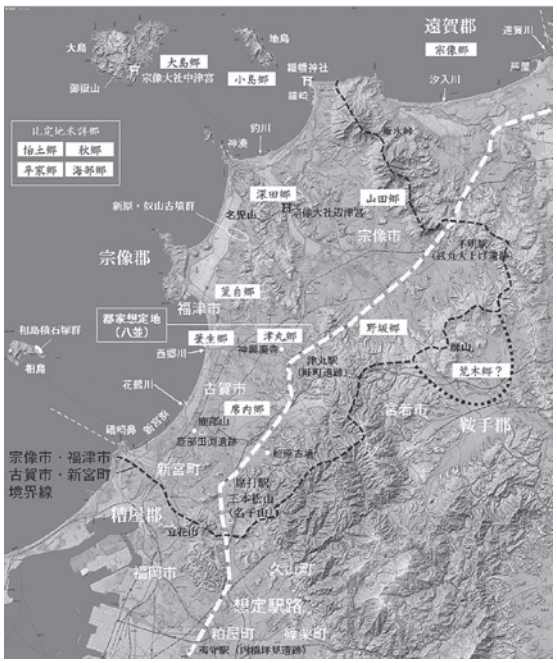
大汝　少彦名の　神こそは　名づけ始めけめ　名のみを　名兒山と　負いて　わが戀の　千重の一重も慰めなくに　(『万葉集』巻六 963)

歌にある名兒山は宗像市名児山のほかに、新宮町・久山町の三本松山（名子山）とみる意見がある（大高 2017)。名子地区から山あいを通り、席内駅家へ向かう情景が想起される。

図33　宗像郡とその周辺の古代交通路
木下　良 1999



島方洸一編 2009




図三　古代宗像郡の地形と範囲　大高広和 2017
※カシミール３Ｄにより作成（スーパー地形セットおよび国土地理院地図の混合。標高は２倍に強調した表現）

図224　夷守駅―席田駅間の想定駅路
木本雅康 2013

図 98　先行研究図

図 99　名子遺跡周辺の西海道大宰府路推定線

## 参考・引用文献


足利健亮　1975「５．西海道（９）交通」藤岡謙二郎編『日本歴史地理総説　古代編』吉川弘文館　pp.184-188

市　大樹　2011『すべての道は平城京へ　古代国家の〈支配の道〉』（歴史文化ライブラリー 321）吉川弘文館

市　大樹　2014「日本古代駅伝制度の特質－日唐比較と山陽道－」『播磨国の駅家を探る』（第 15 回播磨考古学研究集会　資料集）pp.26-39

市　大樹　2015「日本古代駅伝制度の特質と展開－日唐比較と山陽道－」島田拓編『播磨国の駅家を探る』（第 15 回播磨考古学研究集会　記録集）pp.34-88

上野　誠　2020『万葉集講義』（中公新書 2608）

大高広和　2017「古代宗像郡郷名駅名考証（三）」『沖ノ島研究』3 pp.1-12

木下　良　1999「第三章　律令制下における宗像郡と交通」『宗像市史 通史編 第二巻 古代・中世・近世』 pp.161-221

木本雅康　2013「第１章　地理資料からみた古代駅路」『新修福岡市史－特別編　自然と遺跡からみた福岡の歴史』 pp.271-279

坂本嘉和編　2021『青谷　古代山陰道－令和元年度・２年度発掘調査概要＆講演会記録集－』鳥取県埋蔵文化財センター

島方洸一編　2009『地図でみる西日本の古代』平凡社

高橋美久二　1995『古代交通の考古地理』大明堂

中村太一　2017「２古代の道路と景観」鈴木靖民ほか編『日本古代の道路と景観－駅家・官衙・寺－』八木書店　pp.23-61

永田英明　2004『古代駅伝馬制度の研究』吉川弘文館

西垣彰博編　2013『内橋坪見遺跡概要報告書』（粕屋町文化財調査報告書第 35 集）

西垣彰博　2014「福岡県糟屋郡粕屋町の内橋坪見遺跡について」『国士舘考古学』6 pp.105-120

西垣彰博　2015a「官道にみる夷守駅と糟屋郡家」『海路』12　pp.82-94

西垣彰博　2015b「筑前国夷守駅と内橋坪見遺跡」『考古学ジャーナル』665 pp.5-8

西垣彰博編　2015『内橋坪見遺跡３次』（粕屋町文化財調査報告書第 38 集）

西垣彰博編　2018『阿恵遺跡』（粕屋町文化財調査報告書第 43 集）

日野尚志　2005「比恵・那珂遺跡群を中心にして諸問題を考える」長家伸編『那珂 38』（福岡市報第 842 集）　pp.21-36

福島日出海・朝原泰介編 2019『戸原伊賀遺跡』（粕屋町文化財調査報告書 46 集）

藤野正人・山崎龍雄　2014「三日月山城砦群と城ノ越山城砦群の考察–対面する二つの巨大な城砦群–」『九州考古学』89　pp.63-86

溝田智俊ほか　1992「北部九州の緩斜面上に発達する風成塵起源の細粒質土層」『第四紀研究』31- 2　pp.101-111

山崎純男　1991「8984　椛の谷遺跡第１次（KND-1）」『福岡市埋蔵文化財年報』4　p.101

# 写真図版

Ph.1　第５次調査地点より名子地区を望む（北から）

Ph.2　調査区全景（南西から）

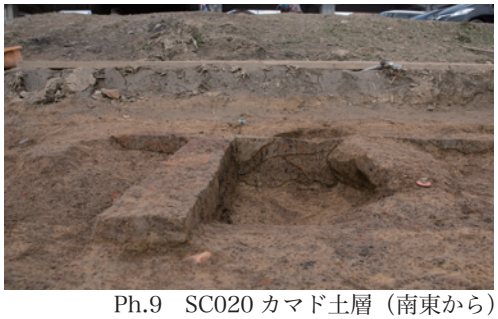
Ph.3　調査区全景（北から）

Ph.4　調査区全景（北東から）

Ph.5　調査区中央付近（南西から）

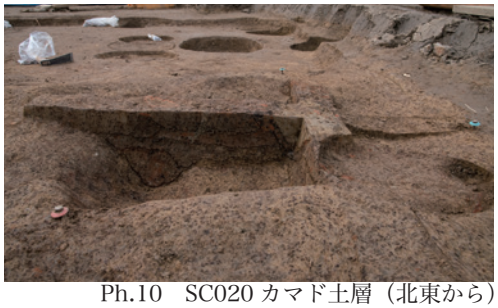
Ph.6　SC020（南東から）

Ph.8　SC020 カマド（南東から）



Ph.9　SC020 カマド土層（南東から）

Ph.7　SC020 掘方（南東から）



Ph.10　SC020 カマド土層（北東から）

Ph.11　SC050 カマド（南東から）

Ph.12　SC023（北西から）

Ph.13　SC050（南東から）

Ph.14　SC060 掘方（南東から）

Ph.15　SC080（南東から）

Ph.16　SC090（南西から）

Ph.19　SC100（南西から）

Ph.17　SC090 掘方（南西から）

Ph.20　SC100 掘方（南西から）

Ph.18　SC090 カマド（南西から）

Ph.21　SC100 カマド（南西から）

Ph.22　SC120（南東から）
Ph.23　SC120 完掘（南東から）
Ph.24　SC120 カマド（南東から）
Ph.25　SC120 カマド（南から）
Ph.26　SC128（南東から）
Ph.27　SC130（南東から）
Ph.28　SP179（北から）

| | |
|---|---|
| Ph.22 | Ph.23 |
| Ph.24 | Ph.25 |
| Ph.26 | Ph.27 |
| | Ph.28 |

Ph.29　SC170（北東から）

Ph.30　SC170 掘方（北東から）

Ph.31　SC210（南西から）

Ph.32　SC210 掘方（南西から）

Ph.33　SC175・SC192（南東から）

Ph.34　SC190（南から）

Ph.35　SC190 掘方（南から）

Ph.36　SC190 カマド（南から）

Ph.37　SC200（南から）

Ph.38　SC220（南西から）

Ph.39　SC220 掘方（南西から）

Ph.40　SC250（南西から）

Ph.41　SC250 掘方（南西から）

Ph.42　SC250 カマド（南西から）

Ph.43　SC250 遺物出土状況（北東から）

Ph.44　SC280・SK260（北東から）

Ph.45　SC300（南東から）

Ph.46　SC350（南東から）

Ph.47　SC460（南東から）

Ph.49　SC460 掘方（南東から）

Ph.48　SC460 遺物出土状況（東から）

Ph.50　SB240（北西から）

Ph.51　SB270（南東から）
Ph.52　SB270 完掘（北西から）
Ph.53　SB470 完掘（北西から）
Ph.54　SB525 完掘（北西から）
Ph.55　SD015 土層（北東から）
Ph.56　SD015 完掘（南西から）

| | |
|---|---|
| Ph.51 | Ph.52 |
| Ph.53 | Ph.54 |
| Ph.55 | Ph.56 |

Ph.57　SD030 土層（北東から）

Ph.58　SD030（北東から）

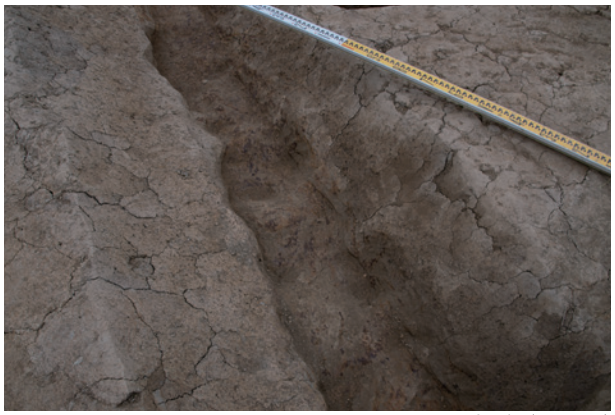
Ph.59　SD030（南西から）

Ph.60　SD115・SD150（西から）

Ph.61　SD115 土層（北東から）

Ph.62　SD150 土層（北東から）

Ph.63　SD150 提瓶出土状況（南から）



Ph.64　SD150 底面（西から）

Ph.65　SD150 遺物出土状況（南西から）

Ph.66　SD150 遺物出土状況（南から）

| | |
|---|---|
| Ph.67 | |
| | Ph.68 |
| | Ph.69 |
| Ph.70 | |
| | Ph.71 |

Ph.67　SD160（南西から）
Ph.68　SD160 土層（北東から）
Ph.69　SD160 杭検出状況（南から）
Ph.70　SD195（南東から）
Ph.71　SD195 土層（南東から）

Ph.72　SD507（南西から）

Ph.73　SD507 遺物出土状況（西から）

Ph.74　SK024（北東から）

Ph.75　SK260 土層（南西から）

Ph.76　SK443（北西から）

Ph.77　SK456（北西から）

Ph.78

Ph.79

Ph.80

Ph.78　SK467（南から）
Ph.79　SX006 土層（南から）
Ph.80　SX343（北西から）

Ph.81　SX450 遺物出土状況（西から）

Ph.82　SX450（北から）

Ph.83　SX458（南から）

Ph.84　調査風景（西から）

Ph.85　調査風景（南西から）

Ph.86　26

Ph.87　45

Ph.88　52

Ph.89　73

Ph.90　74

Ph.91　109

Ph.92　110

Ph.93　112

Ph.94　196

Ph.95　197

Ph.96　205

Ph.97　210

Ph.98　211

Ph.99　212

Ph.100　220

Ph.101　223

Ph.102　224

Ph.103　225

Ph.104　226

Ph.105　228

Ph.106　229

Ph.107　231

Ph.108　232

Ph.109　233

Ph.110　234

Ph.111　235

Ph.112　236

Ph.113　238

Ph.114　239

Ph.115　240

Ph.116　244

Ph.117　245

Ph.118　260

Ph.119　257

Ph.120　263

Ph.123　274

Ph.121　272

Ph.122　273

Ph.124　332

Ph.125　363

Ph.126　364

Ph.127　365

Ph.128　366

Ph.129　370

Ph.130　出土石鏃集合

Ph.131　出土石器集合

# 報　告　書　抄　録

| | |
|---|---|
| ふりがな | なごいせき　2 |
| 書名 | 名子遺跡　2 |
| 副書名 | 名子遺跡第５次調査報告 |
| シリーズ名 | 福岡市埋蔵文化財調査報告書 |
| シリーズ番号 | 第 1445 集 |
| 編著者名 | 神　啓崇 |
| 編集機関 | 福岡市教育委員会 |
| 所在地 | 〒 810-8621　福岡市中央区天神１丁目８番１号　　TEL 092-711-4667 |
| 発行年月日 | 2022（令和４）年３月 24 日 |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地 | コード | | 世界測地系 | | 発掘期間 | 発掘面積<br>㎡ | 発掘原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 市町村 | 遺跡番号 | 北緯 | 東経 | | | |
| なごいせき<br>名子遺跡 | 福岡市東区名子<br>三丁目 778 番 3、781 番 1、782 番 1、783 番 1、785 番 1、785 番 1、785 番 4、780 番 4、781 番 1 地先水路 | 40131 | 2829 | 33°<br>38′<br>32″ | 130°<br>28′<br>28″ | 令和2(2020)年1月20日<br>－<br>令和2(2020)年5月29日 | 2219 | 店舗建設 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 名子遺跡 | 集落跡 | 縄文時代～奈良時代 | 竪穴建物／掘立柱建物／溝／土坑／柱穴 | 縄文土器／弥生土器／土師器／須恵器／鉄器／石器 | |

| | |
|---|---|
| 要　約 | 名子遺跡は、猪野川が形成した沖積地上に立地し、縄文時代から古墳時代を中心とする集落遺跡である。第５次調査地点は遺跡の北端に位置し、古墳時代後期を主とする竪穴建物 25 棟、掘立柱建物９棟検出した。周辺には湯ヶ浦古墳群や森江山古墳群があり、それらの墓に対応する集落と考える。また、奈良時代の直線的な溝を検出した。第５次調査地点は古代西海道大宰府路の推定線上にあたるため、古代官道側溝の可能性がある。 |

# 名子遺跡２

－ 名子遺跡第５次調査報告 －
福岡市埋蔵文化財調査報告書　第 1445 集

2022年３月24日

発　　行　　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神１丁目８－１
印　　刷　　株式会社　宣巧社
福岡市南区塩原１丁目４番４号